断片

二〇一六

u_

（知らない事が…）

　知らない事がない。そこに有るあれも有るでもないこれも、それが何か知れに知れる。とは言え知れるなんて、知れるだけで知れている。高が知れている事の何処まで知ろうと、何がどうでもない。どうしてこんななのか、ならなら、こんな所に来てしまったから。にしても、そのどうして来てしまったかは知れない。なら知らない事が有るか、も、その知らないのは知っているので、知っているとも言える。それに、それは知らないんじゃなく、ここへ来ては、それを覚えて居られないだけで、ここを後にすればまた知れる、とは知れている。で孰れはここから居なくなれるとも知れていれば、知らない事はないも同じ。なのでこれは、ま、どうって事もないとも言えるし、これだけを知って置いて、それで済むとも言える。とは言え、まだ何一つ済んでいないのも確かで、そう確かと知れていても、そうしてそこから何が起こるかは、まるで知れない。とは言え、起これば直ぐにそれが何か知れるとも知れているので、これもどうって事もない。で起こるのが、こうしてここに来て居ると知る私をここにこう

して居ると私が見付けたと先ずは知れる事なら、全て私に知れているあれやこれやの内の、この世にしっかりへばり付いて、こっちへ遣って来る誰かが、何かの弾みに私を見付けてしまうしかなく、その誰かももう知れていて、そこに居るその名を呼んでみよう。彼が驚くのも当たり前、行き成り名を知られてしまって居ては。しかも声ばかりで姿のなければ。でも声へ目を向ければもう私を見付け、その私もまた彼に見付けられた私の姿を見て取って、自らそれを彼の手へと拾い上げる。そうして彼の手にした私の姿はとても小さい。その小ささで、どうしてここへ来てしまったかも知れるにしろ、そんな事はもう忘れて構わなくて、私はあれこれ彼の聞きたそうな言葉を残して彼を残して、ここを去って消えて行く。で彼は、何も知らない。何を知らないかを尋ねようさえなく、どうしたらそこに留まれるかも知りようもないなら、何処へか知らず落ちて行くしかない。しかし彼なのか。私が消えて彼だけが残るなら、その残った彼などまるで私で、消えたかの私は消え損なって、疾っくに名も知れない誰かでは。などと言えても言えなくても、私も彼もなく、ただ落ちて行くその姿が見失われさえしなければ、このまま何もかもがそのままで有り続けるかに。にしろ、どうやらそれは、落ち果てた辺りで思いも寄らない姿を晒すのが、その同じ、それとも違う誰かの、少し離れた目にでも映り、その姿は、この世の隅隅までの広さと重さを全て引き受けて身に纏うかに、とんでもなくどっしりと

していて、とても名も知れない誰かのようでなさそうにしろ、その姿が、静かに耳を傾けて居るのは、そこに身を投げてじっとして居る痩せて黒ずんだしたり顔の女の声。女が声を上げれば決まって男への恨み辛み。何処かの誰かをこの世の隅にでも息の出来るままに送り届けられなかった責めを独り負わされ男は逃げて知らん顔が、腹に据え兼ねるらしい。その誰かはこの世の全てを知れて、それでそこから消えるしかないって事らしい。って事だから、そうかそれで、私と言ったって名も知れない誰かって訳かな。なのでそんな事はもう忘れて構わなくて、そんな女の繰り言を聞かされる男の顔は、しらっとしてるけど、それで済む筈もないのは、だって、責めを負わされる女は責めを負わされるままならずっとそのままだけど、そんな事も忘れて居るなら男は直にする事もなくなって、さっさと消されるしかないって事で。で漸く男もぼんやりながら逃げ道のないのを分かってそれじゃ困る、どうするか、なら女独りのを幾らか肩代わりしたい、そうさせて貰いますって、でも男じゃ出来ないんだよ今更女に成れないし、成り済まして済むでもないし。で、名も知れない誰かの、どっしり構える名も知れない誰かで少しもなさそうな姿が間に入って、さてどうするか決めるにしろ、こっちは消えて、消えたのも忘れてそれで構わなかったのに呼び出されて、女の何が男の何がって、どっちでも二人の良いようにすればって思うのも煩わしくなればもう、二人の声も姿も初めからなかった

かに跡形もなく、狭く嶮しい山道を疲れて骨まで痛い体を押して奥へ奥へ登って居て、頂は行き成り広く開けて真っ平らで、そう、分かっていたさ、だから登って来れたんだ、そこにはずっとこの世の終わりすらなくて、真っ平らなここでなら、小さな体を思うまま飛び回らせて。いや待てよ誰だ、後から登って来るのは。そうか行き成り名を呼ばれて何も知らなかったあの彼、じゃないかも知れないけど、他に浮かばなければその彼はもう色んな事を分かって、それも知らない事がないような分かり方じゃなく、知れる事と知れない事が有るのを色色と見て来て分かった事を積み重ねて、知れない事がないなんて事は思いも寄らないので心は安らえもして、なので飛び回るばかりの小さなのを見付けても、さも通りすがりのように静かな声で語り掛けられもする。「そこで何をしてるんですかって他ならぬ私に尋ねられるあなたは、何処かで見覚えがある、この私の声に洗い出されるかのその細く撓る濡れた背中のぬるりとした震え方とか、さて誰でしたっけ。いやこんな尋ね方じゃいけないのかも知れない。もっと違ったか、例えば回り込んで来る風の微かに鳴るように。それも鳴るような風など吹かなかったかに。」「何をどう尋ねられようと構わないよ、同じに答えなてあげよう。それはこれこれこう言う事さ。」「そうかそれですっかり分かりました。さっぱり分からないようでも、その分からないようなのはすっかり忘れてしまえて、それですっかり分かるって訳ですね。いや分かるってそう言う事

ですもんね。なんて分かったような事を言っちゃいましたね。さてそれで知らない事も全て忘れてしまって居るみたい。なら知らない事なんてない…おっと危ない、でも何が。」と足元がふらつく彼は、そのふらつく足を態とふらつかせ続けて、それで何かを探り出せたらと。そう見た小さな体が益益素速く辺りを飛び回ると、彼の足はふらつくどころか縺れて独りでに転びそうで、それが真っ平らな所に立ち続けるしかないからと分かって、「真っ平らがこんなに真っ平らだとは知りませんでした、だってそれはここが真っ平らなので」と、言う事も言えば言う程ただ真っ平らになってしまって後戻り出来なくなりそうだなと黙り込むと、「でしょうとも、もうあなたに答えられる全てを答えましたので、そっち」と、そっちだけは真っ平らでなく下っていて、「分かりました、ではまたあなたの名を。どうやら聞きそびれたようなので。」「だってまだ名乗ってませんからね。名は」とそれは、聞き覚えが有りそうなので頭に入れても直ぐに忘れてしまうにしても耳に通れば、何も見なかったかにそそくさと、その耳の奥の温かさを守って待つ人へ持ち帰るかに柔らかな足取りで、細く撓る背中を尖らせ揺らめかせて彼の遠ざかるのも、もう見送ってさえ居なくて、ただ静かで、飛び回る姿も何も見当たらないなら、この身もまた真っ平らに違いなく、動かない時の一日の始まるばかりのようにきっと、何処もがさっきより暗い。身の真っ平らなだけが明るくもなさそうに明るいようでもあるにしろ、

話し掛けて来る声に耳を奪われずには居られない、と言うより、真っ平らな身を真っ平らから引き千切られるように激しく耳を奪われたくて声を探すしかなく姿を現す声は、恐らく声ではないので直ぐに耳の奥へ隠すように閉ざして、聞き取れていると間違われているのだと聞き取れるのは、「どの途、何の光りも届かなくても、明るさは有りましょう、だって、私達はここに有るのですから、無いより有ると私達で見分けられて。」「ええ分かってましたとも。」と間違いかも知れない暗闇、それならきっと間違いなく暗闇なんだとどうしても思えてしまう、少しも暗闇には見えなくて却ってそこにしか暗闇はなさそうな辺りに声を掛けると、そこに、冷たく動かない幼子を細い指の汚れた爪を立ててそっと鳩尾にやっと抱き留めて危うそうな女の斜めに立つままの姿が動いて、「もう埋めなければ、どうにもいけません、でもどう遣って。」その子の肌はもう束ねた女の髪より濃い紫より暗く、「ええ、でしょうとも、それなら土が要りましょうね、その子と同じに冷たい土が少なくとも一盛りは。」と言って心付くのは、土を頼むならさっきの彼しかなくて、でも彼の引き返す事はもうない、いやどうして一盛りばかりで足りよう小鳥を埋めるでもなし、先ずは穴を掘らなければ、でも真っ平らなここは、どうにも真っ平らで、などと、このままぐずぐずして居ては、女の立ち姿の斜めへ動く危うさが、こちらの真っ平らまで危うくしそうで、取り敢えず女から子を抱き取ったにしろ、真っ平らな

身が抱き取ったのではどう抱き取ったやら。と、まだ一日の終わるまで休まず黙って働いて真っ暗な細い道を家に帰るしか知らない草と土の匂いしかしない通りすがりの、私でもあの彼でもないならきっとまだ名を尋ねられた事もない小さな者の胸に預けられたのが、生まれて間もないもうすっかり冷たい私で、その再び開かない瞑った目の奥に、この世が穴の底そっくりな真っ平らに映るにしろ、何処にも、（二〇一六年二月二十四日）

***** ***** *****

この一息を惜しむための文例集
（二〇一六年二月十八日～四月三日）

時に背を向けた筈が隣の禿げ頭の向こうにだけめりめりと音でも立てそうに沈む夕陽の色は幼子に盛る毒のように甘いのにそれを手に掬おうにも掬えない指

の骨の痛みを嘲られるだけの悔しい時に攫われてしまう。（二〇一六年二月十八日）

重い翼を持て余して転げるように眠っていたと言った同じ口が足を繋がれた儘夜の溢れ返る川を遡ったと言えるのは山の連なりより太い磨かれた鎖が右へ左へ翳されてそこにどう捩れようと囚われる姿が止め処なく映されていたから。

頼んだら明日は水を飲んだら帰らない客がひっきりなしだと断られ喉の火を唾で消すにも疲れて水を担ぐ者らに引っ切りなしに跨がれては唇の縁なら口を結んだ切りで舐められた舌は燃え爛れて却って水底の石と転げるかに眠れそう。

壊れて直せない諍いはお気の毒で見ていられないと嗤っても愚痴としか聞いて貰えないのは言い訳に使えそうでもその嗤った奴から消えたか消されて行ったのもそこそこ見て来たのでそんな心根を見抜かれそうな目も伏せて置く。

何事かを成すべしと近頃言われなくなったのは空の青が怖い程に深くなり過ぎたからだと皆で決めたと聞いた時には泣けたと言う話しを広めようとしているのは誰かを探り当てたい奴なんて他に居ない。

心残りに祟られて残った心ばかりが燃えてしまえば何が心残りだったかは灰の中から見付かる筈がどうやらそうでもないらしい。

あの日の空を見たくなって萎びてどろりと腐り始めて赤い虫が幾つもすばしっこく這う林檎の窪みに唇をじっと当てて時なら有るのにどうして何もしてあげられないのでしょうと尋ねて見上げるこの空では見えたかは知らされない。

女を見る目のない男が多過ぎると言う女が確かにどういう訳かあなたの周りにはそんな男ばかり寄って来ますねと言われ男を見る目のない女が多過ぎると言う男がそんな女さえ寄って来ないのによく分かりましたねと言われてお開き。

嫌われると分からない筈はないのにそうするのはもっと嫌なのは世の中なのだと疑いもせず隠そうともしないからでそう仕向けた世の中からずっと嫌われて来たとも思い窮めているらしい女のその自らの顔を見られるのも嫌そうな顔。

直に上がったその死に顔がとても嬉しそうで目を覚ましたら直ぐにまた海の中へ遊びに行くんだな羨ましいなとばかり思えて速い波の間に傾く陽を負ってす

っと浮かぶ立ち姿の乙姫様の切れ長の目が陰ながら据わっていた幼い日。

地べたに仰向けで背中に土の湿り気が冷たく浸みるのを待たなければ浮かばない白白しい嘘を何時でも吐き出せるよう舌で転がしていて息が出来る。

腕の重さは右と左で酷く違ってそのどちらがどうか忘れて何とか体を巧く使えていたのにこの頃ふとどちらかが空のように軽かったり海のように重かったりして澄まし顔で居られるのも何時までかなと潮風だけが真っ直ぐに見える。

寒いのは暖かさが足らないのではないし寒さを幾ら除いても暖かさは来ないと分かれば暖かさが何処から来るかを寒さは知らず暖かさも寒さに就いて何も知らないとも分かって初めて色まで変わる目を振り向けて西と東とを指差せる。

言いたい事なら必ず一息に収まって収まらないのは言いたくもない事を言わされているに違いないにしろひょっとして言いたくもない事しかこの世にはないのではと疑われるこの一息ならさっさと一息に切り上げたくての一息かも。

窓が見てるんだぞと聞こえたのは壊れた石塀に溜まる泥に咲く菫を窓の外に見

付けた時でそれは窓から私への声ではなく菫が窓に向かってそう言ったのは菫がこちらの窓を睨み付けているので分かる。

いきなり流れる聞き飽きた○歌などは雑音混じりで彼らのこの○を小馬鹿にしている腹の底をほら見ろよとさらりと見せたくてそうしているのかなと思えてしまうのは気のせいなので忘れようとその度に思い直されるのも何時までか。

思い立って窓よ海亀を飼うかと誘うと満更でもなさそうで次の日大きなのを買って帰って放そうとすると待ち切れなかったか窓の空を独り占めする海蛇が狭そうに身を拗らせるは良いにしろ石の海亀が窓を塞いでどうにも動かない。

気の進まない事を一つ已めて駆け上がるとはぁここが二階かと見回す壁も窓も床も余りに見慣れて初めて見るようで眠くなってはと転げ落ちた下で先に布団に寝ているのは誰と誰かが指差されたのは夢と振り切れば誰とも同じ一人。

一頻り降った雨は今朝も上がっていてその幾夜か続いた雨が夜を繋げて繋がって白い腹を見せる蛇のように這い出るのは昨日へでも明日へでもないならずっとそっちへ行きたかった向きなのに独り身を誇るかに蛇は濡れてつれない。

雨に濡れる度に顔は白くなるので土砂降りには顔を晒して歩き回る内肌の色が透け肉や骨や脳の色が現れてそれも透け顔が皺と染みと毛穴の黒ずみで覆われてもそれを見て取る目玉だけはずっと変わらないで独り時を持て余して居る。

根を生やすのは足ばかりか体が丸ごと一つの根っこでそれが何から何を吸い上げているか分かれば別に働くまでもないと何故とも知れずそうはっきり分かれば眠りも目醒めもせず疲れ知らずに働けても力を余す内にもう飽きて已める。

陽が戻るまでさえ醒めた儘に居られない重い病に罹って当たり前に生きる障りだったのがやっと治ったに違いないなら眠って居るものは一つもなく昼と夜も要らず夏と冬さえ要らずに先のない道がすっきり何処までも続いて悦ばしい。

波もない静かな夜に何の騒ぎだと独り騒ぎ始める男が指差す空には暗い海が流れ込み問い詰めようにも男は月や星の骸の散らばる剥き出しの海の底に蹲って乾き過ぎた耳を今更に塞いで居ては再び戻らない星月よりも潮の音は尚遠い。

真下に水を真っ直ぐ覗き込むのが何より好きで飽きないのは怖いものがないか

らで水の底が向かう先のような誰の目も届かない所へ運ばれる独りの足はぐんぐんと危うさを踏み消す程に軽い今ならばその今を水の向こうまで届けたい。

焼け跡がどうとの惨めな話しから黒焦げの鍋底にさっきまで麦や椎茸や人参の姿を誇っていた炭のその影ばかり刻まれる端に僅かに湿る小さな砂粒が噛み砕かれるのを免れて黄ばんできらり笑むのが浮かべば先がひんやりとは見える。

ゆっくり呼ばないと同じのが二人来ると分かっているのでゆっくり呼ぶと二人来て何故だと問うとお前がゆっくり名を呼んだからと答えた手前の奴がしまったしくじったと言う顔で黙って走って逃げた後ろの奴の頼りなげに捩れる脚。

何を着ても似合わず全く嫌になって着るものが無くなってずっと丸裸で居て間違いなく裸より似合う姿はないと思えて仕舞えば何を着ても似合うので有りと凡ゆる装いに身を凝らしたくなって困って戻ろうにも裸はもう見付からない。

あなたを追うしかないあなたに追い詰められているなら罪はあなたに有ると言われそう考えるのがあなたの罪だと言い返せてもそうして罪を受け入れないのが決して消せないあなたの罪だと言われたりで罪とは何と使い出のある言葉。

罪とは心を働かせる事で罪から逃れるには心を端から端まで断ち切るしかなくそうして断ち切れたと分かるようなら断ち切れていないし断ち切れたと知りようもなくなれば断ち切られた心の罪の行方も知りようはなくてまた心は働く。

畳まずにおいた服の上の猫の丸いのは常の事だが毛色はすっかり違って取り取りで陽を真面に受ける喧嘩を売るような目付きは十日前に捨てた旧い仲間の恨みを残したままの三十年は先のものと見えれば心安らぐのにそうは見えない。

言葉の罪を言い立てても罪は消えず償われず言葉に罰は与えられないのを好い事に言葉は言葉の罪で言葉を覆って罪を覆い隠し言の葉とは良く言ったもので積もりに積もってそれらばかりで穢れ果てた眺め。

己の言葉に縋り付かなければ生きられない奴の繰り出す言葉が活かされさえすれば罪は何時でも何処からでも誰もが認める全く当たり前の正しい事として易易と湧き出して来て何時の間にかその罪の泉を涸らすのが罪にされて仕舞う。

その石に刻んで伝えたかった事は伝わらず伝えて欲しかった事も伝わっては来

ずそれでも別の何かがきっと伝わってそれは忘れられて行きその忘れられたのも伝わらないなら良しと見上げる山は明日にも流れるか。

首に刀が刺さってますよと言われ負け惜しみに禅ですと答えると負け惜しみでしょうと見破られはしても首をぐるりと撫でて刀は刺さっていなければ禅は負け惜しみではなかったとは言えそれが禅であるかは分からないのそれとは何。

声は必ず耳に寒いのをどうしても確かめたくて探し歩いてやっと聞けた声に明日の寒さに就いて熱く語られては冷たい吐き気を熱く奮い立たせるしかなくそれでやっと閉じた耳なら確かに寒いにしろ何の声ももう届かなくて寒いとは。

誰に会いたいかは分かっていてそれが他に考えられる事を分からなくさせるのでその誰かは何も分からない中に際立って愈愈それしか分からなくなればそれが誰なのかも分からなくなる。

遠出して道に迷ってもぐんぐん前へ歩けるだけ歩いた所で木の枝を一つ拾って振り返れば戻る道は直ぐに見付かってもその枝を何処へ持ち帰れば良いかしか分からなくてさて来た道へ戻れるかどうか。

咳で独りなら何だともう死んで大分経つ父の血みどろの笑いを地べたの泥水を啜って潜って来たよと言う嘘。

嘘を語るか聞くかでなければ息も出来ないなら人は嘘で生かされているにしろその事が嘘でないからには人は嘘を生きたくても生きられずそれで嘘と聞くと矢も盾も堪らなくなり大して脹らみもしない嘘の脹らむ話しへと駆け寄る。

何故か嘘と真を見分ける人がいてどうして見分けられるんですかと尋ねると真は知らなくても何が嘘かは分かると嘘を吐かれたので成る程この人は真に嘘を生きてるんだなと騙されたのは嘘ではない。

馬鹿に付ける薬はないと言う彼に付ける薬が見当たらないのは日頃から彼がその薬をせっせと買い占めているからなら彼はただ馬鹿が羨ましく己が馬鹿になれないのが悔しいんだなと分かって幾らでも安い薬を高く売り付けられる。

待っても待っても帰って来ないのは出掛けなかったからでそれなら彼らを全く見掛けないのはおかしいと言う向きもあろうが出掛けなかったのなら抑も初め

から居もしない彼らを見掛けるのがおかしい。

直ぐそこの何かがぴたりと閉じている狭さが迫ってその行ける筈もない閉じた向こうの誘いに乗るより真面な事などもうその眺めに背を向けて何もない海へ来てしまった。

或る日身嗜みだけは隙のない殿の腰巾着に呼び付けられて日本紀の局は君分かってると思うけどね君のあれあそこらの女房共にこの頃の先が読めちゃってどうもねなんて評判立てられたら君の替わりは幾らでも居るからと言われる。

残る一つ茸を食う食わないを迷って夜道を歩き回る内その茸が血を通わせ息をし家から這い出るので慌てて向かうのは茸達の喧しい集まりで今足さえ止めれば茸にならずに済むがそれでは死ぬのも儘ならず露と消えそうで恥。

傷だらけの指を火傷するまで炙りたくて立ち枯れた向日葵を積めば背程も取り集め着ける火がないなら諦めて何日かして重なる茎の奥にこっそり点った炎は指の傷など知らず大風にその丸ごと吹き攫われるまで強い雨さえ弾いた。

ただ一つどうしても問わなければならない事が有るならどうしてこの世には問わなければならない事が有ってそれがなくならないかにしろどうしてそれがどうしても問わなければならないのかが分からないのはそれが一つの儘だから。

雨の道端で迫る山の絵を描く肩越しに男と娘が巧いねと囁けば絵は空ばかり重く薄い山を押し潰しそうで慌てて濃く塗る山の却って透けて走り去るようなのは彼らが絵の空ばかりを見詰めるからか山がすっかり霧に閉ざされたからか。

雲を眺めふと隣に暫く会わない知り合いが矢張り雲を眺めて居て死んだ者の姿とそれを疑うのは暫く会わない儘に再び会わないなら彼は死んだも同じで死んだと知っても思い出せる姿は生きているからと考えている内に居なくなる彼。

お伽噺など信じて遣って行けますかと尋ねても信じるようにならねと嬉しそうでそんなでは先は有りませんと諭しても先なんて生き惜しんでる奴らの言い草さと来ては先を急ぐ身としては置いて行くしかないなと言い捨てて消えた人。

直に消される身にはこの世へのひたすらな憎しみと諦め程頼りになるものもなくその易しい手引きとして夢と望みと喜びが予め一人一人に手渡されているの

ならそれを穴を掘って埋めれば良いだけだし埋め損なっても泣き喚けば済む。

柱を立てるのは何かを始めたいまたは終わらせたいからでそうしても何も始まりも終わりもしないと何故考えないかならそうしてもしなくても何も始まりも終わりもしないと分かってても何もどうにも出来ないのを黙っていたいから。

柱を立てないでは何も始まらないし終わらないと言って柱を立てるそれだけで始まりの終わりをも終わりの始まりをもすんなり得られて恵まれ過ぎて恐ろしくもあるにしろそれには知らん顔を通そうと決めてその時限りに柱も立つ。

大風で港は壊れたのに今更帆を売り歩く男の背に巻く小さな風の渦を手で掴むと影絵でそれを誰の仕業だと偉そうに怒鳴る男の姿が余りに横向きなのでお前が誰だと怒鳴り返したままでは良かったがまたの大風を待つしかない身とは。

それがそこに有りさえすればこの世とあの世に有り得る全ては創り尽くされているのそれは何でも構わなくても必ずそれでなくてはならない。

靴を履いてまで泣かなければならない訳なんてないのになと嗤われて泣く子の

背を撫でているとその背に落ちる涙の止まらないのは誰かの泣く代わりに泣く誰かでその泣き顔を振り仰ぐ子の尖った目に睨まれればその奥へ消える。

絞め殺される夢に魘され歪むばかりの顔は何と穏やかですっと心を和ませるのは彼が未だ生きているのと孰れ死ぬのとの二つの他にその顔から何も見て取れないからなら醒めた顔は要らないものをどれ程貼り付けているか。

掛け替えのないそれ一つ切りを失ってこの世は目に触れたくもない薄汚い下らない嫌なものばかりでもそうであるのを忘れて居られるか忘れずに居られるかでのっぺり拡がり過ぎも狭まって尖り過ぎもするのが何ってそっと叫んで。

月明かりの喧しさに耐え切れず背を向けてもまた月明かりで北へ北へ追われ遂に月明かりに呑まれそれからどうなったかなど分かる筈もないのに分かった顔で月明かりがどうとか喋り続けられるのは何故かは分かろうとも出来ない。

初めの一言目で必ずもう全ては言い尽くされその一言にこの世の何も尽きているのに喋り続けるしか仕方なくてどうするかなら壊れた言葉を繋いで言い尽くされない話しをでっち上げさも言い尽くしたかに顎を反らせて切り上げる。

読ませるものを書いたり書いたものを読むのは書き手と読み手が一心同体な蛸が自らの脚を食って腹を満たしているようなものなら読まれる有りきで書かれるものは全て蛸でそこを逃れて書くには読み手など何処にも居てはならない。

読むという穢らわしい行いから足を洗わなければ始まらないのなら何処からか語り出される聞こえはしても唇に読まれようのない声が何処へとも語り失せる辺りを彷徨いて酷い間違いと心に刻みながらにその声の底へ身を投げるとか。

それを悲しみでしか表せなかった悲しみしか残らないそんな悲しみは要らないと思う時にはもうその悲しみも消え悲しみを取り巻いたものを思い出すだけの悲しみの先が見えなくては悲しまれるしかなかったそれはなかったも同じと。

誰も知らない言葉なら止め処なく溢れ何処へでも何処までも行けるだろうになまじ分かったり分からなかったりされるばかりにそれは刺刺と閊えて滞り仕舞いには息を止めるかに黙り込んで済まないなら知らない事だけ喋って居たい。

夢なら橋を渡る所から必ず始めるのに何処を探しても橋の見付からない夢から

醒めると温い闇の向こうから雷の橋をぎこちなく渡る音が薄っすら届いてまだ
どうやら醒めていなかった夢の端を消えた橋へと引き伸ばされる真昼の暗さ。

昼の見えない闇は見えないから闇であるのは真っ直ぐ前へ歩いて何かに当たっ
て倒れ額も割れて仕舞うのは右目は右左目は左しか見えていなくて真っ直ぐ前
ばかりは見えているようで見えないと分かって初めて知れるでは遅くないか。

動かしようのないものは置き忘れようがないのでついうっかりと言う言い訳は
ついうっかり体を何処かへ置き忘れて来ましたと言うようなものでその通じな
いだけその体も動かし難く取り替えようもなく穢れて行くばかりを繰り返す。

雨上がりに決まって来る吐き気を止めに行く山のゆったりと繰られる震えに合
わせて登る足の速さが定まれば後は硬い岩肌を踏み上がる音の少しずつ鋭く高
まるのが腹に響いて閊える胸は麓への光る風を腸ごと長く延ばして吐く。

見下ろすと彼処までも獣も避けそうな濃い森で登る頂を間違えたかとどっちへ
下りるか迷っていると足らない人でも充てるかに次次登って来るのが幼顔の腰
の細い男ばかりでは身を投げる隙間すら塞がれて山また山は奥へまた深まる。

それは何と何がどうとかでなくただそれであると分かればあれもこれもそうでそうしてそれらはどれもただ一つでそれらを繋ぐものを失ってそれらで一つであろうとする事もなくなればなくならないものは一つもない。

白い壁に塞がれたらそこを照らす明かりを落とし薄暗がりの中に真っ暗より暗い唯一つの色の赤の匂いを嗅ぎ取ってその水のように濃い匂いの届かない壁の奥へと身を透き通らせる。

あいつらよりも生き長らえてこんな謎も解けないのは恥と走り回って解こうとしているのは恥と言う謎でしかないのが謎でただ生き続ける謎は独り深まるばかりなら命は何かの間違いかに硬過ぎて削りようもない儘に運ばれて行く。

春でもないのに若葉の香りが届いたらそれを運んだ風に月を数えさせなければ危ういのにその差し迫っているのを態と見過ごし先を切って進めば明るく真っ直ぐ込み上がるばかりの已まない笑いの何と心強い。

草生した坂を登る疲れた脚から戻る血の巡りに酔ってふら付いて横に揃った草

の隠した泥濘に滑る身を立て直す目に止まる振り分け髪の童が日暮れの分かれ道を抜けて行く先は確か藪から行き成りに暗く切り落ちる深い崖。

深い息を吸うには見晴らしの良い所でないとどんな毒を吸わされるかと見晴らしの良い所で死に至る濃い毒の風を思い切り吸ったにしろ風の温さにしっくり来なくて少し寒くても一枚脱ぐかどうか悩ましい程に生きる事はつまらない。

出掛けは晴れていたのに直に曇って一重の服の色が酷く重苦しく見えきっとそれで誰とも目が合わずすらすら歩いて行けると分かる褪せた心の奥を灰のように撒いた空は曇る儘にも澄んでもう走ろうと転ぼうと何と触れ合う肩もない。

いきなりの霜の降るかに斑な山肌は海にも陸にも目が利いて戻って来るよ返して来るよと呻いていても指は深間に嵌まって濡れるまま引き抜けもせず気怠さに身を丸投げのその身を捧げる海も陸もないなら何処へ。

はい知ってる丸はと明るく問われても皆の答えは船の名人の名旗の名と次から次へ色色でその勢いに圧されて僕が全く丸丸ただ丸なんですと名乗れずに居て丸ごと丸でなくなったかでなら丸丸丸丸丸でないを今更に探しに沈む。

一字一句さえ手渡された俄作りの日本語で何が書けて書けないかその境目に目を凝らしてでしか書けなかったその男は或る日その手持ちの言葉に書き取れるのははっきりここまででどうにもこの先はないと見切って突っ掛かって行く。

死ねる喜びに勝るものなんて有るのかなと振り返ればそれ切りの終わりが辛く悲しいのはそのどれも他人事だからでそれを近付けるも遠ざけるも悲しみを弄んで他人事にしか向けられない喜べない心の憂さを晴らしているだけ。

淡い夢に添うか狂いなく真っ直ぐに消える心に付きながら燃え尽きはしなくて溢れても濡れながらには噛み殺す友を燃え残した風が掻き毟る野辺を背にして溝の草。

ここには辛く悲しいも喜び嬉しいもないとすっかり分かって呑み込んでもつい惑わされそうでそれを振り払いこの世の儘をその度に確かめたくて古くからの事が熱に魘されるようにまた同じとその同じにと語られ聞き継がれる。

例えば木か石の中に隠された仏を彫り出そうと削るのでなく唯削って削って何

もなくなるように削るように何かを描こうと削り出すように書くのでなく唯何か書けばそれで何でもそのままそれを削るように書く。

後ろからしか聞こえないあれは音なら雷のように必ずその姿が見える筈とその度に振り返ってやっと目の端に後ろへ逃げ込む影を捉えたまでは覚えていて今は逆さに吊られ腹を突き通る音から光りを抜き取らされている。

必ずまだ斃れるまでに忘れて置かなければならない事が山また山の山程も有って必ずまだ思い出して仕舞わなければならない事が海また海の海程に有ってそれなら限りなど有ってなるかと今日を限りの目も届かない山と海かも。

海原で生まれ落ちてしまったからには陸を目指すしかないにしろ初めに舟を着けた岸辺さえもう故里を遙かに離れて帰る所もないと諦めればそれで独りでさえ生きられるなら遠く彼の目に届かないものはない。

目がその後ろを向けないからとまやかしにも幻にも仮にも戯れにも目を後ろへ持って行けも後ろに目をもう一つ作れもしないなら見えるだけの前を見て見えない後ろに何処まで何時までどれだけ耐えられるかしかないので見る。

一石二鳥とはしゃぐ奴らの足元で一羽は息絶えてももう一羽の微かに吐く息はそれでもう奴らの足を掬っていてまだ止めを刺して居ない石は奴らの頭を狙いに急いで戻って来ると見えるのでないなら何の息か。

見るべき程の事は見つがそう態との見誤りなのは見付けられないだけでそれを見なければ生まれて来ても仕方なかった程の必ず見るべき事が見えていないと今知れて吐かれたからでもそううかうかとしているしかなくまた要らぬ事を。

もう歌わないまま老いてしまおうにも伸びる声は見透かされそれでも諦め顔に走る塩のように皺の幾つも交わり固まるのを隠さないなら何の咎めも届かない遠い耳の振りでふらりと斜めに立ち去れようか。

ずっと荒くれ者に囲まれながら彼だけが言葉遣いがやんわり角のないのはどうやら生まれ付いての囚われの身と今更に分かるのは何を呟いても喚いてもその端から空っぽに刳り抜かれて透き通る声が幾ら嫌でも声色は使えないので。

その人を何も知らない儘その悪い噂を打ち消して回っていてそれがその人のか

もあやふやになるとどうやらこの世の全ての人に就いての私しか知らない噂で
それなら私は独りこの世を向こうに回して彼らへ彼らの悪い噂を広めている。

誰も知らない針の使い途を誰かに教えて貰う夢から醒めて忘れそうなので急い
で試すと誰でも直ぐ思い付きそうな人の殺し方でしかなかったのに次の日には
それは針によって使われる誰も知らない人の使い途になっていて楽しいとは。

雨の已むまでと屈んで蔓の何処へか高く伸びる藤の陽の強く突き通って空の青
に穴を開けるかに輝く葉裏の緑を見上げるならずぶ濡れで黙り込んで通り過ぎ
る女共の居なくなる後の様様に甦る数知れぬ音に囲まれるのをそっと待つ。

船旅の終わりに贈られた花束の爛れた花弁は腋の下の腫れ物の血膿かと探って
も腫れもなく後何処を撫でてもすべすべでも寄る筈が忘れて行き過ぎた港の形
が首筋に似ていたなと左の耳の下を撫でる指が思い出したかにぬるりと滑る。

日暮れて何時もより少しだけ遅い何時もの帰り道で足に何時もと違う力が湧い
てこの世の生きて動く凡ゆるものが夜の光りと現れその目に一つに溶けて映っ
たあの時限りのあの時から何十年も経ってまだその見た儘だけは残って躍る。

遠ざかるようで遠ざからない何を言っているか分からない声に耳を澄ませば愈愈遠ざかりそうで急いで近寄り確り聞き取ると何も言っていなくてそれでさえこうまで惹き付けられるならと何かが言われるまで声から離れられない。

橋の袂でもう踊るしかなくなると肉はゆっくり揺れ骨だけが激しく躍ってこのまま体がバラバラにならないには橋を渡るしかないと心を決めて踏み出すと橋の骨のもっと激しく躍るのが足から伝わって体の骨はすっかり落ち着く。

作る手の止まらないのは彼らの好みがすっかり分かっているからで彼らにどうしてそれを分かってしまうのかと尋ねられてもその決まった手の動きに落とす目を動かせないのは何をただ探して居たいからだろうと言う顔を作る彼。

息を吸わない癖が治らないで山と空に静かに詫びるかに拗る川へまた来てしまって眠そうでも水が水から逃れようと川面まで届かずに過ぎる陽の光りを追って重い海をきりりと向いて裏返り裏返り急ぐなら暫くは屹度何も起こらない。

生きてだけは行けると言う夢から醒めるしかないならそれで終わりにしろ生き

られないと言う夢へ渡り切るまでの時がその渡る姿を仄かに浮かべてその沈んでもう浮かばないのは何時とそれを見詰めるばかりに時は拗れて止まる切り。

行き成り甦る過ぎた日へ勢い込んで躍り込んでも見晴かせる果てから頭の芯まで境目なく真っ白なら手元に掴んだ束になった白い紙に思う儘に書き込めた事がその日起きた事に違いないにしろ紙の綴じ目に行く手を塞がれる。

その男はその男だけがその女を他の誰より美しく見せられると誰の目をも欺けたならそれでその女を独り手に入れ誰の手も届かない所へまで連れ去れて居てそうなら女を捨てるなどもう訳なくて捨てられない振りもじっくり楽しむ。

角張る服を重そうに着るにしては口紅が分厚過ぎて肌の青ざめる女がどうやら日替わりならその口の臭さで憶えて置こうにも口の臭い女の顔がどれも同じで女の体など木を白く塗っただけでそれを見破られまいと蹴る靴先の綻びが男。

心の中に棲んでいるものは何処か知らない遠くから来たただその心だけでそれなら心の中はその心と同じにその心の外とも同じに今もそしてこの先もずっとその届かない遠くに有る儘。

苦しんで生きるのが男で悲しんで生きるのが女と言うのがその通りなら苦しみ続ける女と悲しみ続ける男にどれ程時が残されているか知らないがその時は磨り潰される為にだけ置き捨てられたようでならそれなりに石のように続くか。

生きるとはただ苦しむ事で苦しめば苦しんだだけ生きられたし苦しまなければ苦しまなかっただけ生きられなかったなんてのは苦しみからさえ見放された奴の苦し紛れの言い草にしろそれだけが奴には苦しみのその通りには違いない。

そこにだけ並ぶ石を跨いで振り返れば木も土も風も燃え向き直って前は全て冷たいのを構わず踏み込むと一日陽を受けない形に切り立つ大きな磐の陰にだけ色が湧きそこを真上に長い脚で攀じ登る姿を怯え怯え真下に覗き込む。

壁に身を寄せるのは巻く風に攫われない為で足下に光る玉が零れるのは何を盗んで来たかと抱き留めているのが胸を刳り抜く穴では埋めるにも風の他になさそうなら胸の底から光りのねっとり湧いて風に抗って硬く弾けるに任せよう。

緩い流れに映るのは月影でも岸辺の焚き火でもなく川底からの丸く硬い光りに

照らされたように浮かぶ誰かに見て来たように語った行った事もない湖でそこへ身を投げた筈の冷えた身は膝まで浸かる激しい流れに立ち尽くす。

息をする限り一息に言える事とその外の事の二つしかないように生きると死ぬとが全く異なる二つの事と分かればあの世など有る筈もなくもう会えないのが辛いだけで悼むまでもないのにそれでもその先に何かが有りたいと願う彼ら。

異なる二つの事しかなくてそれをただ一つの事だけが有ってそれに全てを結び付けようとするその先が闇なら光りとは救いようもなく誤りそのものの姿。

死んだ水は何を思うかとその流れる屍の姿形の見失われるのを待って空っぽの目の底から湧く乾いた音をぽつぽつ並べる中に一つ紛れ込むかに濡れて生きた水のように煌めく音が崩れて冷たい喉を溢れれば水の恨みは止め処なく濃い。

通い慣れた草原の真ん中で足下が揺れ迷う筈もない道に迷って見晴るかす山山は見覚えがなくそこからどう後ろを振り返るかで今日までの自らの道程をそのどれとどれも少しも似ていない幾つかから好きに選び取れると思えて消える。

或る戦いに挑んで敵が己に有るならそれは言葉で戦い続ける限り果てもなく湧いて刃を繰り出し言葉が懐かしい古里であるなど寝言にも出て来ない筈が何処も彼処も敵だらけならその何処かに失われて跡形もない古里を見付けたいか。

何処よりも何も無くて空っぽな所にこそ帰り着ける果ての懐かしい古里が有るのなら懐かしい古里も無くて良い。

言葉を拠り所とするのではなく言葉に退けられたものを言葉を引き裂いて引き寄せる。

祭りの時に着る娘の服を誰かに燃やされ海と川に挟まれた長く尖った町を描いた古い布しか替わりがなくてやっと家が貧しいと知れてももう歳なんだと物分かりの良い事を言っている内に時を裁きたくなって生魚の砂擦りを押す指。

死を深い眠りと思えてしまうのはこちらから死を見ているからで死の向こうから見れば死程浅い眠りもないのかも知れないなどと思えてしまうにしてもそれもまた死をこちらから見ていると思えてしまうにしても。

その絶てる喜びに身を投げるならそれも良いにしろこのこれが他の何とも違う
のを前に何をどうして良いか分からなくなって生きる望みが絶たれるなら必ず
何かは何かと似ているのを探す目を常から養うにしてもそう巧く行くかな。

ふさふさとして形のないものは写せないと思う程その取り取りの形が沸き立っ
てもその何も写せないならやはり何の形にも形はないと目を投げるそこに冬枯
れの凍る山が血の塊となって胸を激しく突き上がる形ばかりは写せそうでも。

何が起こっても起こらなくても何も起こっていないに等しくそれらは起こって
いると言ってみても何がどうなるでもなく何も言わなかったに等しいなら全く
言う事なしにしろそうした事から少しも逃れられて居ないがどうしたと。

ただ見える限りを窮めたいなどと願っては敗れ果てても死ぬでもなく悶え続け
る自らの姿しかそこに映せないにしろその訳を尋ねたくなって答えを知る何か
へも目を向けたいと願えるのならそれで身は滅ぼせるぞなどと言う誘いは罠。

昼のそっと白く巡っても陽の差した例しがなくどちらの海を向くか知れない磯
の白砂では濡れる他に泣きようもないなら許そうと小島へは北から流れ来たと

水を憶えている蟹を生き裂いて海鳥の羽音の石礫かの重い影に逃げ惑いたい。

うっかり聞き損なった捨て科白は耳馴れているばかりにその何時もの筋立てまで忘れ仇への山の暗い裂け目から噴く土のような己の罵り声に埋もれるようでは見付けてはいけない双子の星に呑む息の胸を耳の底まで下ろして沈めたい。

指先程の尖った紙を開くと親を蔑みたくなんてないのに蔑んで仕舞うしかない目付きの顔が真っ直ぐ写っているのを誰かにして仕舞えても重なる親の顔は消せずまたそっと折って破ろうにも破れないのを爪の圧し合い痛いせいにする。

目覚ましのように時が来てますよもう過ぎてますよ遅れますよさっさと止めて起きて下さいとそっちから送り出される血がこれでもかと時を叩き鳴らす音をじっと聞き流すばかりなので何も出来ないし目も覚めないとは分かって居て。

見付けたぞそれであるだけのそれのそれであるだけでないそれはそれとしか分かりようのないその姿であるのがそれの全てと。

泊まる家を間違えてここで昔長く暮らしたのではと慌てて駆け寄る窓の外の茂

みに見え隠れする坂を黙って上り下りする娘達に歌を教えようにも手元に片歌ばかりでは吐いた濁り水を床を這って探して見付けられずに家の事は忘れる。

音楽は音の向こうの沈黙を聴くんだよって言う人にそれが何になるのって尋ねてもはっきりせずにその分からないなんだよ！って事にしろ分からないだけなら沈黙なんて要らない訳でどうも沈黙ってのが怪しいね音の鳴ってる限りの。

土や水や空の音の窮みまで聞き続けるのが耐え切れず自ら鳴らせはしても耳障りで時を掛けて耳を磨り減らせばそうでもなくなってその磨り減った痕を取り回すしか途はなかったにしろ沈黙を聴ける耳なんて疾っくに捨てられている。

少しでも誰かに似ていると心付けばその度にぞっとして死ぬのより耐え難くても誰とも似ずに死ねるか確かめようもないならうかうかとそちらへも逃げ込めないなと逃げるのも諦め続けるのにも飽きて飲む水に似るものは知らないな。

柩は狭苦しいけど鳥葬は良いってよ初めから素っ裸で高い方を向いてるからねでもお経は喧しいし人手とか煩わせて鬱陶しいしやっぱりここと独りで決めたならそこで静かに野晒しには敵わないかな。

寝聡いのだけが取り柄が裏目に出てほんの一つの思いを組み立てようにも必ず同じ所で崩れてしまっても数えた夜の月を一つ一つ水に映して並べて生かしては置けるにしろまた同じ月が巡っては古いものから殺して流すしかない。

誘われて犯罪加害者の会に行ってみると血塗れで足元もヌルヌルで何驚くもないさとじっと手を見ながら何食わぬ顔で隣の会に紛れ込むとそこがその会で大人しく座ってる奴にあの隣は何って尋ねるとみんな仲良しの会だってアハハ。

所詮この世は殺し合いと分かって見れば何処へ行こうとこの世は所詮殺し合いだぞって肝に銘じて実際に殺し合うにしても愈愈それでそう身を以て分かる程にその真似事を繰り返すだけのようになって仕舞うのが遣り切れないのでは。

火を潜って金網の檻を抜け草も生えない崖っ縁の酷く曲った道を足の速さによく踏み外さないもんだと吃驚しながら駆け抜けて肌の窪みに隠し描いて来た何処にも火の燃えない絵を闇に晒したい崖の道はもうこちらからでは狭過ぎる。

全く静かでただ明るく何の事も起こる影も兆しもない時の隈無く見えるもの聞

こえるものの匂うものが独りでにただそのままに歪みもなく高ぶって行くのが肌で分かれば嫌でも何もかもが嘘であるこの世の姿と向き合って仕舞って居る。

今は失われた古事を拠り所とすべく振り返って時を遡る程そこに掘り当てられる話しにはそれより古い時を憎み蔑み遂にそれをねじ伏せて面白く引き裂いて踏み付けて居られるのを喜ぶ人の心ばかりが闇を背にキラキラと踊っている。

ならつまりは少しでも古い事を知りたいなら一日でも長生きして昨日より鈍い心でより曇った目で昨日までのどの一日ともまるで違う明日を見付けてうっかりそこへ放り込まれて仕舞った有るか無きかの我が身へでも尋ねるしかなく。

そこを生きるしかないこの世の闇に立ち向かう姿を自ら振り返り直すのを繰り返していれば何ともならないなりに何とか遣り過ごそうと決めて掛かるしか何ともならないと要らぬ高ぶりを抑えてはその時時の限りに踊るに任される心。

廻れば色の変わる海が開ける岬は見えてはいても遠い儘でそれに近付くよう呼び掛ける誰かの歌に石で打たれたようにのたうつ酷い眠りへ落ち目覚めて眺める何処にも水の色もないなら渇いた喉はまた何処へか迷いたい望みに噎せる。

彼が挨拶撲滅運動に取り組んでいるのは私も永らく一人でそれに打ち込んで来たので直ぐに知れてもそれで志を確かめ合い共に手を携えようなどと声を掛けては台無しと分かって居てこの運動は敵の耳に届かない儘に静かに広まる。

何処でもない処へ行きたいってそりゃ行ってみりゃ良いけど行けども行けども何処でもないなんて何処にもないいんだから行き着けるのはここしかないってならここがその何処でもないんだここだけどって話しは救いの無さが快いだけ。

目が見えなくてそこに稲妻が聞こえてしまうでもなく耳が聞こえなくてそこに稲妻が見えてしまうでもない内にそうであるならそこでしかないそこに身を投げて見えも聞こえもしない稲妻に打たれるしかないのでもないのなら。

左は空ばかりの狭く長い石段をやっと下り一つ残る墓石の傾きが示す更に下の崩れた崖に逆さの墓石が数知れず積み重なり傾く陽に取り取りの色に輝いて古いも新しいも彼らを焼いた火が甦るようだなと拾った亀の甲羅に宿る炎の底。

小鳥が死んで籠をこっそり海へ捨てに行った夜それを見咎め何の魚を捕るんで

すかと岩の上から笑うような声を掛けて来た脚の真っ直ぐ長い男は今頃は海の底の籠の鳥かそれとも籠を見付けられない魚の儘で夜はずっと泳いで居るか。

空を蹴り歩くように足を振り上げ腹に乗せた太鼓を打ち鳴らして踊る男を酷く眠いのを堪えて眺め続ける内にそうして踊れるのは誰よりその男の眠りが飛び抜けて深いからと知れて目を醒ました日暮れの野山に彼の姿はもう戻らない。

ふとこの道へ逸れる為にここまでずっと真っ直ぐな道を来たと思わせる拗った脇道なら迷わず踏み入り直に塞がる叢を掻き分ければ知っていたかに見付かる狭い石段を登って見下ろす広場を埋めて硬い渦を巻く子供等の中に居ない私。

分からない事に就いてなら幾らでも語り得るのに分かった事に就いては我我は語り得る一言も持たないと知れれば古今の賢人の残した言葉を悉く頭に刻み付けたところで巷に溢れる下らないお喋りを聞いて回るのと少しも変わらない。

この世を眺めて居たいなら何の時か知れない数知れない時の外に放られて居るしかなくて失われる時と分かって窮めたいかに突き抜けて行くに要る穴の他は捨ててその晒される穴を翳して突き抜けて行くに賭けて仕舞うのは何の心かな。

何を言っても正直に言いなさいとしか言われないので掃除機に言っているとその掃除機何処で見付けて来たか正直に言いなさいと煩さくてそれらをすっかり掃いた箒に何を言うでもないのにその箒を取って置かなければならないのが(二〇一六年四月三日)

文例集　終わり

***** ***** *****

(空の下には…)

空の下には、水の流れその堰き止められるように、ただ一つ切りしかなく、その一つには出来ない事はないと分かって居ては、する事もない。で、する事もないではどうやら、そのままに居続けるのも儘ならず、このままではどうにもいけないともなれば、どうにかなりそうな何かを探しに行くしかない。そうして、一つ切りか、その一つと切っても切れない何かにしろ、そんなものを巧

く見付けてしまっても、却ってそれでただする事もなしに居続けられるかどうか怪しくなりそうなら、中中に難しい、などとぼんやりほっつき歩いて行き当たるのは、今にも立ち枯れそうな青っぽい幹の皮のあちこち剥げ落ちた木のひょろりと独り立つ姿にしても。どうにかして呉れる何かをただ探して居られるなら、それこそもう後のない一つ切りの出来る事に違いなく、ずっとそう彷徨い歩くのも悪くない筈なら、この木はその妨げ。と決めて掛かれば知らん顔で脇を通り過ぎるまで。とも思い切れないのは、この木の他に何も目に留まらなかったし、この先に何かが見付かりそうにもないのは、もう疲れた身を顧みれば、そう思い至るしかない。で手に軽く斧を握っているなら、木を伐る他にないのかな、そうして持って帰って火を焚く。そう、火か。火の側なら、ただ一つ切りの空の下に、何処へ何を探しに行くもなくじっとして居られそう。「木は伐られるために生えてるんじゃないよ。」知ってる、だから斧を持ち歩いているのさら。後は斧の切れ味に聞いてくれ。「まあそう言わず、火が欲しいなら遣るよ、何処へとも帰る所へ。」それを早く言えよ俺は斧を振り回すなんて大嫌いなんだ、体を使う他の何とも同じにな。で帰れば寝床の脇に火が燃えている、その下に何の焚き物も見当たらないのは見なかったとして。それより火だよ、火なんてまじまじと側で眺めたりしちゃいけなかった。空の下の事はただ一つ切りしかない筈が、そうでもなさそうなのがじわじわ迫って来てないか。それ

でまた何を探すでもなく、ほっつき歩いてしまっているなら、あの木でまた足が止まる筈が、その生えていた辺りの見覚えの有る眺めまでは行き着けても、その辺りをぐるぐる回るばかり。ははぁあいつもう伐られてしまったんだ切り株まで掘り起こされて、と疲れた足を返そうにも、どっちへ。いや、そうか、もう空の下は、ただ水の流れとその堰き止められる眺めばかりじゃなくなってしまって、すっかり変わってしまったなら、きっと何処へ帰るもなく。で改めて眺め回した辺りは、空がぐんと広くて大きく、そこから下へのっぺり狭いなら、木の上からの眺めかな、そりゃ木は見付からないよ、攀じ登った覚えもないなら、きっと何時の間にか鳥にでもなって高い枝に止まったかどうかもどうでも良くて、兎も角ここなら、空の下の一つばかりでないあれこれを眺め下ろして、そんなもの等と係わらずに済むなら、ずっと一つ切りで居られるって、違うの。「あなたがここに居ると見付からなければ。」見付けられても黙って通り過ぎられるだけなら。」そうかじゃ、見付けられないためには、木を伐る他にないのかな。「て、元も子もなくなるでしょ。」遣って見なきゃ分からない、それにそれでどうなろうと構わないさ、いや独りでこの木を伐れば、他の奴がどう出ようと、一つ切りでここに居座れるのは俺独り。「何を仰っているのでしょう、さっぱり分かりません。いや分かりました、他の誰も寄り付けないなら良い訳でしょう。」それを早く言えよ俺は斧を振り回すなんて大嫌いなんだ、

体を使う他の何とも同じにな。で俺は、その木の周りを鳥か獣のように飛び回って、大嫌いな斧を嘴か牙かで咥えて風など切って振り回すしかなくなったってんだろ。確かにそれで誰も木に近寄れないにしろ、でも、これじゃ休む間もなし何を遣ってんだか。なんて思っていると流石に息が切れて、木の上で血潮の匂い立つ鳥の翼とぬるぬるした獣の四つ足を休めて熱を冷まして居ると、すっかり奴らに取り囲まれて、それも目当ては奴らの登りたい青い木じゃなくてそれに止まってる鳥と獣の合わさったゼイゼイ言ってる姿で、いやそうでもない、奴らには、俺は全く違って見えているらしい。だって誰も登って来ないじゃないか目をギラつかせて、今こそ息が切れてる化け物を引き摺り下ろせば良いだろうに。なんてぼんやり思っていたのが拙かったか、引き摺り下ろされた覚えがないなら独りでに木から摺り降りて、それでどうにかされるでもなく放って置かれたかで、奴らに紛れてしまえば、奴らと同じに木を見上げて血眼で鳥か獣の姿を探していて、とそれは俺か、やっぱり木の上で、逃げ場に困ったような荒い息遣いを見上げられていなければ俺じゃないだろ。でもひょろりとした枝振りしか見当たらないんだが、そうか、なら俺じゃなかったんだ目当ては、と分かると、バサバサと、鳥でも獣でもなさそうな、じゃ何かと確かめたくもなさそうな、見た事もないようなら、きっと一つ切りしかなさそうなそいつが、息を切らし切らし喚き散らして居そうで、でもなさそうで、ただその暴

れる姿から喚く声が湧き上がって来ると見えるだけにしろ、いや転げ落ちたのは喚く声だけで、それが苦しげな姿に見えるのかも。だって一つ切りなら、きっとそんなだよな、とそいつを取り囲む奴らの間の抜けた言い草など聞くに堪えないので立ち去ろうとして、却って繋がれてでも居るかに木を離れられないと分かって、奴らの思う儘に罵るのに打ちのめされながら、根でも生やしたように息を殺して誰も木など顧みない夜を待つには待ったが、望み通り何もない夜が来ただけで、土に張っていた根はすっかり闇に洗い出されて萎れるようで、幹の更に痩せ細って青い、じわじわと夜空へ昇りたそうな木の姿だけが、その裸の色を晒したかに辺りに滲ませる青くさえなく透けたような仄かな光りで星も月も吹き払い、見上げる程に静かに高いばかりだな、なんて何を覗き込んでいるやら。星も月も吹き払われたなんて、空でもなかったんだ初めから違うの。って尋ねたかったんだよ、そんな事をきっと。どんなでも良かったかに。で根は隈無く裸の色を誇って冷たい風を招き誘うかにふわふわ揺れて。そのふわふわに繋がれているに違いないって分かると、体は星も月もない贋の夜空が裂けるように分かれて二つ、獣の匂いのする鳥と鳥の毛色の獣になって、覗き込んでいる中で、逆さにでもなりそうに青い息をしているひょろりと伸びる木の周りをぐるぐる回れば、もう他の何も近付けないさ。体が二つ有れば守るなんて訳ないねって浮き浮きと。でも何処を覗き込んでいるのかなと鳥だけが振り

返ったのが拙かった。鳥は己の背に、その覗く何処かを描いた汚い絵を負っているのを見付けても、獣にそれを知られたくなくて身が強張れば、獣に知られず獣と抱き合いたい密かな望みを木に見抜かれそうでも変わらず羽搏いて、その音が酷く澄んでいるのが耳障りなのは、獣とではなく、同じ鳥と二つで木を守る筈が、待っても来ないので替わりに、裂いた身の一つを獣の姿にして何とか遣り繰りしているからだと今更に思い出されて、ぐるぐる回るのは獣に任せ、だってこんな時の為の鳥の毛色だろ、で鳥は、木から見れば高くへ、鳥にすれば何となく斜めかに低くへ向いて、で目に飛び込んで来るのは、鳥の通って来る風の道が、風にしては泥を混ぜたような濁った色で、その泥の匂いの立ち昇る辺りに暗い色の毛の獣の姿が二つ、後ろ足で泥を掻いて跳ね上げて、泥の嫌いな鳥の行く手を塞ぐらしい。待たれる鳥の姿は泥の色をした風の来るその向こうに、微かに影か、それも怪しい。そうして鳥が進むも退くもなくして居ると、羽搏く音が産み落とすかに小さな獣の姿が増え、それらはずんずん腰回りを脹らませて更に荒っぽく泥を掻き上げるので、もうまるで泥の川だな、とそこに浮いて羽を休めた鳥を、くるくる回して渦に沈めて、その勢いのまま流れ込む先に、そっくり同じ流れが迎え撃つように流れ、どちらかが鏡に映るに違いないがどちらでも構わないさ、と木の幹は、一筋の儚げな炎のように、揺らめきながら全ての枝を振り落として、また真っ青にすっと立ち、ハアハアと舌

を出して競って近寄る獣達のその舌を焼いて捥ぎ取って行くのが、息絶え絶えの泥の底の鳥の目に映るなら、遅れて来たもう一羽の羽搏きに激しく揺れる木の幹は、吹き消されそうなのを翻して、泥の色を吸い取るかに勢いを増して枝葉を止め処なく甦らせ、（二〇一六年四月十八日）

（有る所には…）

有る所には必ず有ると知れていて見た事のないものは見た事もない程美しい、と聞かされて、見知れた限りの美しい色形を当て嵌めてその姿を思い浮かべても、そこから滲み出て纏わり付く醜さを振り払えはしない。そんなそれを初めて目にして、その見慣れない色形はどう見ても醜いようなのに、その一つに溶け合うと、それを見た事もなく美しいと認めるしかなくなる。そんなようなそれを幼い頃からずっと見慣れて来たのはあの男だけと知られてはいても、それを見ないでは、そんな彼など忘れられていて、行き成りそれが、池の奥の森から出て来て、初めてのそれを美しいとすんなり認めて構わないかも誰にも迷われては、彼が呼び出されるしかない。で彼に言えるのはその名だけで、その名さえ耳に出来れば、すっかりそれに飛び付いて、それが美しいか醜いかなど誰

も尋ねもしなければ、言う程の事でもない。でその飛び付かれた名が、聞き慣れない名なのは良いとして、その聞き慣れないせいでキラキラと飛び交う内に、それがそれからどうなったか何時の間にか見向きもされなくなり、名ももう聞き慣れて他の名の中に埋もれるように忘れられ、すっかり干涸らびては森へも帰れずにその辺りへ放って置かれるそれを、ただ彼だけがずっと目を離さずに居て、独りでそれに向かって呼び掛けているその名が、聞き慣れた名と少し違うのが誰かの耳に入ると、それは酷く耳障りで、その名の通りそれが酷く醜く見えて、忘れられていたのがまた人目に晒され、その醜さを取り除くにはそれをばらばらに引き裂くしかなく、干涸らびていたのでそれはあっと言う間で、それはそれでもう見ないで済むにしても、醜く耳障りなその名が、誰の耳の底にもザラザラと嫌な響きを残すばかりか、そのせいで彼らの楽しい筈の集いも楽しくなくなるでは、日日の暮らしも暗く重くなるばかりで穏やかではない。あいつのせいだ。でまた呼び出されても、その名はその名なのだから、そうで有るしかない。「何でそんな名で呼ぶかは知らんが、元の名に戻せよ。お前しかそれは出来んぞ。」そうかな？もうあれの姿を誰も見ずに済むんだから、名も皆で好きなのにして済むんじゃないかな。「あれはあれでああは成ったが、池の奥の森は奥深いぞ。また次にあれが出て来たら、俺達はあれの醜さに打ちのめされて、どんな事になるか分からんのが耐え難いんだ。」だから好きな名

を付けたらって言ってる。「そう出来てたらお前なんかと話しなんかしないさ。」で？「で？じゃないよ。言う事が聞けないんじゃ、お前の口をどうにかするしかないな。」って？「って？じゃないよ。醜くない名を言えよ。」元の名なら知ってるだろ。忘れたなら思い出せよ。それで済まないんなら俺に時を戻せって言ってるようなもんだぜ。「そうだな。そうだ。お前一人にそんな事は出来ないってなら、お前を殺して、あれの事も初めからなかった事にするしかないか。」そうしとけよ。（二〇一六年四月十九日）

（闇が深く…）

闇が深く広いなんて何の作り話しかな。常に幾つか懐に収まる闇を抱えて絶やした事はないし、闇だけにそれを誰かに見透かされもせず、要る時にだけ取り出して、さらりと使う。向こうは行き成りそんなものを手渡されるんだから、面食らって、底知れない闇を投げ付けられたなんて思い込んだりもする、なんてのは大袈裟で、何だか分からないものが手に纏わり付いて、それを振り払ってお仕舞いってとこだね。と言うのも、闇だけに、闇だけでは使い物にならず、陽を受ければ必ずキラキラと上辺を煌めかせるもう一つのものを、掲げて見せ

たりはしなくても、何となくそんなものを懐に収めて零れ出そうな腰付きでもして居れば、それに目を付けたのが向こうから寄って来て、でその果てにそんな有りもしないものに係ずらわった己の間抜けにうんざりすれば、もう沢山な筈で。でも何時も同じではこっちも飽きて来て、もう少し闇を脹らませて、重そうに引き摺るなんてのはどうかな。その闇はそれ一つでもう目に付いて闇のままでは嫌がられるだけなので、ちゃんと陽を受ければ必ずキラキラと上辺を煌めかせて置かないとね。それでまた向こうから寄って来て、喜んでそれを引き取って行くって段取りはもう決まってる。陽の有る内は幸せな夢も見られるんだから、陽が落ちて煌めくキラキラも剥げ落ちて、剥き出しの闇と取っ組み合いになったって、それから己の間抜けにうんざりして、二晩か三晩立て続けに嫌な夢にでも苦しめられるのも、己の尻位己で拭けってだけの話しさ。でも行き違いってのも偶には有る。月の照り渡る夜だったりしてみな。日暮れるまでのキラキラに目が眩んだままそれが目の底にゆらゆら残れば、月の光りと混じり合ってまた何とも言えない煌めき方で、夜が明けるまで闇なんて何処にも出て来ない明るい夢を見通し抜いて、そうしてまた陽が昇れば、それは益益輝いて。なんて事になればもう、詰まらなかったものが悉く、お宝が詰まったようにも見えて来て。でもそれで済む訳はない。直ぐに目を付けられて、夢から醒め損なった頭をボーとさせてたりすれば持って行かれて、果てしないこの世

の詰まらなさをこれでもかと見せ付けられたりするにしても、そんなのはまだ増しで、持って帰った奴だよ。どうしようってんだろ。昼間は先ず楽しいにしろ、夜になってそのキラキラを抱いてキラキラした夢でも見る積もりかな。でも昨晩程月も明るくないなら火を焚いて、それで陽を受けるかに煌めかせようなんて遣ってみな。近過ぎるんだよ火が。炎はぐらりぐらりあっちへこっちへ尖って踊って、それで闇の上辺が煌くったってあっちを向いたりそっちを向いたりて、あっという間にその脹れた闇の腸まで捻切れて、ばらばらな闇に貼り付く醜い色の引き裂かれたような形の煌めきが辺りを飛び跳ねて。ああそれからきっともっと恐ろしげな事が次次と。で止めは、火さえ届かない闇の芯から小さな丸い闇がボコボコと零れ出て奴を囲んで、さあその先なんて見たくもないね。それより火だよ残された。闇の芯に見据えられて萎びたように力なく項垂れて地べたを這うしかなくなって、でもそこで炎の色を収めて土の冷たさに色を失ったようにするりと闇の芯を向いて伸びれば、まるで闇を刺し貫こうとするかに見えて、いやそう見えるってんならそれはそう見える通りのそうしたもんなんだよ、闇にすれば闇だけに。でもそのままならそれは何時でも闇を貫ける重い剣がこれ見よがしに置かれたかで、それを取り上げようって逞しい腕も出て来ないなら、闇の芯と火の剣の切っ先は睨み合うばかりで静かで、その静けさの上を踏み越えるように火を跨ぐのは、小枝より重いものも持てそうに

ない細くて白い腕を斜めに延ばす、月影の色を濃く薄く幾重も纏った小さな姿。その掌には摘んだばかりの白い花に見えて、見直せば、色のない小さな炎と直ぐに見分けられる煌めきを翳して風を内へ外へ刻み、同じ曲がった輪を繰り返し回っては、闇を真似て息を延ばすようにゆっくりと舞う。のを眺めるのは誰って言っても、そんな姿なら目になんか映らないに違いなくて、尖った小石のように硬そうな舞い踊る小さな足が描く地べたの曲がった輪の跡の中に閉ざされた、同じ丸く曲がった形の石を溶かしたような色艶の水溜まりにそれは映っていて、冷えた低い風が石畳を渡って陽の落ちた向こうから一筋に貫かれ、少しだけ凹んだ鏡のようだった水面を薄い紙のように揺らせば、その姿も、姿もなくして揺れて月影の色へ形を溶かし、舞いに合わせた歌の一節の微かな高い声が、少しだけ凹んだ傾きを重ねる波にするりと乗るように立って跡絶えれば、日暮れから夜の奥の向こうまでの匂いを運んだ温い風など塵程に吹き払われ、火と闇を抑えるものはもう何もなくて、（二〇一六年四月二十六日）

（戯れにか何か…）

戯れにか何かしたかったか、もうはっきりさせたいもない。被った面を外せ

ないのは、妬む女が鬼の面を外せなくなるとか聞くので、そんな事かも知れず、でもう幾度も年を越え、隠れて息を潜めるにも飽きて、今では面はすっかりこの世に馴染んで、この世と同じ大きさ広さ色形のものを被っている心持ち。ただ重さのないのはきっと、この世にも重さはないのかな。こんなではあの世へ抜け出さない限り面を外せないにしろ、この世に留まる限り外せないで障りはない。寝転がって、面を静かに細かく指で撫でて居れば、それだけでこの世の隅隅までその形と手触りと何とも言い表せない深い味わいまで知り尽くせる。で分かったのは、光りだけには触れられない。つまり光りはこの世の外から来ているか、この世の外からでさえないかも知れないにしろ、そんなのは知りようもないので忘れて見直すと、どうやら光りは、この世とこの世の外との境目に留まって、そこからこっちへは来ない。そう分かった目でこの世を眺め直すと、風と水とが、透き通ったままでありながら、その濃いや淡いや粘りや柔らかさ硬さ固まったりばらけたりなどまでが、くっきり浮き立って手に取れる。知らぬ間に、どのようにも光りをこの世の外から当てる技を、身に付けたと言うか、目で覚えてしまったらしい。すると、飛ぶ鳥も、風の硬い辺りを鳥より速く踏み跨いで、手掴みで楽楽と獲れる。森の池に肩まで浸かって水を弄れば、素速い魚も止まったように易易と手に掛かる。で今日も独りで魚捕りをして居ると話し掛けて来る奴が居て、その声に、すっかり忘れていた面を切り付けら

れるようで、傷を負ったかに顔の肉がヒリヒリ痛い。そう言えば面を被ってから話し掛けられていない。面がこの世と同じでは、この世より手前に留まってこの世の影に溶けているようなもので、それで誰の目が届こうか。そうか分かったぞ光りだな、他にない。確かに光りとは互いに黙ってばかりでは済みそうにないにしろ、下手に口を利いて、面がこの世へ突っ込んで、石を投げる奴らから逃げ回るのも嫌だし。堪えられる位の痛みなら放って置こうかな。「光りを欲しくて面を被ったんでしょ。」そう、何でももっと早く言ってくれない、で？「あなたは光りとは話してないって事。」そんな事か言いたいのは、またヒリヒリして来た。「風と水を照らすのは光りの抜け穴が光りみたいに輝いて、光りの真似事をしてる訳よ。」それがどうした。「その穴を抜けた向こうへ行かない限り光りに出会えない。光りが何処から来るかも、先ずは穴の向こうへ抜けてから。」そんな嘘話しを聞かされる為に面を被り続けたのか、がっかりだな。でもまあそのがっかりから見れば、欲しかった光りなんて、面でちょっと遮れば、有るのか無いのかも怪しいもので。つまりは光るも曇るも面の傾き一つで、どうともなる。なら欲しかったのは、そんな面だった。有りもしない光りに惑わされながらに光りを作り出して、その己の光らせた風と水に、それと戯れる喜びに惹かれて囚われていたい、そうだよ。「そんな話しこそ嘘だって、もう話しながら分かるでしょあなた。」重たい声だな、誰だお前、いや分かった、

影じゃないか。いや違う。光りを影にしてしまう、それがお前だ。そうか光りを欲しい振りをして、お前を欲しかったんだ、分かったぞ掴まえたぞ。で前のめりになったかが徒で、何処も彼処も闇をぐるぐる廻る風と水。それも酷く重いばかりではどうにも。と諦めて面なんてもうどうとも知るかって、この世に背を向けた積もりで、じっとしてるのも楽しくないので、どうともなれとグダグダジタバタしてたのが良かったか、手応えは飛び抜けてるよ、だって抜け穴を爪で引っ掻いて掘って行くのは、まるで飛ぶようだもの重ければ重い程ね、その風と水の手応えが。ってもう風でも水でもある筈ないさ、重過ぎて。で、面はどうなった？もないよ。何処へ飛んで行くかだけさ。いや違う、どう飛んで行くかだ、いやこれも違う。だって抜け穴なんてもう掘ってない。飛ぶなら、もう飛ぶだけで何処へどうなんて決まってて変えられない。で何で面を被ったんだっけ。面を被らず飛んでった奴はもうずっと先で、こっちは酷く遅れてないか。遅れるどころかまだ動いてない、この世の手前の影の中にぼんやりと。なら面を外すしか、でもどう遣って。なんて考えるも何もどうでもこうでも外すんだ。って面がこの世と同じならあの世へって事か。そうあの世で良いよ、あの世とやらへ飛び込んじまえばそこがまたこの世さ。それじゃまた少しも動いてない、ふん何だよ、そうか分かったぞそんな面なんだ、でも分かって却ってどうにもならなくなって、そうなら分かってない事にして兎も角、飛ぶ。面

はきっと翼だ、なんてね。「その翼に遮られるのが、」やっと来ました、光りって訳か、見え透いてる。「じゃなく遮るばかりか、それが抜け穴まで塞いでしまって光りの真似事さえ忘れられ。」そんな翼の真似事の面じゃ、風に吹き払われ水に押し流され、それは粉粉に砕けて面でもなく。で構わない。でもうそれは、水の必ず行き着く先で水の力で硬く固められ風も水も歯が立たないなら、この世だのあの世だのキョロキョロせずに済む。で何が出来るかなら、そこをまた爪で引っ掻いて掘って行くさボロボロになるまで。「で外せない面もボロボロに磨り減って、」また嘘か、どうって事ないさ、ボロボロで果てればそれまでだけど、掘って居られるなら突き抜けられるからね。ほらもう刳り貫いたぞ、何を？って振り返れば、砕けようがそれが凸凹と固まろうが面は面さ、やっと面を外せたんだ。表が向こう向きで見えない分、その裏側を隅隅まで見て取れるのは良いんだけど、顔の皮の剥がれた裏の血やら肉やらばかり、どろどろべったり。うっかり慌てて手に取れば、何処が表も裏も分からなくなるまま、撫でたりさすったり舐めたりもして居ると、音もなく当たり前のようにそれは小さく縮まって、ああ、この世もあの世も、この小さな面の奥に閉ざされて。なんて思ってる内に、何処を刳り貫いたかも分からなくなって、面なんて初めからなかったみたいに溶けて重さをなくして指を擦り抜けて、それで何処へ行く当てもないって、醜過ぎて何処にも向けられない肉剥き出しの顔だけが、何

処の何の目にかも知れず広く大きく晒されてるじゃないか。そんなの耐えられないなら、もうぐじゃぐじゃの肉の面でしかない顔を、真っ二つに裂いて捨てるしかない。でそう出来たんだろうか、その裂け目を走る形のない光りの色の「さあ戻らなければ。直ぐに立つんですよ、時が有りません。」の声に、裂かれた一つは、呑まれるように諸刃のような薄く鋭い翼を捻回して重さを断って消えたんだが、それは何処かの誰かで、片割れのもう一つの、それを横目に眺めて動けずに、肉の奥まで剥き出しの顔に塗る為の肌色を探したい私の時は、見る見る削り落とされて、それでやっと、光りの中のその声の頽れる辺りからどろりと零れ取れるのは、肌とはまるで似つかない取り取りの色で、それはそれで使えるかもねって、選り取り見取りにそれらを、どっちへ向いてるか知りたくもない削られた時へ戻すように埋めてさえ居られるのなら、まだそこに嘘塗れの光りだけはさも真っ直ぐに、（二〇一六年五月十五日）

（顔と体に隙なく…）

　顔と体に隙なくびっしりと、色なら何でも、どの色もはっきり見分けられるように塗り着けていたいかどうか怪しいにしろ、必ずそうせずに居られずに常

に疑われるのは、色って何、何であるにしろ、色なんて要らないに違いないのは、こんな事してるのを他に知らないからで。とは言え、じゃ奴らはと見れば、切り立つ山のように厚く真っ暗な雲の下で、何時落ちるか知れない雷かと、細かな物音にも一一びくびくしながらウロウロしてるばかり。見上げるのも怖いならと見下ろせば、そこはもっと暗くて何の見通しも利かず、吸い込まれるかに落ちて戻ったものの姿も石ころ一つさえ終ぞ見ないでは、いじけて俯いても居られず、湧き出たばかりに響く尖った新しい音へと振り回される首を突き立てては、これと決めたらしい一つの色を見窄らしくそそくさと塗ったりまた落としたり。でもそれならきっとその色は、なくてはならないに違いなく、とは言えそれにしては扱いがぞんざい過ぎないか、それともこっちが色塗れなんで、そう見えるだけかな。でもどうして、どっさり行き成り重たい雨が落ちて来そうな厚く暗い雲の下ばかりなんだろう。びしょ濡れで済む位なら増しで、流れた切り見掛けなくなった奴らなんて数知れない。その直ぐ隣には、どんな深い闇だって余りなく軽軽と吸い上げそうな輝く青空が突き抜けて、その光りが重く分厚い雲の端を縁取って煌めかせてさえいように。見えない筈はない、知らん顔を決め込むのは何故。直ぐにもこっちへ来たら良さそうなのに。でそれから何も考え浮かばないのは何時もの事で、どうにもならずうんざりするとも分かっていて、奴らに届く声も持ち合わせないなら、またうんざりして。それで

もその繰り返しの中から見付けたのは、色の数こそまるで違っても、この身と形と大きさがどうやらほぼ同じのが一つ、で、そいつもこっちを分かったか、何となく互いに側に居るようになってしまってる。余りの色違いでは、何の絆しか差して知りたいもないにしろ、見上げるのが青空と真っ暗な雲でまるで違うのに、そいつとだけは何処か似た所に居るようで。ん似た所って何処、似たようなものでも啜って腹を満たしているのかな、なんて、知れても知れているだろうとぼんやりしていると、川の水がそろりと高くなり、どの湧き水も真上を向いてまた勢いを増し、びくつくように風も縮んで動く筈のないものが、あちらこちらで嘘のようにぐらつけば、ひやりともう流れ出して、その下のすっかり速い流れがぐりぐりと口を開ける、そんな眺めばかりに囲まれて居て。でもそれって、まあ形なんだよね、色はその形に釣られて動きはするけど色は変わらない。こっちは兎に角、色で塗り固めて生きてるってなもんだから、そんな眺めなんて疾うに見飽きてるかも知れない。って言い方も何処かおかしいかも知れないようなのは、そんな眺めに目を向けさせてしまうもの、それは何って直ぐ見付かるのは、空の向こうからそっと、でも聞違いなくここを目指して来たとは分かる声が今さっき初めて聞こえて、見飽きて見損うばかりだったずっと丸きり水に抗えない形のあれこれを、目にくっきりさせてしまうから、で、きっと。んそうか、その声が届いて、それはそのままに静かに浮いて留まるの

が、そいつとだけの似た所なんだなって思い至りそうな内に、そいつはもう先にその声に取っ付いて、もんどり打って、その一つ切りの色と組んず解れつして、いやそうし損なってその一つ切りさえ諦めて、諦めたなら諦めた事なんてきっぱり忘れるように酷く慌てて、その声のどっちから来たか真っ直ぐ分かってるみたいに、吸い取られるように消えてっちゃったけど、何。何ってのは、それと何が似てるかって、こっちと。そりゃ聞き取れた同じ声しかないよ、ならこっちもその声と連れ立って、あいつを追っ掛けるしかないんじゃ。幾ら色と言う色をその僅かな違いまで独り見分けて数知れず塗り固めても、その足元が、形なら何でも押し流す水と来たんじゃ先はないぞ。って言ってたかな、あの声。いやまるで違う。だってそんなの元からだもの何でもない。なら何が先がないのかって、そりゃ一つしかない。んだからそれが何か考えるまでもない、そんななくてはならないに決まってる一つの先が危ういって、あの声は伝えて来たとか。そうか、それで一つの色しかないあいつは直ぐにピンと来て飛んでったって訳か。ならこっちも後を追わないと。幾ら数知れない色で塗り固めたって、一つしかないその一つを放って置いて知らん顔しては居られないっての。元から知ってる。何故かって、それも一つの事の内だから考えるまでもない。いや違う。それが水に抗えない形ってもんだって、ずっとそう知らず知らずにも眺めては来たからで。形なしには色の置き所のない位は分かる。でそれ

から先に何も考え浮かばないのは、さて色をどうしたものやら、さっぱり分からなくて。色を捨てれば声を追えるかも、でもどう遣って。それとも色を捨てなくても追えるのかな、でもそれだって、どう遣って。分からないなら考えないに限るって、ふと見ると、見損ねてたか一つの形が、それだけは速い流れも何でもないみたいに動かない。それはもう、そこいらの奴らに見咎められて、色色探りを入れられてるみたいだけど、何も分からない内に、自ずとくるりと延びるように丸くなって、すると吃驚、水より透き通った卵形で、尤も水は何処も刺刺と濁りっぱなしで、そう見えてしまうだけかも知れないけど、真ん丸じゃなくて卵形なだけに、泡みたいに水に従うんじゃなく、きっぱりその鮮やかな形だけの向きを指して、突っ立つような流れも軽軽避けて、少しずつ高くなる辺りへと身を滑らせてる。ならきっとこっちは、そこへ降りたいんだ。そのためにずっとそれを探して飛んでたらしい。溜め込んだ色だって捨てられる。そうして色をなくした翼を畳めば、それとそっくりな卵の形。なんてのは先走りなのは、もう見失ってないかって何を。ただそのそればかりが水に逆らって緩りと高くへ身を拗らせてる他に何も見当たらないでは、その後を付いて行けてるかも覚束なく、もう何の色もなく。でもうそれは卵形でもなくて、そこに有るように自ずと有る形、形でもなさそうに。なら行く先はそのようで居られる所に決まってて、もうそこに居ないとね、そんな形として有るのなら。で、有

るのかな、それ。ってなら有るんだけど、そのせいでかどうやらこっちが姿をなくしてる、のはまあそれとして、でまたそこで、そこいらの奴らに見咎められると、それは、薄衣を扇を拡げるように纏っただけの独り真っ直ぐな女で、白い顔は見事な卵形で少しも崩れてないんだけど、長く伸びて行く髪の毛は真っ白、体の形はすらっと若い娘みたいなのに、肌は乾いて隅隅まで細かく捩れる白い皺が刻まれ、蜘蛛の巣をびっしり体中にこびり付かせて嬉しいかのよう。そんなもの見せられては、こっちは色をなくして姿も消しといて良かったってホッとしてるようでは先が思い遣られるな、の先をもう女は向いて、「もうここにも居られないのは、血が凍って硬い木の根のようだから。凍るようでも触れば熱いでしょう。熱過ぎて触れるその手が氷のように冷たくて、その冷たさまでも攫いに来る水から土が溢れましょうから、ここにも居られないのはあなた達も同じと分かります。だって冷たい土なら硬く凍る筈でしょうに。冷たいままに何の泥がそれを流すのか、それがまた何を流して山の土は崩れるか、それを知れるのは、ただきっと、ね。」と向きを変えると、そっちには、見窄らしい一つだけの色も剥げ掛けた、あの声へ消えて行ったあいつ、その形はそのまま、それを見て、こっちも同じ形の己の姿を取り戻せたかな。とそれが災いしたに違いない、色もなく翼も畳んじまって、どうしてそのままに居られよう、濁り水の流れに攫われなくてさえ、何処へ行くやら知れもしない。そんなこっ

ちを見届けたからかは知れないが、女は扇を閉じ置くように立って、そこからまた少しずつ高くなる辺りへと身をぬるりと滑らせて行方知れず。いや行方知れずはこっちの話しで、きっとあいつは、剥げ掛けても一つだけの色を頼りに、だってその色だけだろう女のあの白に添えるのは、でその後を追えたに違いない。でも女の声は、あの何処からか届いた声と、同じだったか違っていたか。はっきりどっちかに違いないのに、はっきりしないままは恐ろしい。だってそのどっちかで、この世の眺めはまるで違う筈。真っ暗な雲の下か青い空の下かのように。そのどっちかが分からなくて、どっちを向いて何をしに行けば良いかどうして分かろう。しかし待てよ、どっちを向くももう行方知れずで時ばかり過ぎて行くんだって、こっちは。そんなこっちを余所に、そっちのそこいらの奴らは、女の残した声をどうしたものかウロウロしてる内に揃ってウトウトし出して、それに怒りをぶつけられるように物凄い音で、毎日磨いて水色の艶を出した地べたが引き剥がされると、奴らの眺めている筈の幾つもの眺めごと渦を巻いて分厚い泥の落ちる方へ一息に呑まれて、それで後に残るものなんて何もないよなって思っていると、山を幾つも重ねたより濃い影の重そうな森の塊が狙い定めたかにすかさず流れてそこに収まって、その森の奥の数知れない色の違いを見分けられるのがこの身一つに違いないなら、きっとそっちへ渡って行ける。でその森かどうかは分からない、こっちの行方知れずには変わりは

なさそうなので。でそこで出来る事と言ったら、少しも色の事でなく、どうしてそれをこれまで考えずに済んだかさっぱり分からない食う事で、それればかり考える程、獲物にはすばしこく逃げられるばかり。翼なんてもう有るか無いかか知れないなって思う時だけ、要らないに違いない色を色色に纏った翼が目の前を、闇を幾らでも吸い上げられる青空を向きたげに羽搏いて、益益空きっ腹を揺さぶり、それでやっと、渇いた喉を絞れば色色の声をか細くも真似られて、女の声が初めに届いた声と同じだったかどうか分かるらしいにしろ、今更それで何の熱い身を冷ませるでもないなら、（二〇一六年五月二十六日）

（俺は何を無くした…）

俺は何を無くしたと思う、その、もう取り戻せないのは何だ。何を無くしたって？俺はまだ、無くす程の事さえ何も残せて無かろうが。けっそんな言い草しか残ってないのは、すっかり無くしちまったからさ、そんなの元から分かってたろ。元なんて言い出す奴の元なんて如何様に決まってるが、さて元って何処かな。ここじゃないか、他の何処だ。ああ確かにな、でもそのここには、その無くした何かは確かに有ったじゃないか、もうここじゃないそのそこの、こ

こにはな。またつまらん言い換えだな、ここは何処だろうとずっとここさ、いや違う、ここにはもうここなんて無いんだ、そこには有ったかも知れなくてもな。だからそう言ってるだろ、だけど元からもここからも無いんなら、どっちもどっちで、ただ無いって事だけは分かってたんだ。そんな訳有るかよ、無いって分かるには、何処かに何かが有るには有ると分かってた筈で、いや違う、きっと無いと分かってそれで有るのを知れたのかも知れない。ふん、そんな話し今更どうでも無いさ、って何処かに何か増しな話しが有るでも無いがな。何だそれ、俺には何も無くても話しだけは有るぞ、こうしてな。こんなのが話しだって！そうだ俺は何が何でも話しだけは、もうどうにもならなくてみっともない位、無くしちまって。独りでその積もりになるなよ、どうにもならないなんて言い草、話しのみっともない尻尾みたいなもんさ、切っても切っても尻尾が生えてくるなんて事は無いだけにな。ああ切られた尻尾が話しと言うなら話しだろうよ、だけどそんな話しなんて要らないんだよ、要らないものは無いも同じさ。どうだかな、要らないって言ってる俺が、端から要らないって話しだって有るだろうよ。有ったらどうした？有るだけのものなんて無いんだよ、無いだけが有るだけの有るなんて、何の事でも無いさ。で、そんな出鱈目な御託、何時まで並べてんだ。何時までって誰も教えちゃくれないなら、って出鱈目な御託とは何だ、て事はこの先ずっとって事かな、やれやれ。やれやれで済

まされて堪るか、何が有っても無くてもそんなもの要らないその要らない俺だけが、何も無いか、ここで、何を無くしたかずっと知れないままで居られるかよ。居るじゃないか、しっかり声も出てるけど、ここって何処だ、無いんじゃなかったっけ。知るか、有っても無くてもここって言や、ここだろうか、で何がどうなるで無し。そりゃそうだな、それで少しも構わないぜ俺は、だって何を無くすも何も知った事じゃないなら、何処が何処だろうと無くすも何も無いからな。巫山戯るなよ、そんなだから、こんなんになってんだろうが。で何がいけないのかな。お前とは話しが出来ん。誰だお前って、俺には俺しか居ないだろうが、俺と話せないなら誰と話す積もりだ。「おっと、俺が呼ばれたのかな。」そうだお前だ。誰だお前。「お前が知らん筈ないだろ、俺なんだから。」誰に言ってるんだ。「そう言うお前こそ、どっちの俺様かな。」お前なんかに話す事は無い。「そりゃそうだ、こっちだってそうなんだから。」お前の薄汚い薄汚れた穢れ果てた反吐の出そうな声で一つだけ分かったぞ、俺は何かを欲しかったか何かなんだ、それが有ったか無かったか知りもしないで、要るか要らないか、きっと確かめもしないで、それで…。「ほう。で？」で？じゃないよ。で？の次がお前なんだよ、いや違う、お前が先で、それで俺は、何も無い俺のようでも何か有るに違いないって、いや違う、俺には有るものが有って無いものは無くて、だから何を欲しいとか何かなんて無かったんだ、有る筈がない、でもそ

れで。「ほう。」だからどうでもお前とだけは話しを付けて置かなきゃならないって事だ。それはそうだ、偶にはお前、俺の言いたい事も言うじゃないか。お前じゃなくて、お前は俺なんだろが俺が、お前はあいつだ。「おっと俺は俺にも俺だが、それで？」お前なんか要らん。「話しを付けるんじゃないのか。」済んだ。どう済んだんだ、俺は何にも済んでないぞ。こんな奴と話したって話しは済まないってこいつに言っとけば、それで話しは済んだって事さ。それこそ全く済んで無いって事なんだよ、こいつじゃなくて俺だろ。「俺も話しは済んでるに賭けるぜ、但し話しの他は何も済んで無い、そっちのお前とはな。」待てよ、お前だって俺だろうが、だったら俺って言えよ、俺。「そんな事しか言えないお前の俺は、何も知らないのさ。こっちの俺はもう、知れるだけは知れて、それで済んだんなら済んだって事らしいがな。尤も済んだ後の事は、何にも済まされようも無いじゃ、今にどうにかなっちまうかなフフ。」…。じゃその俺の替わりに俺が聞くけどな、俺は何を無くしたんだ。「俺と同じものだろうな、そう思うだろ。」で？「で？じゃないよ。元は、お前の俺が持ってたそれさ。持ってるとも知らずにか、知ってたとしても知ってたと知らずにだ。で、俺は何を欲しかったんだ。欲しかったとも知らずに。それを俺のお前が答えなくて、俺の誰が答えられるもんか。「俺」違う、俺が何かを欲しかったなんて、俺が俺の為にでっち上げた嘘だ。「俺が俺に何の嘘を吐けるんだ、アホらしい。」俺

言い方を換えてやろう。いいか、お前の俺が何を欲しかったって？欲しがるようにさせたのは、俺さ。お前が何を欲しいかなんて、お前に分からせようとさせずにだ。お前にお前を、と言っても俺に俺をだが、さっぱり忘れさせてな。つまりお前には俺しか居ない。俺は全くお前だ。その俺のお前に、俺は今になって絡まれてるって訳さ、俺のお前こそ絡まれるべきなのにな。で、俺と俺に無くせるものって何だ。お前の俺の有る筈もない答えが俺に有るかな、おい俺！」ああそうか、じゃ俺はきっと俺に絡む俺が欲しかっただけか、そんな俺がお前なら、俺はお前を俺と呼んで、俺は俺なりに、欲しかったものは手に入ったと、手に入った俺に知らされて、もう俺に何を問うでも無い。「その投げ遣りのせいで、こんな俺になってるんだろうが、なあ、こっちの俺。」…。もう取り返せない俺に何を言ってもな。「何だと、じゃ俺と俺が何かを取り返せるとでも思ってるのか。俺のせいだぞ、それなら俺のせいでもあるが。」いか俺！俺はな、俺のせいで、俺の欲しかったものを、じゃない、俺の無くせるものを無くして、なのでそうして無くせたなら俺は、その無くした事を欲しかったと分かって、そのせいで無くしてはならないものを無くして、無くしたままに無くならないそれを、俺のお前に攫われて、そんな俺のお前を欲しかったのを悔いて、それで俺は俺の欲しい俺のお前とこうして話せて絡めて、それで欲しいものを手に入ったなんて嘘を俺に吐かなければならないのを俺のせいに

されて、それで俺のお前からどうこう言われるのは、どう考えても俺のせいだと俺に思わせる俺のお前は、俺には要らないと考えるしかない、いや違う、考えたいと望んでしまって、それで何が欲しかったかって、俺に尋ねたところで、その答えを知ってる事にしてしまう俺のお前がそれを分からなくさせるなら、そんな俺のお前を俺は欲しかったって事かな、いや違う、俺には俺だけで俺の欲しいものも無くすものも初めから有って、有ったからこそ俺はそれを欲しがれるし無くせるし、無くしたものは何かと俺に尋ねる事も出来る、そんな俺の何を俺のお前に分かるのか、って言えるなら、俺は俺の欲しかったものをすっかり無くしてしまって、無くしたそれを欲しがる事も出来なくて、だってそれはもう、俺のお前にかっ攫われてしまってるって、俺のお前なんかに話し掛けるしか無いんじゃ、それを取り返しようもないと、俺のお前から俺が俺に知らせて知らされるのを、俺の欲しかったかも知れない事みたいに、俺が俺に話し続ける俺の話しに、縋り付きたくもないのに、そんなように俺は俺に言い聞かせて、話しを終わりにしたいなら、それが俺の欲しかった事だったなんて、こんな話しは、俺のお前には全く無くても構わない事だと分かる俺を、俺を欲しかったと思える俺を、俺は俺に俺は何を無くしたと思う、なんて与太飛ばして、俺の前にそんな俺を引っ張り出して、それで俺は俺のお前に絡めるなら、そんな俺を俺はもう俺のお前に引き渡すしかなくても、いやないので、それで俺は、

俺は何も無くしてなんか居ないまま、俺を無くしてしまいたくなって、そんな俺を俺は欲しかった筈は無いのに、無いままにそうせずには居られない、なんて嘘を俺に吐くとも直ぐに知れても、そうせずには居られないなら、俺には今更要るも要らないもない欲しいものを、さもそれが有ったり無かったりするかしたかのように俺に向かって言い募って、それで何が欲しいも何も無くなれば、それが俺の欲しかった有りもしない俺の姿と俺を見限って、それで俺はそんな俺なんて忘れてしまえる俺ならば、ただ何かを欲しいだけの俺を手に入るとは分かっては居るが、そんな俺を俺は要らないにしろ、そんな俺でも俺で有る為には、そんな俺で無ければならないと、そんな俺を俺は欲しかったって、それで俺は俺に俺は何を無くしたと思うなんて、一一尋ねなければならなくって、それで俺のお前に俺は、こうして話し掛けずには居られない振りを続ける訳だが、そんな俺の話しが俺のお前に聞いて欲しいなんて、どうして思ってしまうのかな。「いいか俺。何を無くしたと思うかなんて事じゃないし、何を欲しかったかでも無い。無くすものなんて無いし、なので何も無くなりはしない。欲しかったものは今もこれからも欲しいまま。いや違う。俺はずっと俺が何を無くしたと思うか、の、その思う先に何を思うかを思って、そう思うしかないのが何なのかを知りたかった。いやそう知りたいとだけ思って居る俺の姿を、俺は欲しかった。そう、姿だ。姿って何だと思う？形や重さや大きさの思い浮か

ぶものなんかじゃないぞ、何処かにこれが姿だって確かめられるものなんかじゃないぞ、姿ってのは、何時始まったか知れないずっと遠くから跡絶えずに続く時を瞬き一つもしない内に覗き見られる事だ、それがどのようにも捉えられずに、影も形もないままに姿って事だ、それはそこにだけ有って動き出そうともしない時を覗こうとした覚えに捕らわれて、焼け焦げるようにそこに留まって朽ちるままを良しとする事で、その現れるのが待たれ続ける、そう待たれるまでも無いままに、そうだろ違うか？って俺は誰に言ってるんだ。俺の声はこの俺にしか聞こえない。他のどの俺も、俺の事なんて知りもしない。他の俺なんてものが何か知らないが、そんなものが束に掛かったって俺には係われない。俺だけは違うんだ、でも何が。いや何がも何も、俺に出来る事が出来るのはこの俺で、それが出来るかどうかしかない。それは何かの答えでも無い。そうでしかないだけの事が俺に、俺がその何かである俺であるしかない事から逃れられなくさせる。それが何だと思うって、ああ、思っても思えば良いさ、他に思う事も無いならな、ただそれだけの事。で俺は何を無くしたと思う？　この俺でしか俺に無くせるものを無くせない、その何かだよ違うか。って何を言ってるんだ俺は。の俺に、何がとか何にとかって何だ。いやそう言うしかないだろ、他に何が言える。俺に欲しい俺の姿はもうすっかり有るんだ。だからこうして俺は俺に分かる事を、分かりたいだけ分かるんだ、時は俺の思うまま

だから。時の思うままの俺でもあって。その俺の姿にぴったり嵌まった俺にはもう、何を無くすかしかなくて、ならそれが何かと思う他に、何の俺が有るものか。って俺は何を言ってると思う？　て思う？って誰に何を言ってるんだ、それ。そんなそれが何かも分からないのか！それが俺だろうが。ああ確かにそれは俺だろうが、何でその俺に俺は俺が何を言ってると思うって言われなきゃならないんだ。ふん、そんな事も分からないのか、それは俺が俺だからだろう。はぁ？何も言ってないと同じだ。何も言ってないと同じ事を言うしかないなら、それを言って何が悪い、って他に何も言えないだろ、何をどう言おうと。でも何が。って、言えないなら黙ってれば！って俺は黙ってれば済むだけの俺ごときに、何で何を絡まれてるんだ、って何が？で誰だお前。」「お前じゃ無くて俺だって俺に答えて欲しいのかな、俺をお前って言うお前の俺、だろお前の俺、違うの？何が？」「違うに決まってるだろ、頭から尻尾まで嘘塗れだな、お前。」「お前じゃ無くて俺だ、何がも何も、俺が俺を嘘吐き呼ばわりしてるだけさ、分からないのか。」「ああ確かに、嘘なんてどうでも良かったな、初めから嘘だって、もう分かってなきゃおかしいしな。でなきゃ俺まで嘘になっちまう。だから俺は俺に、俺が何を無くしたかって思うか、知れる事を洗い浚い、その嘘にぶつけて遣りたいのさ。」「何を無くしたかって、俺が？　お前じゃ無くて、この俺が。無くしてて無くなるものなんて、嘘の前から無いだけのものだったろ

うが。そんなもの、数えでもしたら数え切れず有って目が回るぜ。いや無かったんなら、数えようも無いんだがな。数えようも無いなら何でも有りって事で、その何でもかんでも無くなって行くしか無くて、そんなもんだったら、幾ら無くなったって無くなりゃしないだろ。何を無くしたかって追っ掛けたいらしいけどな、あれもこれも無くなり続けて、無くなれば無くなる程、幾らでもそれは、そんなように有るしかなくて、それで無くなって行く。そんな事でしか有るしかないものは有り得ようも無く、無くされて行くんだな。無くしても無くしても、何を無くしたか探し続ければ、有っても有っても無くなり続けるって訳さ。無くした何かなんて一つも見付からずに。いや違う。無くなるだけの無くしたものなんて、有るもの無いものの指差して行けば、どれもこれも無くしたものだ、有るままに無くしたままにな。数えようも無いも何も、数なんて何処にも有りゃしない。そうだ、無くなるものは、有るもの何もかもで有っても、数だけは有りもしなかった。なら却って、数だけは、有るもの無いものなんかよりずっと、無くなりようが無いって事か。そうで有ったとして何だ、何でも無い、だろ？　どうで有っても何でも構わなくて、何でも無いのが数だ。いや違う。数などどうでも構わないなら、数がどうとか言い出す事が間違ってる。間違ってるって何だ、俺の思う事に間違いないなんて一つも無いぞ、俺が俺と分かってて思う事は何でもな、俺にとっては。いや、だとしたら俺を俺と分かっ

てないなら、数がどうとかは間違いって事か。ん、そうだろうか？　これだってただ数を数えてるんじゃないか。何だこれって！行き成りどのこれが、何処から出て来るんだ。こうして何を俺は無くしたかって、言葉を並べたりしてるのは、ただ数を並べてるのと同じじゃ無いかって事さ。こんなの、石ころを並べて喜んでるのと何が違う、いや石ころならまだ並べたなら並べただけの事はある。へっ、石ころって何だ、言葉なんて石ころさ、無くせば初めから無かっただけの。言の葉っぱを石ころと言い換えて、それで何か言った積もりか下らん。数なんて並べて無いさ、何一つ並べて無いぞ。無くなって行くばかりの無くすものしか無くて、何を並べられる筈もなかろうが違うか。数えられもせず並べられもせず、無くしたものは幾らでも何時までも無くなり続けるままに有り続けて、ああそれなら、有っても有っても止め処無くて、どうにもならない。いや違う。もうそんなように、どうにもこうにも成り果ててるんだ。そんなものの等に何を無くしたなんて問い掛けて何になる。そんな無くなるだけの問いだって、幾ら有っても有っても、無くしてみれば無かっただけの問いだ。じゃ俺は何だ？俺だけが無くならないのは何だ。俺だけが無くならないって何だそりゃ？俺なんて俺が何かを無くす前から無かったんだぜ、そんな事も分かって無いのか。俺が無かったから俺には無くすものが幾らでも有って、そんなもんが押し寄せて来て、でそんなもんらは、さっぱり何処までも無いんだ。そうでな

きゃ何が止め処なく無くなるも無いだろ。いや違う。そんなのは俺に言い訳してるだけで、そんな言い訳こそ幾らでも拵えられて、無くすだけの無いものさ。言い訳を已めてみれば俺は何を無くしても無くしても、ただ俺で有るだけで無くしようも無いんだ。何故俺だけが無くならないって、そんな問いも有り得ない。有るように見せ掛けるなら幾らでも出来ても、無いものは無いだけの事さ。で俺はそんな無い俺から抜け出せるか？って誰に何で尋ねてるか知らないが。抜け出せるとも！俺は俺を消せるか？消せるとも！煩いよ、俺も含めて誰もそんな下らない問いになんて見向きもしないさ、だってこれって、ずうっとそうしてる話しだろ、俺が俺から抜け出して抜け出した俺を俺が消す他に、俺に何の話しが出来るもんか。嘘じゃ無いぞ、嘘でも構わんが、嘘なんて有りもしない嘘なんだから。そんな俺だから、俺だけが無くならないなんて話しは、無くならない俺が無くされた俺に言い訳を拵えてるだけに決まってる。なら、無くならない俺ってのは、言い訳の塊かって、何だそりゃ。まるで違うだろ。これ、言い訳出来ないって話しじゃないか、初めから。つまり俺は俺をお前って呼んでしまえるのからして、俺はお前に、何の言い訳も拒まれてるって事だ。ああ拒まれたままに、そんなの知った事じゃ無しに、俺なんて幾らでも無くせるぜ、すっきりしたもんさ。俺は何を無くしたかって、答えなんて糞だが有るなら一つ、俺だ。ま、何だ俺？って俺だがな。なのにお前は、無くさ

れた俺なんて、初めから無くなるばかりに幾らでもそんなように有るだけのものだって知ってて、いや、お前が何を知るもんか。知ってるのは、お前じゃ無くて、お前を俺から奪ったものだ。何だって？俺から何を奪えるものが有るってんだ！無くせるものなんて無いって、反吐が出る程確かめて来ただろうが、全くそれしかしてないぞ、ずっと。いや、それは俺が俺でしか無いからだ。でも俺がお前なら、お前は俺から奪われるしか無い。分かるか、俺にはそれは奪うお前でもあって、お前が俺の無くしたものを無くしたんだ。いや違う。だってお前が無くなって居ないなら、」…全くそうに決まってたんだよ、決まってなくても。そんな事でなら、それ位にしとけよ。しとかなくても構わんが。「誰だお前。いやお前なんて誰だろうと知るか。俺はお前を俺から奪ったものを知りたいんだ。の、知りたいって何だ。俺は何を無くしたと思うのと何が違う。それは全く違うんだ、分かり切ってる、でもその何が違うかだ。俺はそれを何だと思う、の思うって何だ？俺はその、思うを無くしたんじゃないのか。思うも無くなれば、何が違うかも分かり過ぎてしまって、さっぱり分からないに後戻りで。いや、そのさっぱりから全く怪しいし戻れる後なんて有る筈ない。だって何を無くしたとも思いようもないんだからな。だからそれで、俺は何を無くしたって思うと思おうと思い続けるしか無いんだが。思い続ける限りに何かが俺から無くされて居るなら。いや、そんな事じゃない、違う。俺から奪っ

ちっどもでもでくない。全く一つしかないんだ、他に何が有るってんだ、全く一つしかない。でもどっちを向けば、そんなものと向き合えるか、いや、俺から何を奪ったなんて事、何も思うもない俺に、どうして分かるもんか。分かりもしない事を、そんなように、何が何に取り囲まれてるだけで、なら俺じゃ無い、ま俺じゃ無いのは疾っくにそうだが、奪われたのは、その何が何にで、そいつがそいつを奪って、いやそいつって誰だ？でもそいつにして置くが、そのただ奪われた事だけが、残らなくて良いのにみっともなくも執濃くも残ったって事じゃないのか。じゃなきゃ何だ、ん残るって何だ、無くても有って有っても無いって事？けっ今更またそんな出来損ないの話しの欠片か。で誰だお前。」お前の知らないお前だ、俺の知らない俺でも有るがな、ずっと。その俺がお前に言ってるんだから、何も言ってないと「何だ、その反吐塗れの言い草に糞塗れの弱腰は！匂いもしないぞ出来損ない。」同じで、だったら俺も、お前の俺に何を言ってても言わなくても、何だって、その、(二〇一六年六月十八日)

***** ***** *****

知らない誰かか何かの夢日記

（二〇一六年六月二十一日～九月二十三日）

若い女の見た夢

　側まで近付いて木を見上げて居る。小さい。それは直ぐ木だと思えたが、木が小さいなら私も小さいのかなと考え直すと、私だけが小さい。それもどうかなと見直すと、木も私もその常にあるような大きさで、何が小さいも見付からない。ならそれを眺めているのが小さいに違いなく、狙いを定めるようにその誰かへ振り返る。立つ瀬を無くした私は、仰向けに倒れるしかなく、このままでは深い川の底まで真っ逆様なら、それがどんなようにか、髪の揺れる様から手と足の指先の撓りまで、しっかり見て取らなくてはならない。そうしてその姿へ目を凝らすばかりに拘っていると、そこに川はなく、長く伸びた脚で、ほんのり光る道を歩いている。木を見付けて木の側まで行くんだ行くんだと思う程、木を見付けられないのが怖くて、目を伏せてしまう。木ではなく、川を探しているんだね見た事もないような、と木が教えてくれる。それにホッとしな

がらも、嫌な曲がり方の怒りに似たものが込み上がる。それで道は、光りが強くなり過ぎたせいか何処かへ裏返るにしろ、もう遠い事。木の実一つも転げ込める隙を与えない深い草原を、はち切れそうに空へ昇りたそうな風が、見逃しようもない嫌な曲がり方で一渡りに低く滑って、川のように踊る。（二〇一六年六月二十一日）

若い男の見た夢

鬼の見る夢を見に行きたい。そう願う私では体がない。体がないでは見にも行けないし、じっとして居なければ僅かな風にも吹き消されそうで、ただ辛い。遠くからのような小さな声が近くで耳を揺する。ずっと昔、私を助けてくれた懐かしい優しい鬼の声。その籠もるように響く重さに、体が有るのかないのか分からなくなる。分からないなら、分かると思えば有るんだと思えば有る。何処にも見付からないだけで。そうしてもう、とぼとぼ歩くしかないのは、鬼どころか獣すら逃げ去った暗い山並みを向いた細い帰り道で、逃げ遅れた獣でだけはあるまいと、土を踏み叩くように進む内に、草の丈が高くなって道は消え、山の向こうから鬼の哭き声が聞こえたかも知れない。辛いのは鬼で、鬼の願い

は誰が叶えるんだろう。そこでそう思えたなら、そんな私を誰も助けには来ない。ただ静かに風に耳を欹てれば、鬼が夢など見るものかと聞き分けられそうでもある。その風が何処にもないのなら、夢は命の捨て所、そう哭いたのか、身を隠すばかりな鬼ならば。それでまた無い風を聞き直そうとして、鬼の命は何だろう、鬼の命は何だろうと続く、山で生きる者等の遠い谺のような節回しに、耳は攫われ、痩せるようなばかりに寒い。片腕にしか力は残って居らず、堪らず四つん這いに傾いで、その腕で強く土を掻く。その度に、やっと擡げられそうにも頭はコクリと落ちて、濡れた土が額にべったり着くその繰り返しが、何時しか鬼の遠ざかる足音になっている。（二〇一六年六月二十二日）

幼子の見た夢

　暖かな所から来たせいで、ここでは、丸い星の上に果てしない空が拡がるのでなく、この星ばかりが平らに重い闇を延ばすように果てしなく低く続く上に、小さな透き通った歪んで丸い空が、申し訳なさそうに乗っかっている。僅かに明るいその狭い空の中を、その青を全て吸い取ったかに灰色の私は、横向きで、立つとも座るともなく浮かんで揺れている。見掛けと違って体が硬く固まって

いるのは、「気温」がないからで、それならきっと何処も冷え切っているのかなとも思えても、体の何処も冷たくはなく、それで却って凍ったように動けない。目を瞑るだけは出来る。すると体はもう、それも脚も首も脹れた腹へ緊く折り畳まれて、更に硬く、丸い小さな星の真っ暗な中に押し詰められている。その私の重さでか、落ちる筈もない辺りへと、星は針のように落ちて行く。それを見送るのなら、私はそこから抜け出せて居て、そら、見上げれば果てしない空だ、の空は何処。星を追い縋って空もまた消え落ちるしかなかった、と分かる瞑るままの目が、塵のように一つ、くるくる回る。傍らの何かが、そっと温かい。そちらへ幾つも、くるくる回る塵が寄って、灰の舞うように青い。（二〇一六年六月二十三日）

天使の見た夢

　腹を空かしてふらふらと、安い食い物屋へと足は向いても、「天使の話しは聞き飽きた」と汚い大きな赤い字の看板の店に入るともう、鼻先に髭面の店の主で、その太った小振りな体の直ぐ後ろには、売れ残った天使の本が天井まで積み上がっている。本と分からないなら全くの壁で、二人なら辛うじて体を張

り付かせて立てる床が覗くだけで、後は店の中は、右も左も隙なく本の壁。狭いから出よう、と男の指差す本の壁の端に開けられた四角い陰から、小さな鼠が顔を覗かせている。身を限り限り平たくして後を追うと、積み上がった本の裏は鼠に好いように嚙られたに違いない穴だらけで、鼠に姿を変えて、鼠を追って穴に入ると中は迷路のように入り組んで、鋭い音を残して凄い速さで擦れ違う鼠達は増えるばかりで、遂にはどれが私か分からなくなった。これでは出ようにも出られない。出たいのは私独りと来ては、全くの手詰まり。と、ひょっとして鼠達は全てあの看板目当てに私より先に店に入って鼠になった天使なのではと閃いて、そのまま走り続けていると、擦れ違う鼠の数は見る見る減って、もう行けども行けども鼠と擦れ違わない。一匹残ったそれを、私と疑いようはない。それでも何処をどう走っても外へ出られないで居ると、煙の匂いがして、ひたすらそちらへ駆けて、火を突き抜けてやっと外へ転げ出た。店は火に包まれようとしていた。看板を下から火が舐めて、一際黒い煙を高くまでくっきりと吐いた。見上げるとその煙目掛けて、一つ一つ粒立つ雨粒のような天使共が、土砂降りさながらに落ちて来る。何とも酷い眺め。酷い！　いや、雨粒の一滴に紛れると言うのも巧い手かも知れないなと、火に飛び込む。裏手から水脹れした大鼠が飛び出す。まさか私？とハッとしたが火傷が痛くないなら私ではない。膚を焼け焦がした大鼠が飛び込む溝を、数知れぬ雨水の天使共が

激しい水音を立てて追う。私はその内の一粒で、巧いぞ巧いぞと浮き浮きして居たのに、溝に小石が落ちてその撥ねた一滴が私とは。他の雨粒とはぐれたのではと諦めて、人の姿になって寒空を見上げると、雨雲の端に私そっくりの天使が空へ昇って行く。ああ、天使の私は、ああして胸を反らして帰って行くではないか！　何と美しい清清しい眺め。嬉しさが込み上げ、そのままの笑い顔が笑い皺ごとしっかりと固まっただろう。天使は笑わないのは誰も知っている。これでもう誰にも天使と見抜かれない。いや天使の私なら、ああして帰って行ったではないか！　黒焦げの男を埋めて隠して店を建て直して、「天使なんか遣ってられるか」と真っ赤な字を態と下手に書いた看板を掲げて、ぴかぴかの店に入ると、大鼠の姿は無いが、あの溝が回り込んで来ていて、その尖った端で、流れ込んで来る雨水が勢い良く撥ね、その一雫一雫が皆、私と同じ笑い顔の固まった天使となって充ちる店の中は、もう天使で一杯で息も出来ない。天使の共に代わる代わる踏み付けられてばかりの、大鼠の匂いをぷんぷんさせる平べったい悪魔を叩き起こし、店は只でその悪魔に売り渡した。悪魔にしか使えない金を少しばかり受け取って、つまりそれはこちらには紙屑と分かっていながら。その悪魔から受け取った臭い紙屑を握り締めて、仲間を一絡げに売ったからには、この先どうなろうかと思い詰めていると、すっかり笑顔は消えていて、「よぅお前天使だろ。まぁ一杯付き合えやぃ」と痩せて見窄らしい身なり

の酔っ払いでさえ、私を天使と見抜いて絡んで来る。酒場に入って酔いが回らないよう程程に付き合って、これまでの経緯を初めから喋った。余りに下らないと思えるのだろう、酒場は笑いの渦だが、私を引っ張り込んだ酔っ払いだけは少しも笑わず、項垂れてむっつりとした天使の顔になって行く。天使め！とそいつだけ残して次の店に繰り出す。肩を組んだり艶っぽい唄を歌ったりで、やっと私は、天使でないと自らを信じられた。そう言えば初めて呑む酒だ。残して来たむっつり顔が思い浮かべば、ゆっくりゆっくり笑いが込み上がる。笑い声に添って、愉しげにゆったりゆったり波打って行く満たされた腹は、天使には真似も出来ないだろう。しかし易易と悪魔と取り引き出来た辺りから、これは夢なのではと言う疑いを、揉み消し、揉み消し、しても居る。（二〇一六年六月二十四日）

女の見た夢

大の字に大きな木に縛り付けられている。枝は太く硬いので、その形のまま体も歪んでいる。素っ裸で股を大きく開いているなら、子供を産もうとしているのだ。辺りは薄暗く、私独りが喚いて居たにしろ、もうすっかり静かで、お

産は済んだに違いない。腹の痛みも痛かった憶えもない。縛めを解いてくれる者もなければ、夜で、霜が降り肌はびっしょり濡れる。僅かに震わすと、そのたっぷりな霜が少しずつ滑らかに乾いた布に変わる。そうして身をすっかり覆う、水を弾く布が仕上がると、また濡れる肌から肌理細かな新しい布が滲み出て、次次に外へ押し出されるように重ね着され、着膨れは止まらない。重みで腕を縛る枝が折れ、膝を緊く折った逆さ吊りのまま、脚を縛る枝は測ったように少しずつ撓って、遂には硬そうに見えただけの土に頭がめり込んで、後は分からない。きっと木が、夢を引き継いだに違いない。子が捕らわれて殺されるのを、木は嘆いていた。そう定めを負うらしい。逆さの幼子が、木の頂から真上に伸びる柔らかな若葉を撮み、逆さのまま木を登る形に、高く細い枝から太い幹へと移って来て、もう降り立てそうな辺りで眼を落とさんばかりに土を睨んで、洞にでも身を隠したか姿が消えると、木は枯れ、一日で腐って、風にすっかり吹き払われた。それでなのか、子は首斬り人の手で胸を押さえられて居たのに、遠い大きな湖を前にした都から届いた短い手紙で、殺されずに済んだ。

（二〇一六年六月二十五日）

除け者の見た夢

　必ず聞き逃してしまう速さで無期懲役を言い渡されるが、それよりも、彼らの目にも止まらぬ速さで、傍聴席との間の汚い溝に飛び込んで、裁判所の地下を掘り抜いたその溝を潜って外へ出れば、顔形から性別まですっかり変わっていて、指名手配されたところで何でもないが、ひょんな事でまた捕まって、何故なら捕まり慣れて居るのでは何ともならなくて、でまた無期懲役にしろ、直ぐにまた逃げられる。自らの姿形などまるでどうでも良くなって、広場の端の大きな切り株に腰を下ろし、少し離れて砂遊びをする子供達を眺めて居る、何時の間にか引っ張り込まれ、砂をザリザリ食わされたり、それを尻の穴に入れられたり、それを勢い良く噴き出したりさせられた。子供達が皆帰って、独り動けずに汚れた砂に半ば埋もれ、白い激しい雨の降り已まない闇夜の空を、夜が白むまで見上げて居た。すっかり朝になって砂は汚れを落として真っ白で、陽を浴びると紫に輝いた。子供達は怖がって近寄らない。親が駆け付け町の顔役が駆け付け警察から裁判員まで駆け付けて、その紫で大騒ぎになる。延延話し合われるが、答えなど要らないかに、話し合いの長引くのを励みとするかに、彼らの口は止まらない。どうやら、砂に何の罪を被せるか、と言う事らしい。私は、陽の傾くのが待ち遠しい。真上に居座る眩しい陽は、彼らの答えを待たされるのに疲れ切って、再び動き出す力など取り戻せないかにじっとしたまま

で、それが空からボトリと落ちて、生まれ付き弱く白く柔らかい私の腹に凄い勢いで叩き付けられて来ないか、その恐ろしさに心はもうズタズタで、これでは何の情状も認められずに刑は執り行われるまま果てもないと彼らに知らせたいが、私の声など誰かの耳に届いた例しもない。それから何があったか、砂場はすっかり踏み荒らされて見向きもされず、夜の来ない広場には子供の声もない。
（二〇一六年六月二十六日）

夢の見た夢

　夢を見ようとしている。これまで見て来た夢には、悉く夢を絶ち切られて来た。ならもう、そんな夢ではない夢を、夢は見るしかない。ついさっきまで犬ではなかったと直ぐに見分けられる犬が、それにしては少しも乱れない犬らしい脚捌きで、跳ねるように遠ざかって行く。うっかり後を追えば、また続きはな夢を断ち切る夢でしかないなと見えて、消えるのを待っても、点程に小さくなった後ろ姿は、更に遠ざかっても幾ら遠ざかっても、それればかりは彼方へと突き刺さって行くかに消えず、それを追うこの目が、針のようになって、そちらへぶっ飛んででも行かない限り耐えられないな、と立ち上がると、私がその犬

になる前のものだったと心付く。その事を恐れるべきかホッとすべきか喜ぶべきか悲しむべきか、まるで分からないなら、もうその心はその心のままに私の元を離れて消えて、心を無くした私は、浮き浮きと踊り出したくて堪らない。そうしてもう、どんな生き物にも身を変えられる脚捌きを数知れず繰り出せる。一つの生き物から違う生き物へだけでなく、一時に幾つもの生き物の脚捌きをすっかり備えた一つの姿にも易易となれたし、その幾つもの時を並べてそれらを抜かり無く組み合わせた姿にさえなれた。確かな事だ。これは夢ではない。もう夢を見たいとも思わない。どんな夢も下らない。（二〇一六年六月二十七日）

白の見た夢

長い壁の白い拡がりにだけ目を凝らし、それを絵に描いている。白いにしても陽の向きで、色が様様に差しては流れるので、その度に色を加えた絵は、すっかり色塗れの筈が、どうやら色という色を混ぜ続ければ真っ白になるらしく、新しい色を今また加えても、白に吸い取られて何の色も残せない。幅も高さも絵描きと同じ背丈の真四角では少しばかり大き過ぎて、打ち捨てる訳にも行か

ない。後ろの若い二人の声で、余りに長く彼らが場を外していたので忘れて居
たが、その二人を描いて居たのを思い出す。笑いながら絵と絵描きの間を擦り
抜けて白い壁の前へと走る、それを写し取ろうとすれば、真っ白だった上に直
ぐ様濃い色が乗って動いた。壁の前ではもう抱き合い組み合う二人なのに、絵
の中では、そっと寄り添って前を向いて肌も触れない。有るままの通りに筆を
走らせても、二つの体の形を囲む白が許さないかに、目を背けたくなるようにな
幼顔が並んで晒されるまま、その尖った目付きさえ動かせない。諦めて、傾く
陽に輝きを増す壁の色を絵に加えると、それをまた吸い取る白にしろ、その白
はクネクネと動いて、男と女の体の色を、ゆっくりとした渦のように絡ませた。
そこから壁に目を遣ると、組み合って居た筈の生身の二人は肌も触れずに並ん
で立って、その真っ直ぐな幼顔で、絵描きを睨み付けて来る。直そうにも絵の
中の渦は、絵筆を撥ね除けて後戻り出来ず、二つの体の形を繋げて一つに溶か
して行く。それはもう何だか分からない。それを見詰める絵描きの歪んだ顔を
指差して笑いながら、若い二人が軽い足取りで腕を組んで壁を去ると、筆を捨
てた絵描きに望めるのは、また絵が真っ白に戻る事にしろ、渦はもう背丈にま
で脹れて絵描きを誘ってさえ居るのなら、凡ゆる陽の色を受け続けて、絵に擦
り付けているままの酷く熱い体が、真っ白になるのを待つ他にない。（二〇一
六年六月二十八日）

路の見た夢

　何で動くか知れない箱の形の大きな乗り物に娘が揺られて居る。木の板を継ぎ接ぎだらけに打ち付けただけの壁にしては、整った形の窓には、青と黄色の薄い紙が隙なく貼られ、風に震えて唸っている。まだ朝の青空を真上に見て、街へ売られて行くのだと思うと、娘は耐えられなくなって、窓に頭から飛び込んで外へ降りようとした。窓から物凄い風が入って、壁も窓も全て吹き飛ばした。乗り物は何事もなかったかに広い路を行く。乗り物を操る男の裸の背中を見付けると、娘も下は覆っていたが上は裸だった。壁も窓も全て剥がされたのに合わせて居るのだと思えば、何でもない。風は柔らかい。昼少し前の陽が、肩と背を暖めた。路と言っても、歩いて渡るなら休み休み半日は掛かりそうな程に幅は広い。行き成り砂地に乗り上げて乗り物は使えない。乗り換えの駅はもう見えているのだから歩く、と母親が言った。母親は、びらびらした硬く脹れた飾りを前にも後ろにも盛った重そうな赤いゴムの服に身を包んで、肌を見せるのは白い皺の目立つ項だけだった。歩く内に草が高くなって母親は二人を見失い、二人は草に埋もれ、下の覆いを取って交わった。それが終わると川で、

二人は紙の小舟に身を狭くして下って行く。その母親の黙って見送る川は、川には違いないが、ぐるっと円く回ってまた同じ池に戻る川で、娘が高みに登って見下ろすと、池と川とで指輪の形に見えた。その眺めの中に、母を殺して埋めたにしろ、何処だか女は指差せなかった。土の下で肉も骨も流れ、それでもあの赤いゴムの服だけは木の根にべったり絡んで捩れて、親である恨みはしっかり残している。そんな事より男。その男が何処を探しても見付からず、池に身を投げようかって君？　あれは誰が操るのかな。男の姿になって、売り物になる娘共を街へ運ぶ乗り物を走らせて、それで生きて行くって手も有るのだよ。何から始めて良いか分からなくても、分からなくて良いのだよ。（二〇一六年六月二十九日）

女の見た覗かれる奥の夢

男を四、五人、家に一日中縛って置く。帰ると私は、そいつらに目隠しをし四つん這いにして並べた前で、裸踊りをしながら一人ずつに答を振るう。それを食らえば、どんなように私が踊っているか言い当てなければならず、外すと、その鼻に思い切り蹴りを入れた。動かなくなったのから捨てて新しいのを充て

る。中に一人、私が股を拡げて○○しているその○○だけを、間近で虫眼鏡で覗くかに細かく色形から何から言い当てる男が居て、他を外しても、もう蹴りは入れられない。或る日家に帰ると、私は吊されて目隠しされ、それを囲む男共が何をしているか言わされた。黙れば咎で、見えなくても男の喜ぶ事を言った。奴らがそれを楽しむと思うのは私だけか、縛めを解かれ床に転がされた私は、何の力も湧かず俯せで死んだかのようで、男共は見向きもせず輪になって賭け事に時を潰した。背を向けた男が行き成り「こいつおしっこしてやがら～」と言うと、私はしゃがんで溜まりに溜まっていたものを出した。それは○○を言い当てる男で、それからはその声に「立ってやがら～」と言われて立ち、「食ってやがら～」と言われて食えて、眠るのさえ「眠ってやがら～」と言われなければ眠れない。飽きられて独りになって、あの声なしでは死んだも同じで、やっと乾いた喉で「男の声してら～」と低く絞り出すと、男の声が出せた。「食ってら～」と言っては食い「眠ってら～」と言っては眠り「男漁りしに行か～」と言ってから男を漁りに行く。自らの喉を震わす声とは言え、その言う通りにしか出来ないのに変わりはなく楽しめない。あの男なら死んだとも聞いた。それから女の声に望みを繋いで女漁りに嵌まっても、私の遣る事為す事先回りして言い当てる、あの男の声に縛られるままで、女が使えないなら他の何でもと、望みを低く低く潰しても下には下が有るだけで、それでも「死んでやがら～」

を口にしたくないのは、行き止まりに見えてもその狭い下を、まだ奥へ覗けるからか。（二〇一六年六月三十日）

海辺の見た夢

海を見下ろす丘はすっかり拓かれた。それを、丘の頂の広い庭の古い大きな木が見下ろす。そこから道を降りて行くのを木は見ていない。庭のその家の主が脇を抜け、道を緩やかに下る道が、町の真ん中を海辺まで通るか、その足には中中の遠出でも海辺で遊ぶかしか知らない幼い娘を探すのだ。海辺にも見付からないと、海が分かれ、そのの道は続く。海の中にも町が拓け、やがて道は、海の底の大きな古い木に塞がれる。町も終わり、彼は木に登って、その先の暗い海の底に目を凝らして娘の行方を追うだろう。誰かが攀じ登って来ると分かって丘の木は、自らが海の底の木でもあるのではと疑う。恐る恐る横を向くと、丘の上から海を見下ろす眺めもすっかり後ろを向いても、同じ海辺を見下ろす眺め。一回りしても元に戻るだけ。幹に蛙のような危うい腰付きでへばり付く幼い娘は、太い枝まで来れば、濃く繁る葉に隠れた。海の底から彼は引き返す。その背にする道と町は、彼の歩みに合わせて海に消え、浜に上がる

と海の分かれ目も閉じた。そこから更に道を戻る彼の直ぐ後ろまで海は上がって来て、彼が庭に入ると、町は全て沈んだ。娘の名を呼んでも彼は木を見上げない。諦めて庭を横切り家に入り、蛙の腰付きで木を降りた娘が後に続いて家に入るのを、木は、海を背にして見届けた。さて、どう振り返ろう。丘の上から見下ろせる海辺の町と、跡形なく町を沈めた根元を波が洗う海の眺め。振り返ると何処も白い砂で、木も町も丘も海さえも、草の芽一つの影もない。しかし砂に覆われても、その直ぐ下に砂と同じに全く動かずに海のままに海は有る。それはずっと旧くからの眺めか、それとも遥か行く末の眺めか、どちらでもあるなら、背を向け合う二つの時の繋ぎ目は何処。それとも草の種の一粒と同じに、砂に埋もれて海へ沈められ、朽ちて果てた時か。（二〇一六年七月一日）

男の見た曝レ頭の夢

　取りに戻る忘れ物が何か忘れていて、それなら忘れ物は何処かへ戻る為の嘘にしろ何処へ何をしに戻るかも忘れて居る。足ばかり確かな事へ向かうかに止まらない。繰り返し現れるのは背の高い女で、擦れ違いざまその輝く目で、私の頭を見詰めて行く。あっと言う間でも、頭の奥を切り付けられるようで、そ

の度に白い光りが突き抜ける。見窄らしい他に何も目立たず却ってその醜さを目立たせる建物、ここだ。目の死んだ受け付けの女の渋るのを言いくるめた積もりになって上がり込むと、ガランとした誰も居ない中に髑髏が三つ並び、どれが私のか当てようにも同じに見える。女達のギラギラした目付きが頭を離れず、そこを出て女を探した。見付けては何をしたか詰め寄っても、目は何処を向いているか分からないように曇って、青空ばかりが瞳に映る。その度に私は、頭の骨の硬さを指で確と掴めるまで緊く圧した。次次に女に問い詰める内に、指の節は痛んで熱くなって、頭の硬さが怪しくなると、その指の熱でか、突き通る白い光りが頭の奥にのろのろと滲んで、三つの内の左が私のと分かった。左左と呟いて、あの建物を探すが行き着けない。左を忘れ何しに戻るかも忘れたなら直ぐにもそこだ、とは思えても、左の髑髏を頭から振り払えない。擦れ違う女のまた輝き出す瞳の中にも、青空を後ろに退けて髑髏が白く映るのを覗き見てしまう。目を瞑って、もう何処へとも走る。冷えた指で頭を圧すと直ぐに頭の硬さは伝わって力が湧いて、女の首を刎ねて廻りたいが、目を開けては恨みはあっさり軽く忘れられそうで、目を瞑ったまま遣るにはどうするか、考え続けた。（二〇一六年七月二一日）

病む夢

　捩れる程腹が痛くてのたうち回る時、何故腹は痛むのだろうと、その痛みを考える糧にでもするように、ずっと考えてしまうのは何故。胸の痛くて息も出来ず蹲る時は、その痛みの去るのをひたすら待ち望むだけで何も考えられないのと、何という違い。それはきっと、胸の痛みは全く命の痛みで、腹の痛みは、幾らかは命の痛みでも、それから食み出た確とは知れない辺りで、この命と係わらないものが、痛みに責め立てられて居るからなのでは。などと思わせる屍が、足元に仰向けに口を開けて寝かされているのを見下ろすのだから、これは夢に違いなく、このままこの夢に浸って居ては、孰れこの屍が私のものになるのも知れているにしろ、何かがそれを押し止めても居るようなら、それはきっと、今限り限りの腹の痛みを、どうにかしてこの屍に引き取らせたいからで、それにはこの屍がすっきり私のものなら遣り易いとは言え、屍となってしまっては何にもならない訳で、その間に挟まって行き惑って居るらしい。なら幼い頃の私を呼び寄せたい。その頃も腹の痛みは酷かったにしろ、その長く続く身を強張らせるばかりな苦しみが、良い答えを導いて居たように思われてならない。それともそれは、幼さにだけ与えられる賢さのせいで、今それを思い起こせたところで使えそうにもない。しかし幼い私は、大人になって自らの屍を見

下ろす私を思い描いては、その賢さを易易と使い回していたのではなかったか。そう思い至るのは初めてにしろ、今見下ろして居る屍が、腹の痛みを受け入れて、痺れて身を捩るのを見て取りたいと望むのは、幼いままの目かも知れない。いや、そう分かって今、あの賢い目を、再び取り戻せないまでに失ったに違いない。足元に有った屍とはもう遥かに隔てられ、腹は何故痛むのだろうなどと、どうしてそんな事を考えられたのか、考えようとも出来ないで、腹の痛みはもうそっくり命の痛みと、そのままを独り腹に捩込ませるばかり。そうして、この夢が、ずっとその破れ目を晒していたのが見えて来て、その奥に、痛みの元が丸い姿で軽そうに面白そうに、胸だの腹だの知った事かとクルクルと回っている。(二〇一六年七月三日)

幼子の耳の見た夢

遅い夜の帰り道。男は疲れて殆ど眠りながら歩く。川を逸れると水音の遠ざかるのと入れ替わりに、腰の鍵に付けた鈴の音が耳に入る。しかし鈴を付けた鍵は、紐が切れて昨日川へ落とし、腰には鈴のない合い鍵の筈。遠くで女の叫ぶ声がして、それが夜の静けさを越えて届いて耳の底へ落ちれば、鈴の音と聞

き取れてしまうらしい。足を止めてみる。すると揺らすのを止めた鈴が黙るように、女の叫びも届かない。また歩き出すと、叫びはゆっくりと闇に沈んだ家家から擡げられるように滲み出る。ただそれは耳の底までは落ちて来ない。耳の底では鈴が振られ、女の叫びには似ても聞き分けられる鈴の音が、歩みに合わせて振り出される。道は海辺へ出ようとしていた。微かに波音が近付くと、耳の中の鈴は影のように消え掛かる。で却って、女の叫びが鋭く耳に届くのは何。波音に背を向けると、耳の底にはっきりと甦る鈴の音が、夜の拡がりへ振り撒かれて行くのが見えて、それは、闇の底のあちらこちらで叫ばれる声になった。そうか、女の叫びが耳の底で鈴の音と聞こえたのではなく、耳の底の鈴の音が、女の叫ぶ声に聞こえていたのだ。と分かって何時もの道を海へ出れば、鈴の音も女の叫びも後ろへ消えた。高い窓から幼子は暗い外を眺め、女の叫びを一声聞くと、次の声を待って耳を澄まして眠れなくなる。男は引き返し、高い窓の家を探すが見付からない。それは女の叫びではなく、耳の底の鈴の鳴る音なんだよと伝えたい。闇の中に女の叫びは幾つも聞けても、もうその一つさえ幼子の耳に届かないのは何故、ああそうか、俺は眠りながら歩いて来たからなと、やっと目が冴えて東の空は白み、塒へ戻る時もない。川沿いの道を、川を見下ろし鈴を付けた鍵を探して歩く。水音が耳へ傾れ込むと、耳は振れる鈴で満ちて様様な音を鳴らし掛けても直ぐに已んだ。（二〇一六年七月四日）

あなたの指の見た夢

　賑やかな石畳の街並みを歩く、足で。足とは何故だろう。周りが皆そうして居るから。でもなさそうなのは、誰も足で歩きたそうには歩いていない。彼らは手の指を使おうともしない。なので常に体は傾き、足の向きを二本揃えても、横へ逸れてしまう。そう分かれば、滑らかな足の運びの為に、指と指を絡ませ色色な形を作って組み替えて行く。それで足は、思い通りに操れる。でもなさそうなのは、足ではないからで、腰から下は、足の長さと同じ高さの丸く肌色の球で、指使いを誤らなければ、それがクルクル回って前にも後ろにも進める。とは言え、それは何時の事だろう。やはり腰の下は足で、あの丸い球はどうなったろう。怪我でもしたか、その治るまでと、替わりに取り付けた足か。そんな足でも、広場を抜け、急な下り坂なら楽しく降りられる。カッカッと踵の石を打つ尖った音を突き上がらせて。で平らになると却って、まるで歩けなくなった。それでやっと、あなたの指がなければならないと、あなたの指なしでは他の事も一つも遣って行けないと分かって、腰から下が丸かった時も、あなたの指をそっと掴むか強く握るか絡ませるかして、それで思うように行きたい所

へ行けたんだよ。そう書き送ると返って来た手紙には「忙しくて行けない」と書かれてあっても、それはあなたの手ではない。あなたの操る筆の指を思い浮かべ、それを頼りに自らの指だけで足を操ると、あなたの家へ向かう僅かな上り坂なら進める。どうせ直に動けなくなる。次にどう書き送ろう。（二〇一六年七月五日）

若い男の見た夢

激しく突き付けられる刃を細い手で掴もうとするしかなくて、女の指はパラパラと落ちる。指をなくし掌に突き通して、やっと刃を受け止めた。倒れて暫くして刃の毒で女は死んだ。その体は切り刻まれ磨り潰され煮詰められて、濃い毒になった。父と母は幼子を殺したい。どちらが手を下すか言い争っても埒が明かないので、それぞれの器にその毒を注いで与えた。子はどちらも飲んだが、死ななかった。父と母は互いを疑って、互いの器の毒を試しに飲んで、血を吐いて死んだ。刃が残った。隠さない訳には行かない。喉の柔らかい幼子は、それを呑んで隠した。幼子は一人なのに、大きくなると息子と娘の双子に成っている。どちらも喉が硬くて、もう刃を呑んで隠せなくなって、柔らかい手で

刃を奪い合った。掴んで緊く握る程、指がパラパラと落ち、掌だけで拝み取ろうと血塗られて組み合いながら、刃の毒で真っ青になって力尽きた。残った刃は沼に捨てられた。刃沼と呼ばれ、私はその脇に住んで、行き帰り、暫く水面を見詰める。新しい白い骨が浮かんでは沈む。その中に一際白く輝く刃が浮かべば、直ぐにも取りに行きたい。そうして佇む私の顔がニタニタと覗き込まれるのは、心を彼らに見透かされて居るか。（二〇一六年七月六日）

若い女の見た富士山の夢

街に女を買いに行くように、熱い心を秘めて、富士を見に行く。濃い藪を鎌を振り翳して進む。肘も膝も傷だらけ。何時の間にか下りになっている。構うものか。降り切ると水溜まりで、跪くと藪は終わり、腕を差し拡げて富士を仰ぎ見る。ここは日本にただ一つの富士の裾で、ここからでなければ、その頂までの全てを望めない。頂の穴から覗ける淫らに歪んだ赤い肉を弄り回すように思い浮かべて、それから疲れて俯せに水に倒れると、裸の背中を、藪の棘と茎と根がチクチクと刺さって来る。尻が重くなる。藪も尻の肉がお好みなんだな。それはそうだ。根を下ろすのには、たっぷり脂が乗って、背中は硬い。尻が終

わると次は腋の下から責めて来て、乳を弄りに来る。悦びに痺れて堪らず背を反らせ、頭を水から出して見上げる富士の頂は乳首の形。誰に吸わせたいんだろう。その乳吸いたさに空から降って来る奴なら誰でも構わないんだろうな。藪の根に骨の髄まで犯された体は、身を捩らせ捩らせ泥に溶けて行く。富士の形を眺めて愛でたり、上っ面を攀じ登って喜んでる奴らの、何という浅はかさ愚かしさ。富士に出会ってその全てを知りたいなら、ここで泥になるしかない。もし私が立ち去れば、富士はその端を傷めるばかりに土はそこから腐って、やがて積み上がった土を丸ごと腐らせて、一日の大雨で海に流れて、山はすっかり姿を消すだろう。

富士の裾野には、そうして数知れず女が埋まって居る。（二〇一六年七月七日）

女は山の夢を見ないと思う富士山の見た夢

姉十三歳は妹九歳を人形だと思って居て、もう飽きたので山へ捨てに行きたい。妹は姉を人形だとは思わないが、何としても山へ捨てたい。二人は濃い藪の間を降りる。道は開けていて鎌なんて要らない。降り切ると水溜まりで、そこを跨ぐと、裾から頂まで富士の山が見晴らせる。妹がそっちを眺めている内

に、姉は忍び足で、じわじわと閉じて行く藪を戻る。姉は藪に足を取られ腕を取られ、引き千切られて行く。それをにっこり確かめた妹は、裾野を歩き回る。同じ年頃の女の子と出会って身の上話しを聞けば、そっくりで、二人はもう離れられず、女の蜜の味を味わい尽くして末永く暮らしました。ん？誰の夢これ。女は山の夢は見ない。山も女の夢は見ない。雪を載せた頂から眺め下ろすと、遥か遠くの、低く見窄らしい何時見てもどんより暗い田舎富士の腹に転がされた人形、あぁあれだ、捨てられて独りぼっちで、おいそれと土にも還れず、汚れた風に晒されて、そんな夢を見ている。それは何処かへ転げ落ちた。まさか、川に流され海をぐるっと回って、三保の松原に打ち上げられて、こっちをじっと恨めしそうに見上げたりしてないだろうな。でも、そんな誰からも忘れられた恨みが数知れず向けられて、それで俺はこの富士の山の形を固めて居られる。もう何万年と重ねられたそれらの恨みから放たれでもしたら、積み上がった土はドロドロと拗って駿河湾に流れ込み、深い海の底で、日の光りの嫌いな魚達と好きに遊んで居られよう。でも直にここはまた火を噴いて、その口から愉しげに止め処なく赤い蜜を溢れ出させて、そうして曇り顔な人形の瞳を輝かせて遣れそうだ。（二〇一六年七月八日）

見た事は見たに違いないが見えたかどうか分からない見た人知らずの夢

声、それとも匂い。他に何とも浮かばない。それが厚く拡がるような、薄ぼんやり固まっているような、でないような。声か匂いかなら、そのように見て取りたいにしろ、それらしいようには、こちらの何も少しも働かない。耳も鼻も失われているか使い物にならない。目なら目でないようには使えて居るのかも知れない。目と耳と鼻の失われた痕が、一つの窪みにでもなって、その前に有る何かに向き合おうとはしていても、それだけの事。光りのないならと闇が有るでもない。声にしろ匂いにしろ闇に蠢くようでないなら、見えないだけの光りかも知れない。ただそれも、声か匂いかと当たりを付けて、当たりが外れなら違っているに違いない。で、このままずっと、こうなのか。いや何時からこんなだったろう。と何処を振り返るもなく時は幾ら遡っても遡られて、そうならそれで何に困りもせず、耳も鼻も目も直に何処かへ紛れるしかないちっぽけなら肉の切れ端、などと考える内に、声か匂いかそれらしい何かはすっかりなくなって、時とも切り離されて、それでも何が途切れるもなく、続く何かは続く。で終わりなら、終わりには終わりはないかのように、何を終わらせようもない。(二〇一六年七月十日)

見た人知らずの鳥の夢

　巧く仕向ければ鳥は霞だけを食って生きて行ける。そればかりか絶滅寸前の鳥さえも、その遣り方で幾らでも殖やせた。で何処も彼処も鳥だらけで、遂に全人類は飢えから解き放たれた。食っても食っても鳥が居なくなる事はない。しかしそれは嘘だった。只で食い放題の鳥は物凄い勢いで姿を消して行く。しかしまだ発見されていない鳥にはまるで見えない鳥が、森の奥に居る。その鳥だけは、消えて行った鳥達の餌場を独り占めして幾らでも増える。森を出れば、食えると知らなかった物も次次に食えるようになって行く。そいつらは栗鼠か鼬のような小さな獣の姿でもして居るか、いやもしそうなら、そんなものばかりで埋め尽くされた眺めが嫌でも目に入る。ならきっと、カメレオンなどよりずっと巧く姿を変えて、初めの内は、嘘を信じ込ませるために色色な鳥の姿を人に見せて、その内に、森も山も野原も川も海もすっかりそいつらばかりで犇めき合って、食う物もなくなれば、せっせと共食いを楽しんで居るかも知れない。そうして彼らは、この星の見掛けを少しも変えずに、この星を覆い尽くして行く。我我が何処かでそれを分かったところで、今更何が出来よう。もう隣で楽しげにお喋りしている人達もその腰掛けている椅子も床もその床を踏む靴

も外を眺める窓の硝子も青空に浮かぶ雲さえも、姿はそう見えるだけの鳥かも知れない。たった一つの嘘が人の間に広まっただけで、他の凡ゆる生き物までも滅ぶ。（二〇一六年七月十一日）

流れ者の見た十四の夢

数えて見ると十四有って、数えた覚えがない。十四はそれぞれの遣り方で違う音か声を出し、それなりに賑賑しく並んで居る。何処か寂しげなのは、それらと向き合うこちらが独りだからで、辺りはガランとして居る。十四とは何処から来た数か。ここは、ぐるりと崖の切り立つ小さな島の一つ切りの家で、舟で渡って来た。その舟で故里の浜を出て、ここへ辿り着くまで十四年掛かったのなら、音か声は、その間ずっと已まなかっただろうか。端っこに白く積み上がるのは、きっと十三人の骨で、彼らより遅れて来たにしろ彼らが早過ぎたのであって、十四と向き合うには、十四年掛けるのが、ぴたり正しいようでもある。そこへ、遅れて来た姉が静かに躄って横へ来る。それで十四が、姉と同じ年恰好の十四人の女に成るなら、その内の誰の姉だろう。しかし女に成るのは行き成りの姉を拒むためか何かの如何様で、十四は、色や形の違う驚き慌てる

鳥の姿になって、声もなく羽音一つ立てず、真っ直ぐ奥へ消えるように飛び去った。どれも、この世に命を晒して有らねばならない事に恐れ戦く目をして。しかし鳥は、好みの餌を啄むにも、その戦く目を已めようとしないな、などと鳥の顔付きなどのんびり思い浮かべて居ると、飛び去ったのは十三羽で、十四羽目が私だった。それから澄まし顔で背筋を伸ばして座っている姉と向き合って、一声啼いて、態とぎこちなく翼を振り立て、パタパタと間抜けな音を立てて飛び立つと、それは姉で、弟の私は、その十四羽目の、何処からか切り抜いて貼り付けたかの止まったままの形で飛び去る姿を、独りで眺めている。翼は奥を向いているのに、己が命に恐れ戦くその目だけは、消えるまでずっと、こちらを向けて変わらなかった。それで却って私は、それを長閑な在り来たりな眺めと思えて、長い舟旅の腰の疲れがゆっくりと眠りを求めるようで、とは言え、波に洗われる岩場に繋いだ舟が心に懸かって眠れずに、鳥の十四の啼き方と羽音を、耳の中で繰り返しお浚いして居ると、その鳥の十四にも、私のままに成れそうではないか。ただ、体が一つ切りではどうにもならず、故里の浜まで戻り着けた時に、誰に何を尋ねられても、何も見なかったと、頭に浮かぶままをその通りにすらすらと答えられるよう、十四を十四のまま全く何もない眺めに置き替えようと、時を捨てるように、十四が全てを消す数になるのを待つしかなさそうなら、もう時を捨てるばかりかも知れない。（二〇一六年七月十

二日）

誰が見たのか銭金の貸し借りの夢

　声を潜める長話しの知り合いの男を送ると直ぐ、溜まって居た手紙を次次と書き上げて、それを出しに行く何時もの道は酷く引き延ばされ、やっと辿り着いた家は留守だと言われ、その庭の低い木の椅子で疲れた足を休めていると、目の前の同じ椅子に、生まれたばかりのような明るいすべすべした肌の若い女が腰掛け、輝く玉のように剥き出された膝小僧を、こちらの膝へ擦り付けて来る。居留守を使いながら直ぐに姿を現すとは何。手紙を渡そうにもそれは金の手紙で、その姿が余りに色恋に漬かり切って銭金の事など頭が働かないようで、渡しそびれて、帰りの浜沿いの道へ出てしまう。浜の少し遠い辺りに、同じ女が履き物を手に、寄せて返す波に膝まで捲った足を洗うように独りで遊んで居る。肌は、海の暗い色を映すせいか暗く沈んで荒れてさえ居そうで、あれなら手紙を渡せるぞ、でもそっと近付かないと驚かせて海を泳いで行ってしまうかなと、忍び足で横を向いたり、後ろ向きにそちらへ歩いて居る積もりが、浜沿いの道を逸れて狭い道に迷い込んで、いや建て込んだ家家の僅かな隙をウロウ

ロしているだけかも知れず、やっと冷たい壁と壁を抜けて行き止まりの庭に、手紙を渡したい次の女は待っていた。女は黙って背を向け、庭に押し被さるような大きな家の暗い土間を抜けると山道で、その女しか知らない朽ち木の裏の松茸の、手紙に書いた金に見合うだけを私に持たせた。山を下りながら、しかしこれは松茸そっくりの毒茸に違いないと分かっても、誰も居ない家を抜けてまた庭で、池に浮かぶ磨り硝子の箱は火が点り、小さいながら震えて渦を巻く影が踊る。日はほぼ暮れて月はなく、火は、狭い檻に入れられて身動きも取れず熱を放って怒り狂う白い虎の姿を思わせ、堪らず池に膝まで入って箱を手刀で叩き割ると、燃え盛る火は池を覆い、戻って来た女が、毒茸の詰まった大きな箱をひっくり返して火に投げ込んだ。青緑の煙が北の高い赤い星を目指し、夜ごと毒を回らせたいかに昇って行く。それに混じって獣が爪を剥くかの炎が、一うねり二うねりして次次に煙に追い縋るも直ぐに断たれてしまう、それを見る度、満たされない思いが溜まって行く。池の底は毒で溶けたか熱で溶けたか底抜けで、私の燃え切れない思いが、この星の底へでも流れて落ちるなら、残りの手紙は焼けて惜しくないにしろ、もうどれ程毒が回ったか知れない。真っ白な虎は生まれたばかりのような姿で毒茸を入れていた箱に大人しく収まって、女の汚れた手で首根っこを撫でられている。波際のあの女の手に握られて居たのは、履き物でなく囓り掛けのでかい松茸で、なら手紙を書き直したい。波を

蹴る女の足のきっと冷え切って、夜になって真っ白なのは何。（二〇一六年七月十三日）

庭いじりの好きな人の見た夢

　向きを変えない強い風がずっと吹き下ろす、その里山にしかない苗木を求めに行ったのに無くて、手ぶらで戻るのもと帰りがてら、常常訪ねようと思って行きそびれたままの人の所へ向かう。しかし名が出て来ないので、何処をどう行けばそこへ辿り着けるかはっきりせず、それらしい辺りをウロウロして居て、どちらへ足を向けても行き会ってしまう同じ人に声を掛け、訪ねたい人の話しをして何か分かる事はないか尋ねると、こちらの話しは話しを先回りする程に殆ど分かっては居たが、こちらの分かって居るより他の話しは出て来ずに、その人とは別れた。二、三日掛けて家に戻ると手紙と荷物が届いて居て、その人からと手紙からは分かっても、教えた覚えのない宛先しか書かれていない。荷は鮮やかな赤い着物で、それで外を歩くと、何か囃されながら子供達に囲まれ、大人なら艶っぽ過ぎる腰を激しく振ったり拗らせたりして踊り続ける彼らに、ずっと付き纏われた。赤い着物と疲れ知らずの子供の腰振り踊り、二つを組み

合わせて誰かへ何かを伝えようとしているに違いない。そうならと煩いのを堪え、その誰かが来るのを待ちながら、日が暮れて夜が明けて日が暮れて夜が明けて、歩き続け、見回して子供の姿がなくなり、あのまた同じ人に行き会って、あなたの思い出せなかった名を思い出しましたよ何何でしょう、と言われても覚えがない。脇を岸の広い割りに水の少ない川が音だけ明るく響いて流れていて、ひょっとして川の名ですか、と尋ねると、この川は山で雨が降ってさえ流れが細いままで、なので名もないのです、と言われ、ああそれなら風の下ろす向きを全く変えないあの山も名は有りませんね、と返すと、子供達の囃していたのは、ずっとこの山の名だったのではと心付いて、欲しい苗木の見付からなかったのは探す里山を間違えていたからなんだと、急いで赤い着物を脱いでその人に返し、さてそれで何をしに何処へ行くか、初めから考え直さなければ全く分からないにしろ、どうやらその初めとは、名を知れた人に会う事らしかった。母かその母かの名が、出て来ない。（二〇一六年七月十四日）

媼？の見た夢

窓を開けると山の乾いた巌の匂いは届くが風は来ない。首を出すと真横に凄

い風が吹いて息も出来ない。風と同じ向きの、波を泡立てている川が見下ろせる。何ともおかしな形な、軽石かも知れない灰色の塊が、流れに逆らって水面を跳ねながら、幾つも川を遡って跡絶えない。しかし少し遡れば、そこは風が強過ぎて、堪らず川は土の下に潜って、すっかりその先の草原に隠れてしまって居る。その草原にしか育たない草を売って何十年と日銭を稼いで来た私は、草に埋もれ掛けた家の中で寝た切りで、息子と娘がどちらが親を看るかで争っている。兄は妹を家から力尽くで追い出しはしたものの物忘れが酷くなって、今では妹に家に入り込まれて好いようにされて居る。床を外すと下に川が流れて居て、妹はそこから、軽石かも知れない灰色の塊を掬い取っては素速く手刀で薄く輪切りにし、その冷たいままを私の口に押し込む。二人がまだ幼かった日、兄は窓を開けて首を外に出し、思い切り横風を受けながら川の名を大声で繰り返し呼ばわった。後ろで妹が窓の抓みを捻ると、重い窓枠が硝子の震える凄い音で落ち、兄の首が取れて、川まで転がって行く。川底の石が、我先にとばらばらと浮かび出て、その首を川の底へ持ち去った。兄が振り返って妹を問い詰めると、またもう首は生えていて、言い逃れ出来ない妹は、兄の頭と体の中へ逃げ込んだ。ならば独りっ子だった。息子か娘かは忘れた。それがまた大人に戻って居て寝不足で、窓の側は狭いので川辺へ降りて横たわって身を丸める。真昼で、川が海へ出る辺りの浜を買い占めた奴らの、獲っても獲っても獲り切

れない夥しい数の魚を磨り潰して已まない波打つような音が、耳の奥で重く回って、その内に頭が丸ごと渦を巻くようで眠れない。もうどれ程こうして居るか、親は飲まず食わずで木乃伊にでもなって居そうだ、などと思うにしろ、しかし私はこっそり貯めた金で人を雇って来て、毎日、見掛けはおかしな形の水に跳ねる灰色の石だが、海から川を上って来る脂身の乗ったその魚を好きなだけ焼かせて、それを食って足腰も立ち野山を歩き回って、敬うげにお婆さんなんて呼び掛けて来る者等はもう誰も訪ねて来ない。雇い人は戯れに私を若奥様と呼ぶ。(二〇一六年七月十五日)

海に浮かびたい舟の見た夢

箱作りは、すっかり息の整って、巧く進んで居る。寧ろ態と息を乱して、仕上げに懸かるべき所に刃を当てたいのに、手は同じ所ばかりを行ったり来たりで焦っても、息は、風のない浜を寄せ返す縮んだ波のように整うままで、それなら風でない何かで海を揺さぶってみようよ、そう、出来上がったようにも見える箱に言われて立って背筋を伸ばし、遠くを見晴らしても思いの外海は狭く、眺めはその狭さに和んで、待っても望みは薄そう。これまで学んで来たのは何

だろう。と思い返せば、学びたかったのは、箱作りでなく、誰彼となく向かって来る奴を疲れ知らずに打ち倒す技だった。暗い平べったいゆったり凹んだ影が、低い空を海の向こうへ飛び去って行く。あれこそ技だ、追わなくては。せめて見失わない為に、肩車をしてくれる人を探し歩いた。疾っくに海は見えないにしろ、では何が見えるか。見せてくれそうなのは息の乱れしかなさそうでも、それは少しも聞き取れない。耳の中で息の音を鳴らす。ああ、そのための箱作りか。耳を、息の根が生える形に直して行く。そうして波の寄せ返すような繰り返しが微かに響けば、もうそれは息の音だ。とは、どうやら先走りで、その響きは後ろへ流れ、頭を冷やして吹く風へ漂って崩れるようで、ぎこちない音がばらけて、何の繰り返しも現れない。険しい坂をこちらへ上り切った人が息を切らして、「全て巧く行ってますよ、肩車してあげましょう、見えますから。」と嬉しそうなのは怪しくて、見晴らしても見晴らしても拡がる海は遠くへ遠くへ続き、迫り上がるのを已めない。それでもこの坂の上までは届きそうにないなら、どんな眺めからも遠ざけられるばかりな高みに立つ足元を、誰のか知れない息遣いが、捩れた渦に乱れ重なる波のように、幾つも愚かしげに混じって、それで踏ん張れる。それらの息が整うなら、きっと海の裏側へでも果てもなく滑り落ちそうで心許ない。（二〇一六年七月十六日）

女を裸にして稼いで来た者の見た夢

「男の腹を蹴るのは楽しいな。」「？蹴るんなら女の腹でしょ。」と言った女の腹が、蹴られ蹴り倒され踏み倒され踏み付けられる。「楽しそうだね、仲間に入れてよ。」と男が寄って来て、男と女の二人で、その女の腹が蹴り続けられ、「やっぱり蹴るなら女の腹ね。」「そうかな？男の腹は蹴って飽きないよ。蹴って蹴り潰しても何も出て来ないのが面白くてね。」「女の腹は汚いものが出て来るね。」「孕んでればね。」「何時も孕んでるよ。」「アハハ。」大人しく机に向かっているからかも知れないが、女はまだ子供に見える。直ぐ横で、若い男が体操の教科書の様様な形の人の絵に極細ペンでぎっしり落書きして、女の体の仕組みを教え込んで居る。それが親にばれて二人は逃げる。乗り物にずっと揺られ乗り換えもせず、海峡の長い橋を幾つも渡り金が尽きると、男は家を見付ける。暗くて目立たなくて直ぐにそれと分かる。その家には、女の腹を蹴りたいのに蹴れる腹が無くて、己の脚を切ったり繋いだりして己で己の腹を蹴れないか思い悩む女が喉を嗄らして居て、男はその女に、連れの女の腹を蹴らせる。そうして一稼ぎしてはまた逃げて、またそんな家だと思って入ると、連れの女の親の家で、親戚までずらり揃って娘を返せと迫られた男は、女を何処へ

捨てたか思い出せないせいで巧く逃げられ、行けども行けども上りも下りもしない川沿いの誰も通らない道が続けば金も掛からない。腰に結わえた袋に貯めた銭は、水の音と響き合ってジャラジャラと重くなる。やっと女が女の腹を蹴っているのに出会った。踏まれて居る女はもう息がない。「何も出て来ない女の腹は詰まらない。出て来ないなら男の腹だ。」と言われた男は、女に腹を蹴り上げられ蹴り倒され踏み付けられた。男のずっと歩いて来た川沿いの道は、何処も彼処も裸の女が並んで、男はその女共に、次次に腹を蹴り付けられ踏み潰された。蹴り疲れたか痛む脚を真っ赤に腫らした女から川へ落ちて、股から汚いものを止め処なくダラダラ流しながら流された。成る程それで、上りも下りもしないものを流れは絶えないのだな、男の腹を蹴りたい女の並ぶのも絶えないし。男は幾ら腹を踏み潰されても、もう擽ったくもない。いや初めから痛みなどなく、女を喜ばせ、いきり立たせようと痛がって見せただけで、そんな振りも飽きて来た。首だけ捻り起こして川下に目を遣ると、下れば下る程、明るい光りが川にだけ差し、輝き窮まる辺りで川は干上がり、犇き合ってそこへ流れ着いた女共は堪らず転げ出て、疲れ知らずの知らない男に蹴られたい腹を持て余すように拗らせ脹らませ、肌を益益赤く染めて川縁をのたうち回って居る。何故女の腹を蹴り合わないのかな、まあ銭だろうけど。そんな女の体は後から後から数知れず、そこで行き止まって山になり、それなら溢れ返るように山は動い

て、その先の海へ埋め立てられもしようが、波打ち煌めく泥の上を、泥になれない腹と脚が、向きを変え変え怒りに捩れては撥ねて、棘棘と積み上がって行く。（二〇一六年七月十七日）

愛の女神の見た夢

おおぉ、私好みの美しい顔立ち、すらりと引き締まった体！その若い男は跡取り息子で、家柄も良く嫁は直ぐに見付かり、さて初めての夜、女と交わるその一物は、中で女の背丈程の刀になって、女の体は骨も肉もバラバラに切り刻まれた。それは夜が明ける前に庭に埋めた。居なくなった新妻など誰も覚えていない。暫くしてまた他の家の娘が嫁に来て、また一夜の内に長い刀で、腹の中から切り刻まれる。それが繰り返されても誰も怪しまず、会う人が皆、嫁を勧めて来る。若い男は、自ら嫁を探す旅に出た。宿を求め、坂道の脇の家に入ると、そこは初めの妻の家で、帰って来ない娘の弔いを出している。棺を覗きたくても、しっかり塞がれている。坂をまた少し登って次の家は、次の妻だった家で、やはり塞がれた棺を囲んで弔いを出している。坂を登っても登っても、家の中は、若い男の殺した元妻の家で、宿は見付からない。坂道の終わり

の大きな家だけは、愛娘の婿が待たれていて、若い男は喜んで迎えられた。しかし同じ繰り返しでは、もう行き場がない。夜、男はそこを抜け出し、その家の後ろの黒く聳える山へ向かった。崖が切り立つばかりの中に、切り通しを見付けて登ると、瘤のように張り出した大きな石に先を塞がれた。石の割れ目に、硬く突き上がる刀を差し込んで、石と交わった。一晩中激しく突き続けて、男は始めてその悦びを知った。夜が明けて陽も輝きを増し、やっと引き抜くと、男の刀は更に太く逞しくなっていた。それを収めれば腹が減って、坂の上の家へ戻るしかない。と、一物を無くして血塗れの男の屍が、家の雇い人達によって何処かへ運び去られて行く。若い男は、肉と骨を切り刻む手際の良さが見込まれ、家の料理番に雇われた。その夜また新しい婿が迎えられ、交わると、娘の中で男の一物はズタズタに切り裂かれる。若い男は、その哀れな婿の断末魔の叫びを、毎夜聞いた。或る日、新しい婿が来なかった。若い男は娘の父親に肩を叩かれ、「やっぱり、あんたしか居らんよ。」と言われて、床を取った。硬く逞しい刀を突き刺すと、娘の穴の中にびっしり犇めいて振り回される、数知れない鋭い刃が迎え撃った。男と女は抜くのも忘れ、日も夜もなかった。二親は老いて死に、雇い人も皆去った。ガランとした大きな家で、二人は何時まで戦い続けるのだろう。私は永遠の愛など信じないのだが。（二〇一六年七月十八日）

天麩羅の見た少しばかり長く生き過ぎた男の夢

　仕事の長旅から戻ると、手足も顔も肌が透けたように真っ赤な男が、奥で寝ている。あれが俺なら、帰って来たのは誰か、探さないと。行き付けの天麩羅屋で、探すったって探しようがない、誰でもないいんじゃ生きられない、と思い悩んで居ると、隣の客に「あんたもう命がないよ。」と言われ、何故分かるのか尋ねると、「医者だからね、助けてあげよう、私の鞄持ちになりなよ。」で、鞄を持たされて付いて行くと、船が医院で、川を上ったり下ったりして川岸の患者を拾う。その誰かは、鞄と磨り減った革靴を甲板に並べ、川へ身を投げた。で、誰だったのかな、でも誰でも無かったんで死ねたって訳だね。家で体を休めた男は、肌の赤みも収まったので、腹を空かせたまま出掛ける。男は医者で、大きな病院の今夜は当直だった。しかし閉まって居て、見上げても明かりの灯る窓一つなく真っ暗で、潰れたんなら仕方ないと家へ戻ると、知らない女が寝ていて、揺り起こすと大声を出され、のろのろと布団の奥から這い出た裸の男が、「この家は、この前ね、貯金下ろして二千万で買ったんだ。」話しからすると、彼らに家を売ったのは中肉中背中年十人並みの銭勘定だけは速い女で、そ

れは、妻に違いなかった。気の毒がられて、甘酒屋のその夫婦に、住み込みで雇って貰った。磨り減った革靴で御用聞きをしながら妻を探した。一日歩いて疲れ果て、売り物の甘酒に手を付けた。もう戻れない。天麩羅屋に入ると、隣の客に「あんたもう命がないよ。」と言われ、「あんたは医者か。」と返すと、「医者はあんただろう。」「もう医者じゃない。」医者の用が済めば次は坊主かな、ハハ。」すると天麩羅屋が「坊主は儂やぞ。」と言う。確かに袈裟を着て居て、天麩羅はどれも有り難い仏さんの姿を輝かせて居る。その直ぐ隣で手拭いを被って目を伏せて皿を洗って居るのは、妻だった。男「お前こら、金返せ。」妻「使っちゃった。」天麩羅寺の住職「お客さんの連れ合いかね、こんな役立たず、持って帰ってくれんかい。」男「要らんわ。犬に食わして遣れ。犬も食わんなら、バラバラにして粉粉にして蟻んこに食わして遣れ。」天麩羅屋を出ると川で、金も無いし身を投げようかと思って居ると、さっきの隣の客が追い掛けて来て、「女から金を取り返して遣ったよ、一二百万。」お礼に二十万渡して百八十万、そこそこの金だが孰れ底を付く。甘酒屋に詫びを入れ、仕入れた甘酒を川の水で薄めて売り歩く事にした。贋物の甘酒より川の水が甘いので得意先は見る見る増えて、今は書き入れ時で暑い程休めない。疲れて、焼けるような石畳の道に倒れ込むと、高い真夏の日差しが頭の後ろに刺さって動けない。掌も肘も脹ら脛も踝も真っ赤だった。顔は、頬を熱い石に押し付けて、もっと赤いだ

ろう。なんだ、なら俺で俺は死ねるじゃないか、初めっからこうしてりゃ良かった。(二〇一六年七月十九日)

湧き水の見た夢

「どうしたものか。」「あいつに遣らせれば良いでしょう。金粉を塗った女を一人与えて。それで遣らせましょう。」で、夢から醒めた男は、水を飲みに降りて、恐る恐る溜め置いた水を覗く。ん女は？　水面に浮かぶ灰色の小さな蛇が、闇へ這い出て隠れた。戻ると布団に、体中隙なく金粉を塗り付けた裸の女が横向きに寝て居て、腕や腿は冷え切って居ても息は有る。このままでは助かるまいと布団に入って、後ろから包み抱えるように抱くと、男の体を直ぐにも凍らせそうな胸を刺す痛みに、女を突き放した。午から骨董屋を呼んで見せ、「幾らになるかねぇ、金粉らしいが絵の具かも知れないし。」「いえ金に違いありません。上玉ですし、買い手は直ぐに付きましょう。」と、そそくさと持って帰った。溜め置いた水の底の小さな穴を、僅かな水の動きに合わせて、その影のように蛇が出入りするのを、夜暫く見て居て、それから寝た。「どうしたものか。」「あいつに金粉女を与えたからには遣るでしょう。あいつはもう遣る

しかありませんよ。」で、夢から醒めた土砂降りの夜明け前、骨董屋まで急いで戸を叩いても出て来ないので、裏へ回り土塀を登って見下ろす庭を、濡れた金の輝きを誇るかに、四つん這いの女が雨を弾いて走り回って居る。庭へ降りて門の戸を開けて、女を外へ逃がした。夜が明けても雨がまた酷く、已まなかった。帰ると先に女は寝床に横になって居て、その肩を揺する手に伝わる冷たさだけで、こっちが凍えそうだ。布団に包んで引き摺って、やっと井戸に落とした。すっ飛んで来るかと待った骨董屋は来ない。「どうしたものか。」「あいつなら遣るでしょう。」と、同じ夢が幾夜も続いて煩いので、醒める前に夢に割り込んで、「あのな、あの井戸はな、何処となく涸れそうには見えてもだな、山の向こうの海の向こうの細長い島の隠れた奥の湧き水まで繋がってるぜ。これより確かな事なんてないし、今だけじゃない、ずっと繋がってた。なのでもう遣る事もないって。だろ？」で、夢から醒めると、溜め置いた水がガタガタと喧しい。夜の狭い闇から奥を覗くと、水は全く金色で、であっても、ただ透き通っていた時よりずっと透き通って、水の底には、濃い影のようなくっきりとした姿の小さな蛇がびっしりと、互いの身を擦り合わせて蠢くのが、キラキラと透かし見えた。硝子の粒のように乾いた目の蛇共は男を睨み返し、「お前のせいだ。」と責める声を噴き上げ、傾き捩れる水面の形は怒り狂うようで、黒黒とその数を増やす蛇の塊が水を溢れれば、瞬く間に男は噛み殺されそうで、

「俺じゃない。夢の中の二人のせいだ、ま俺の夢ではあるがな。」「俺の夢だ？お前が夢を見るもんか。これからずっと、死ぬまでずっと、何処で寝ようと、お前は死んだ女と寝るんだ、ブクブクブクブク。」ああ、そんな事だろうよ、と布団に戻ると、蛇は嘘を吐かない、金を落として真っ白な肌の脂の乗った死んだ女が寝て居て、息はないが身は何処となく生温い。こりゃ夏はひんやり冬暖かく、使い勝手は良さそうだなと、蛇の言う「死ぬまでずっと」に唆され、夜が明けるまで思う様交わって、抱き続けた女に命を吸われ、朝には男はすっかり硬く冷たかった。「繋がったよ。」「だって繋がってましたからね。」（二〇一六年七月二十日）

誰も何も載せなかった舟の見た夢

崖っ縁なら歌う。歌が風に溶け、歌い終わった身まで風に溶けない内に、飛び降りる。遥か真下は狭く速い流れで、あちこちで渦が泡を噴く。一人やっと乗れるかの小舟を操れるのは、歌えて居るからで、でなければもう水に呑まれたな、流れの捩曲がったり逆さに落ちたりに相応しい腹の底から湧いて出る歌が、激しい水音にぶち当たって行く。いきなり岸は右も左も遠過ぎて、霞んだ

空と水の間にやっと薄っぺらく見え隠れする広い流れで、恐ろしく速い。川の真ん中は、水が押し上げられている。また新しい歌が喉を噴き上がり、息も出来ない向かい風に逆らう。そうして舟は進めた。真ん中を逸れて砕け散る舟を幾つも見た。歌い損ねたのだ。四艘残った。高く盛られた速い水を並んで行く。隣の歌に聴き耳を立てると、どれも違う。右端が春の歌、隣が夏の歌、隣が秋の歌、左端が冬の歌、そう聞き取れたようなら瞬く間にそれは流れ過ぎ、またまるで違って聞こえる。しかし違って聞こえるって何。何も聞こえなくて、違って聞こえる事にしているだけでは。きっとそうしないと、どの舟もひっくり返って聞こえて砕け散ってしまう。それが歌も已み、その内に皆眠り込んで、流れに運ばれるまま夢を見た。夢から醒めて互いの夢を語らって、全く同じ夢と確かめた。その語られた通りのものが遥か下手に広広と見えてないかな、と声に出してはいけなかった。と、そこで流れは物凄い勢いで狭くなって、三艘は岩にぶち当たって砕け、残った一艘は、また更に速くなった、渦など巻かない真っ直ぐな流れを突っ切る。幾ら下ろうと、見捨てた砕けた筈の三つの喉と口が耳の奥に残って歌い続けるようでも、自らは歌えず、黙って三つの歌声を聞き分けて、それで流れに乗れている。歌うなら、全て終わるだろう、歌えるならそうしたい。唇を動かせば、空っぽな喉に強い風が真っ直ぐ突き刺さって、喉は微かに響くにしろ、それは何の歌も磨り潰す為のよう。眠り込んでまた夢を見た。

岸辺の大きく張り出した岩の上に、四つ口を揃えて同じ歌を歌って居る。いや同じに聞こえるから、そこをまた、岩に砕かれもせず通り過ぎられる。四つバラバラに聞き分ける耳なら、もうこんな事は已めて、誰かの操る大きな船から、岸辺の深い森に覆われた山山の、次次に流れ過ぎて行くのを、知らない誰かの浮かれた歌でも聞き流して、のんびり眺めて居られよう。「あの山は何ですか。」「どうしてあれと分かったんですか。あれだけは山に見えて山じゃない。川がそこだけ脹らんで、山のように水が盛り上がって、森ごと浮かべて居るのですよ。」「だってさっきから、あの山だけが止まって、少しも流れ過ぎないから。」振り返って誰も居ない。口を衝いて出る歌の初めの一節だけで水は失せ、川に押し上げられた森の山も乾いた空へ紛れたなら、そのまま何を忘れたかも忘れた崖っ縁。(二〇一六年七月二十一日)

遭難者達の耳の見た夢

　その辺りでは頭一つ抜けて高いのに誰も登ろうとしない、見上げただけで、頂からの眺めが心を酷く沈ませると分かる山で、山を下りて直ぐに命を絶った者さえ居たとも聞く。その山の頂に、背丈より深い鍋底型の穴を掘り、歪みも

直し磨きも掛け、独りその底でぐるり見回せば、目には、穴と穴の縁と空だけ。身を投げたくなるのが嫌なのか、鳥の姿も絶えて無い。そうして、ただ空の音を聞く。何にも遮られず真下を向く音を、そのままに耳へ落として込む。ただ空の音だけの耳、この耳だけの空の音。海や川や森や霧の音も空を跳ね返って降っては来る。それをこの耳だけの空の音。海や川や森や霧の音も空を跳ね返って降っては来る。それを聞き分け遮る技を耳に覚えさせるのも楽しくて、そうして空の音だけを聞ける耳で聞く空の音には窮まりがない。ただ星の夜は難しい。月の音なら遮られても、見えない星からも絶え間なく音は零れ落ち、空の音は掻き込消される。しかし、どうだろう。この星の空の音は、それら星星の音を溶け込ませて鳴っているのでは。そうして耳を澄ませれば、どの星の音とも違う、この星の空の音が微かにでも響いて来そうだ。それが、酷い事になった。新しい航路の、住宅街を避けるって事か、ジェット機が飛んで来る。腹に星そっくり耳の灯りをチカチカさせ、流れ星でも気取るか、見上げるこっちを嘲笑うかに、耳を切り裂く、取り除きようのない醜い音の筋を引いて行く。「必ず必ず墜ちろ！」と念入りに呪いを掛けるが、効き目はない。昼間も、真横からの陽に腹を銀色に醜く輝かせて、空の音を引き裂き、耳を切り裂く。若い男と女が何時しか穴に転げ込み、額と額をこれでもかと擦り合わせて離れない。生まれ付き目の見えない男と耳の聞こえない女で、男は、生まれ付き聞こえない女の耳が何を聞き取って居るか、どうしてもそれを聞き取りたく、女を犯すかに、彼の

耳を女の耳に突き刺そうと焦って居る。却って女は、耳を犯される程、男の耳を通して、生まれて初めての音を様様に聞き取れた。男ばかり何も得られない。しかしこのままな筈はない。男は、全てが引っ繰り返る事に賭ける。女を喜ばせている音なんて、俺がずっと聞いて来た在り来たりな音ばかり、そんな音は全て女に呉れて遣る、俺は聞こえない女の耳にしか聞こえない音を聞きたいんだ！　或る日必ずそれは俺の研ぎ澄まされた耳を襲って、俺を俺の耳だけではどうにも行き着けない所へ連れて行くだろう。その目論見がどうなったかは知らない。二人はもう何年も前に額を擦り合わせたまま腹を空かせて死んで、骨になって転がっている。その髑髏を手に取ると、生まれ付き繋がって居たかに額と額は張り付いて、その二つで一つの耳が、何処か知らない音へでも向けられているようで、それを額に強く押し付け、彼のした女を犯すかに、その二人の耳に鳴る音へと澄まされる耳を、グイと突き刺してみようか。ジェット機の音など跡形もなく消え、数知れない星の音もあっさり振り払えて、空の音だけの奥へ奥へ窮まりなく入って行けて、もう何の音へも戻れない。（二〇一六年七月二十二日）

坂と墓の見た夢

　しゃがんで手に取った石を小さな金槌で叩く人達で河原は埋まり、良く響く石を選り分けている。カンカンキンキン凄い音で、石を耳に緊く押し当てなければ、手にした石の音は聞こえない。集めて回るのは若い女で、公園と道を挟んだ倉庫跡の広い空き地へ運んで、隙のないよう敷き詰めて行く。市の記念事業で、そこは直にピカピカの広場になって市長も議員もご満悦で、柔らかい靴でも硬い靴で歩くようなコツコツと小気味良い音が響いて初め喜ばれたが、躓いて膝小僧の皿を割る事故が後を絶たず、石は全て剥がして、雨の度に泥濘んで滑って困る坂に敷き直す事になった。石で凸凹でも坂なら躓かないと、物理の先生のお墨付きを貰ったそうだ。石を剥がすのも若い女で、石と石が緊く噛み合って素手では生半可でなく、爪を剥がした。それを男共が並んで見下して、出来ない女を順順に怒鳴り付ける。それを独り黙って見て居る私に目を留めた大柄な奴が、「怒鳴ってするのは男の仕事、泣いてさせられるのは女の仕事、なあ！なあ！」と低い大声を伸び上がらせ、大股で近寄って来る。係わりたくないのでそこを離れ、木造の一軒家の二階で、呼ばれるのを待って横になって居た。呼ばれたようで下へ降り、誰も居らず外へ出ると、石を綺麗に敷いた坂道が見上げられた。明日の開通式の飾り付けは済まされて誰も居ない。足跡一つない坂を登って行く。踏む石と隣の石が当たって、カチカチと小さな音を鳴

らす。上から男と女が並んで降りて来る。どちらも素人ではない。なら女が男を買ったか。擦れ違いざま男と目が合うと、その顔がはにかんだようで、なら男が女を買ったか。それから二人が坂を下りて家へ入るのを見届けた。家は燃えていた。二人にも分からない筈はないのに、二階に上がって窓からこちらを見て居る。直ぐ後ろはすっかり明明と火で、二人の姿は影だった。それを見詰める私の脇を擦り抜けて、そのだらしなく纏うのが女の着るような服なので女だろう、それが急ぎ足で坂を下り、もう何処も火に包まれている家に入った。それを見てやっと私は、あれを独りで行かせてはいけなかった、あれと二人で火に飛び込むべきだった、あの二人のように、でも遅い、もう何も出来ない、と悔やんだ。火は燃えるものを全て黒焦げにして自ずと収まった。それからどれ程か時を経て、そこへ行ってみると、石の坂は家族連れやらで物凄い賑わいで、それに引き替え、家の燃えた跡は、粗方片付いてはいてもまだ火の匂いがする。その足で河原へ行き、火のように明るく鳴る石を探して見付からず、日が暮れ掛けて光るだけの石を一つ拾って、もう遅いので帰った。それからまた長い時が経ち、市役所から来た通知は、「お役の日にお前が草を毟りに来ないから他の人達の迷惑になっている。遣る事はちゃんと遣るもんだろうが。」と管理事務所の役人らしい自信と誇りに満ちた皮肉たっぷりな文面で、「草は毟られる為に生えて来るんじゃないよ、分からんかアホが。」と呟きながら、同

封の写真を見ると、焼けた跡は草茫茫で、真ん中にずんぐりした十字の見窄らしい石が一つ見える。三人の墓なんだな、きっとこっそり奴らだけで、火事で燃えたままに埋めてしまったんだ。捨てた覚えはないが光る石が見付からなくて、そこへは行っていない。役所からの紙はどれもそうするように、それも市役所の前のドブへ破って捨てた。（二〇一六年七月二十三日）

誰も来ない砂丘の見た夢

帰り着くだけなら幾つか浮かんでも、足は向かなかった。行き当たりばったりに乗り換えを繰り返して元の駅に戻ってしまえば乗り換えるのも已め、そして直に終点でさえない。なら何処。昔車庫の、もう朽ちて屋根は落ち線路は取り払われ、車輪を外された車輌が、いや、それは重い砂に埋もれて見えないだけかも知れないにしろ、頑なに動くのを拒むのは、砂からの鉄の錆びた匂いで分かる。その匂いを硝子のない窓から内へ引き込むのは高く強い日差しで、南側の乗客の肩を刃のように白く輝かせる。そのすっかり陰の顔を睨み付ける、向き合う北側の乗客の目は、一枚の版木から刷られた版画のようで、ただ色ばかりが鮮やかに、どれもどれとも違う。一人だけ、目に色のない女は、凹んだ

椅子に沈んで背を丸め、弛んだ白い腹を出して居る。女はそれ一人で、子供を産んで間もないなら誰の子か。乗客に紛れて名乗り出そうにないなら茶番だ、と思えて車輪の錆びた匂いに押し出され、独り砂の上へ裸で転げ出た。振り返ればきっとそれは車輌ではなく、その違う姿を見たくなくて振り返らなかった。踏む影もないなら陽は真上で、砂は進む程盛り上がり、もう体を前に傾けて這うしかないが、砂を蹴る足は滑るばかり。疲れはない。腕を振り出すしかないが、左腕が全く利かない。右腕だけで砂を掻いても、体は傾くだけ。その掻かれる砂から、細い背中が覗いた。やはり右腕だけで砂を掻く女が、小さな体を自ら砂から掻き出す。その女の利かない左腕を、こちらの右手で掴むと、女の左手が開いて、握り締めて居た小さな真珠が一つ砂に零れた。女が向き直って、こちらの左腕を掴んだ。その左手を開くと、掌には紫色の穴が開き、蝶のように薄い翼を羽搏かせる小さな鳥達が、穴の縁にしっかり爪を立てて止まって居る。そこも紫になって左腕ごと紫になると、腕は硬く真っ直ぐ砂に肩まで突き刺さり、錆びたナイフを掴み出した。その思い掛けない重みに体の傾く隙に、小さな女がそれを取り上げ、直ぐにその切っ先を自らの顔へ突き立てた。ナイフは縦へ横へ激しく忙しく動いて、膚は全て切り落とされ、血をじわじわと滲ませる肉ばかりが剥き出され、掌の穴の縁に止まって居た小さな鳥達が、その顔の上を飛び回って、濁り水のような糞を盛んに落とした。それは忽ち女の顔

に山と溜まって、女は砂に仰向けになって、熱い真上の陽を顔に浴びせた。女の服を捲って、子供を産んで間もない弛んだ腹を確かめたかったが、腹は少年のように浅黒く引き締まり、舐めれば鉄の錆びた味さえしそうだった。左腕は錆びたナイフを女から取り返し、裏を向けると、表だけが錆びて、裏は、強い日差しさえ撥ね除けて輝き、その青い光りは二人の目に飛び込んで、その更に濃い青の尖った欠片のような照り返しが、互いの腹の上を小さな蝶の鋭く舞うように走るのが見え、どちらも浅黒い膚のその色だけが、線路の敷かれた上を遠くへ運び去られるようで、慌てて真珠を口に含もうと虚しく砂を弄る右手は、糞に塗れた女の顔を撫で回す。版画の目で鳥達がそれをさざめき笑えば、その小さな体に似合う幼顔を、女は取り戻せるか。（二〇一六年七月二十四日）

忘れられた名の見た夢

「名を変えなければ命は無いよ。」「名を変えたら命も何も無い。」「次の名の命が有るよ。」「死んでも、この名の命を守る。」「死ねもしにゃけりゃ守れもしない。試しに、その守りたい名を言ってみなよ。」「忘れた。」「変えた名は。」「知らない。」「危ういもんだね。でも知らない名でも暫くは、君の命を守ってくれ

る。ただ知らないんじゃ、君は君の命を守りようが無い。」「でもまだ変えてない名のままなのでは。変えていたなら、それこそ知りようもない命で、ここから消えてる筈。それに名なんて、生まれた時から決まって居て、忘れるも何も、初めから覚えるまでも無かったんでは。名を変えるって何？」「死ぬしかないって事だよ。」「何だそれ。」「名を変えて得た命で死ぬんだよ、君に守れる命はもう無いんだ、君に守れる名が無いように。」「あああぁぁ、そうですか。」と骨董屋で、目の前の大きな壺に語り掛けて居た。「中で音がしてない？」と尋ねると、骨董屋「人が入り込んでるんですよ。どうやら死にたいらしいが、死なれて屍体を引っ掻き出さなくちゃいけないのは嫌ですが、でも中中死なないのも、どうも。」「死なないの？」「それが飢え死にしたいらしいんですが、紐に結んだ餡パンを垂らすと食うんですよ、腕は壺に嵌まり込んで手は使えなくても、口だけで。」「そんな事しなけりゃ良い。」「何もせずに死なれるのも後味が悪いようで、つい。」「譲って貰えるかな、まけなくて良いよ、どうせ長くない命らしいので。」「百八十万。」「ふん。」で、壺を叩き割ると、達磨さんぽかったのは初めだけで、直ぐに真っ直ぐ長い脚が伸び、色白ならきっと北国の生まれでこの暑さに耐えられないのか、怒りを込めるかにきびきびと腕と脚を振り出して、北へ向かって行ってしまった。「また巧い具合に割れましたね。これなら直せますよ、まけときましょう。」中の人の体が力を和らげたせいで、

壺は大きく三つに割れて細かな欠片も僅かで、その全てを拾い集めても掌に軽く乗る、それを眺めると、名を変えるとか変えないとか取るに足らない事で、「名を変えなければ命は無いなんて嘘だったんだ。」と、もう骨董屋が割れた三つを合わせて糊で繋ぎ、他の欠片もぼちぼち嵌めている、割ったのが嘘のような壺に語り掛けると、「君はさっき新しい名で呼ばれたじゃないか、生まれて初めて。」「ん、聞いてないけど。あの脚を生やした達磨さんにって事？」「君の命を守れるなんて他に居ない。追っ掛けなよ。」「なぁに、壺が直れば戻って来ますって。」と骨董屋。「壺の中で二人仲良く暮らすって、アハハ。」「懐かしいですなぁ。」「何が？」「名を変える度に命を長らえる事がだよ。」と、骨董屋を出て、抱えているすっかり直った壺は嬉しそうに呟く。これを何時どうやって叩き割ろうか忌忌しい、もうそれを考えるばかりにしろ、北へ行った切りのあいつが戻らないでは始まらず、名を変え名を変え、自らでは守れない命を生き続けるしかない。（二〇一六年七月二十五日）

見えなくなった目の見た夢

如何にも芳しい香りを詰めたかの、海月のようにふわふわと柔らかい硝子瓶

を手渡そうとする人集りの中に居た。誰にそれを渡そうか、何故今更迷うのか。決めて居た筈なのに、却ってその決めたままが嫌で、もっと思い掛けない誰かを待って、その自らの熱に促されるように、人集りは右へ左へ忙しなく揺れる。しかし直に人はばらけ、その熱も収まるのは、各各決めて居た者を見付け、硝子瓶の尖った蓋を開けて、それぞれの香りをその相手へ振り撒くからで、それらは見る間に捌けて、呆気なくも残る二人だけは、決めた者にだけは渡すまいと心に決めていたか、それともその渡す相手を互いに知られたくなくて、何時までも渡し倦ねて居るのかも知れず、その渡される筈の者は疾っくにそこを後にして、硝子瓶など渡されなくても、何の障りも無く、それが渡そうとされていたのさえ知らないままかも知れない。残った二人にはそれは却って幸いで、手渡せる者も現れなければ、その現れない者について互いにどんな嘘も吐ける。身籠もって居ないのに身籠もって居ると嘘を吐いた一人が瓶の蓋を外すと、その香りで目が潰れ、それに捧げられる数知れない香りに取り巻かれて更に目は塞がれた。身籠もって居るのに身籠もって居ないと嘘を吐いたもう一人が瓶の蓋と外すと、しゃがんで子供を産んだ。赤児は、そう決められて居たかに、すべすべした緩い坂を風に押されて転げ、それを思い掛けない誰かが拾って、赤児の尻の穴に突き刺さった柔らかい硝子瓶を抜くと、何の香りもしない。離れてそれを見届ければ、母親は決められた通りのように行方を眩ました。赤児は

抱かれたまま小舟に乗せられ、速く暖かい潮の流れのその向こうの濃い森の細長い島へ捨てられようとされている。舟は容易くは進まず、日が暮れも明けもしない暗い長い時が過ぎ、赤児だった者はもう櫂を操れる若者で、小舟にただ独りで、見回しても何処にも人影一つないのを確かめて漕ぐのを已めれば、舟は自ずと浜へ戻った。速かった潮の流れが止まっている。島の左端が殆ど陸と繋がっているからで、半ば塞がれた潮水は見る見る淀んでドロドロになって、魚達が白い腹で数え切れず打ち上げられても、その腐る匂いがしないのは何故、まるで硝子の膜に隔てられたようだけど、その知れないのを堪えられず、長い腕を島の右端まで伸ばして引き寄せると、搾り出されるように潮が引いて島と浜の間は陸になった。それでも腕の力は収まらず引き続けて、島は浜を押し潰した。そうして若者は目を病んで、押し潰される前の浜の光りばかりを瞼の裏に滲ませ、年老いて凝っと痩せ衰えて行く。耳へ流れ込むのは、どれも海を退けて陸を拡げる遠い音で、その研ぎ澄まされる程、遠い海の彼方の岸の形や香りまで描き取れた。その針のように尖った香りなら、針のように尖った硝子瓶に詰めるしかないにしろ、それを誰に手渡せよう、その蓋を誰が外せよう。それとも胎児の尻へなら突き刺せようか。なら、潮の向こうの遠い島へ子を産み捨てたい身籠もる腹を誘き寄せよう、思い掛けない誰かになって。（二〇一六年七月二十六日）

小川の見た夢

凝っと待つばかりでは時は流れず積み重なりもせず、もう何を待ちようもないにしろ待つしかない。待つのを已めて居たら、どうなって居たろう、疾っくに時に流され押し潰されて跡形もないのでは。山が海になり海が山になったのも、待つ身には遠い眺めで、しかしそう眺めて居られたのは、待てる身だったから。で、何を待たされたか、それだけは知って置きたい。も何も、それは知ろうとするまでもなく、すっかり知れていて、それでずっと待てたにしろ、ただその待った先がどうなるかは、まるで知れない。それが良かったか悪かったか、すっかり年老いて、体は若い頃より一回り二回り縮んで蹲っていると、その丸い背中の裂けた萎んだ体が脱げて、立って子供服を着ると、その似合う子供の姿だった。「君は＊＊かね。」と、聞き慣れないその名に振り返ると、大人が三人並んで凝っとこちらを見詰めて居て、左の一人が私の手を取り、その家へ連れ帰った。その人は一言も口を利かなかったが、先程私の名を呼んだ声が、酷く汚く醜く聞こえたので、その声の主でないようなら、少しホッと出来る。飯さえ食えれば良いのだ。の飯を食わせて貰えない。子供服だけは箪笥に有っ

たのでそれを包んで肩に掛け、こっそり家を出て、低い空の下の見通しだけは良い道を歩いて居ると、「おや、君は何をしているのかな。」「はい、お父さんお母さんを探して長い旅をしています。」「それは報われないね。」「むく、むく、何ですか。ムクムク？」「あのね、お母さんは縛られて居るよ、閉じ込められて。縛ったのはお父さんじゃないよ。お父さんは見てるだけ、知らん顔で。何時もの事だけど。」「そのお父さんを縛るのがお母さんですか。」「そう言う巧い事は、大人になって言おうよ。それよりウチへおいでよ。明日、人を寄越そう。」足元の、せせらぎが耳に美しい澄んだ流れを掬って喉を潤すと、耳に響く音が美味しい食べ物になって、それで腹の空く事はない。そのままその人の言った明日は、先へ延びに延びて百年経ってしまった。老いて縮んだ体の中で、次の幼い体が息をしている。外の体がまた脱げてしまわないように、脚を緊く縛った。これだけでは足らない。まだ見た事もない夢を見て、その夢に従うでもなければ同じ繰り返し。で、見た夢は、老いた私と幼い私が小川に入れた足を縛って繋げた夢で、「この夢は何。」「死ぬ夢ですね。」「そりゃどんな夢だって、死んで終わりに決まってる、生きてりゃ死ぬんだから。」「急く事も有りませんかね。」「じゃ已めた。」「そうしますか、水が涸れなきゃ命も涸れませんから。」それきり幼い体は、百歳を越えた老いた体を脱げずに、禿鷹も寄り付かない干涸らびて縮み果てた屍の中で、美味しい美味しいと、せせらぎの音を食べては、

若いままに今も生きている。（二〇一六年七月二十七日）

飛び抜ける夢

　空を飛びたいのではなかったか。何処から空を飛べるかなら知っている。草原の向こうの平たい一枚岩の緩く低く下って行く所。少しだけ顎を反らして目に映る空の色は、晴れでも曇りでも夜でもそこでだけ重く、その重さに促される足はもう岩を離れ、腕を拡げれば軽い体は追い風に乗って居る。しくじった事はない。なのに穴を探している。穴から空を飛びたいのか、それとも空を飛びたいばかりに飽きて、他の事をしたくなったか。それが何故穴か分からずに居ると、男か女か定かでない痩せた二人組が、先に穴を覗き回っている。一人では見付けられなかったのに、二人の後を追えば、幾らでも穴は見付かる。叢に覆われた奥、太い幹の後ろ、崖の割れ目の深い影、二人の足は少しも迷わない。覗いて何が見えるでもなく、二人の足に遅れる訳にも行かず、じっくり目を凝らせないのがもどかしくても、ずっとこちらに背を向けるままの二人が行き成りこちらを振り向いては何が起こるか知れないので、待ってくれるよう声を掛けるのは躊躇われた。穴に目を凝らすのは諦め、声が耳に入るまで直ぐ後

ろに付くと、それは嗄れて低くてもどうやら二人共女で、穴の中で働かされているの美しい若い男が目当てで、買われて来たばかりの新顔なのに、もう噂になっているらしかった。それとも二人は飛び抜けて早耳なのでは。となると私は何とも物欲しげな姿を晒して居る訳で、直ぐにも二人から離れたくて足を止めようとする、その先に二人が足を止め、お目当てを見付けたか、直ぐ目の前の穴へ首を突っ込んだ。二人は重なって艶艶と腰の肉の厚い一人になり、止め損なった足を滑らせた私は、穴へ転げ込んだ。覗き込まれて穴でも、それが転げ込んで穴かは、また違う。微かな追い風は湿ってひんやりしていて、緩く下る水の染み出す岩肌を躄りながら見上げると、淡い青の明るい空が少し遠くに望め、その手前は何処も暗く薄ぼんやりとして、ざわざわと風を鳴らす形は見定められない。「進め！」と後ろからの女の澄み渡る声に背を押され、飛び上がって走り出しはしても、何処へ。空は却って高く遠ざかり、それは更に真上から後ろへと過ぎ、ただ薄暗い穴の中で足は岩を離れ、風を呼ぶように体を前に倒して、その来る風に乗り、その先に滲む光りへと立ち向かって、直にそれは光りではなく音と知れ、それを潮の響きと聞き分けた尖った耳が、風を切る翼の務めを果たす。それで遂に穴を突き抜け様、振り返ってその剳り貫かれた穴の向こうにまで目を凝らすと、穴の縁に翳り付いて我先にて穴を覗き込む痩せたり太ったり取り取りの汚い目付きの女共と、それを次次に押し流すのを楽し

むかの白く煌めく荒波とが、入り乱れて、穴の入り口を争って居る。（二〇一六年七月二十八日）

岬の見える庭の見た夢

手紙を届けて呉れるよう若い男が頼んで置いた、庭の鳥が戻って居る。鳥の言うには、その男の望みは全て拒まれてしまった。それが何故なのか、鳥は男の知らない話しまでして、どれも尤もで男は一言も返せなかった。望みを絶たれたなら死ぬしかない。四つ角の大きな郵便局の建物の隅の、いきなり最前線に送られる傭兵を募っている窓口へ行くと、そこは宝くじ売り場で、金を持っていないので、売り子を殺して宝くじを奪おうと考えただけで、その百戦錬磨の女の売り子に直ぐにそれを見抜かれて警察へ繋がるボタンを押され、早速、でっぷりと突き出た腹を揺らす眼鏡を掛けた警官二人組が、足並みを確と揃えて走って来る。脅し文句でも叫んでいるらしいが聞こえない替わりに、彼らのゼイゼイと息を切らす音ばかりが耳に刺さって恐ろしい。浜辺を、砂の上では足跡が残るので、膝まで波に漬かって逃げていた。その先の岬の小山の濃い藪の中で、まだ免許を取れない歳なのにオートバイに取り憑かれて学校に来なく

なって学校の裏の山の天辺の一本松で首を吊った元同級生と、隣の仔猫に首根っこを噛み切られて死んだ今庭に来て居る鳥の十幾世代も前の鳥が、楽しそうに交わって居る。死んだ者同士の交わる姿なら、何処であろうと透けて見える。足が冷えて動けなくなって、四つん這いで腕の力だけで、岬の向こうへまで回り込んだ。岬の裏側は禿げ山で、傾く砂の上で元同級生と庭の旧い血筋の鳥は、毛を全て剃った瓜二つの白いふわふわと柔らかそうな猿が向かい合って交わる姿に見えた。ああ、あいつらに先を越されてしまっては、俺は死ぬに死ねないじゃないか。と思うと力が抜け、潮に流されるに任せた。庭の有る家に戻って居て、見える筈の岬はすっかり濃い霧に隠され、嵌め殺しの窓硝子を叩いても鳥達は見向きもしない。俺はまだ生きているのか、もう死んでしまったのか、この先ずっとそれを考えるしかないにしろ、どうしたら死ねるか考え続けるより、それはずっと穏やかな時の使い途で、それで却って身動ぎ一つ出来なくなって困り果てていると、霧の向こうの岬の小山を削って出来たオートレース場の、次次にカーブを曲がるエンジンの音が立て続けに響いて来る。その煩さを嫌って庭に鳥は来なくなり、あの二匹の猿も行方を眩ますに違いないなら、己が生きているか死んでいるかなど、考える程の事でもない。しかしそうなると、残る時をどう使えば良いか抜き差しならなくなって、どうしたら死ねるかでまた頭は一杯で、男はどうにもならない。全てオートバイのせいかな。（二〇一

六年七月二十九日）

患者の見た夢

「…言ってみれば、最も厄介な不治の病ってのは、病を語らずには居られない事なんですよね、死ぬと分かって死ぬまでずっと。医学の進歩で治せましょうか。」「医学と言うより言葉の使い方の問題でしょう。病を語るのを禁じられたら、生きる楽しみなんて少しも有りませんからな。医者にとっても患者にとっても、診察室は地上の楽園です。」「診察室だけじゃ有りませんよ。例えば政治家や市民運動家は、国家や社会が病んでいるのを正すんだとか言って、蜿蜒それを訴えるのが病み付きになって演説やデモをし、スポーツ選手は人間の肉体が如何に病んでいるか、これ見よがしに見せ付けて客を昂奮させたくて厳しい練習を自らに課し、昂奮した観客共は、憑かれたように彼らの肉体が如何に病んでいるかに就いて果てのない議論を戦わせ、芸術家は人間の感情が病んでいるのが嬉しくて堪らず、そっくりそれを写し取ろうと意匠を凝らし、それっ切りで行き止まりです。」「へぇ、あなたは社会学者ですか、人類学者ですか、二つ併せて社会人類学者ですか。」「どっちも、人類がどれ程根深く病んでいる

のかを語り続けたいばかりに、文明社会について、あれこれケチを付けて得意顔です。」「なら、人類はもう、死ぬまで病を好き勝手に語れる事で、または肉体や作品でそれを表現出来る事で、地上の楽園に住まって居るんですね。我もまたアルカディアに在りの死神とだって仲良しですよ。だって奴のお蔭でここは楽園な訳で。」「その最後の不治の病が根絶された日にゃ、我我は皆、楽園追放ってことですな、アハハハ。」「アハハハハ。」などと何時も医者と、どうでも良いような話しだけして何の検査もない。月に一遍来いと言われて通院しているが、俺は何の病気だったろう。と首を捻りながら、独り住まいの家に帰って二階へ上がると、ずっと開きっぱなしの干涸らびた唇を動かすのがやっとの寝た切りの病人が、苦しげに息をゼイゼイ言わせて居て、そうか、本物の病人は、医者へは行けないんだな、と腑に落ちた。しかし碌に飲みも食いも出来ず身動きも取れず、どうして何時までも、こいつは死のうとしないんだろう。（二〇一六年七月三十日）

手書きの地図の夢

「檸檬を一つ買って貰えませんか。」と、耳を掠めるか細い声に、うっかり

女になったような心持ちがして、そのまま腰をそちらへしなりと向けると、手にしている檸檬は如何にも贋物で、「実はお金を貸して欲しいんです。金利はちゃんと払いますとも。」とにっこり微笑み掛けて来る。顔色の悪い人懐っこそうな太った男が、古い難破船が打ち棄てられたままの暗い海辺を背にしている。潮の香りを弾く強い檸檬の香りがして、それは贋物に見えるようにして、何時までも腐らないようにされているらしい。酷く手が込んでいる、その檸檬の処理一つも半端でない金が掛かるに違いなく、幾ら貧乏臭い恰好で哀れを誘うような芝居を打っても騙されないぞと思いながら、「その檸檬が担保ですか。」と軽くいなすようにして目を逸らすと、「ええ、お金を貸して呉れる人を知りませんか。お礼なら弾みます。」「それなら知ってますよ。私もこれから借りに行くところです。おっと、ここだ。」先客が居て、腐り掛けの蜜柑が大きな籠に山盛りで、それが担保では、交渉が殺気立つのも仕方ないなと見て居ると、蜜柑の山の上にその檸檬が置かれ、「幾らですか」「そうですか」と直ぐに話しは纏まって、先客は、病を押して来た体をふらつかせ、これ見よがしに籠の縁に少しばかり血を吐いてから、金を握り締めて、檸檬の男に礼も言わず出て行った。要らんだろ、その血、と思いながら、「これは何の檸檬ですか。」と男に尋ねると、「檸檬があなたに答えて呉れるでしょう。」で、檸檬と向き合って待ったが、何の答えも返って来ない替わりに、どうやらこいつは金を高利で借り

るのを楽しんで居るんだな、と何となく分かって、悪趣味な金持ちめ、と腹の中で毒突いただけでは腹の虫が治まらず、「金をドブに捨てたいなら、ここでしょう。」と、地図を描いて男に渡した。人助けでもしたように嬉しそうに出て行ったが、暫くすると戻って来て、「分かりませんでした。」と言うので、落とし穴まで連れて行く事にした。その少し手前で羽交い締めにして首を切り、屍を引き摺って穴へ放り込んだ。要らぬ汗を掻いたが結果が同じなら良しとしよう、と自らを慰めた。戻るとまた先客で、古臭いお下げ髪の素足に草履の妙に小柄で小顔で幼く見せ掛ける風が怪しい汚れた下着を上着のように羽織った長痩せた色白の肌の少し黄ばんだ微かに川の砂の粘り気の有る匂いのする切れ長の目の端に溜まった涙を揺らして濁らせる技に長けて居そうな女で、係わったらまたややこしそうで、目障りなので直ぐに地図を描いて渡すと、女は悲しげに眉を震わせ傾けて黙って出て行った。戻って来られては面倒と後を付けた。女は地図の通りに落として穴まで行き着けたが、上に乗っても身が軽過ぎて落ちない。仕方なく絞め殺して腹を割き腸を出し替わりに石を詰めて腹を縫い合わせ、それでやっと穴へ放り込めた。汗を掻き過ぎて、結果が同じなら良しとも自らを慰めようもない。戻るとまた先客で、笑顔を絶やさない肉の締まった背の高い男で、日焼けした腕と脚を出して力が有り余るかに体を揺するのは、筋肉自慢が楽しいらしい。地図を渡すと、跳ねるように出て行った切り戻らない。

何とか金を借りられた帰りに寄って見ると、穴の底で、上を向いた竹槍に胸と腰を貫かれていた。さっさと死にたかったんだな、目を開けた土色の横顔など、こうなる為に拵えたかのようじゃないか。こんな分かり易い奴が、今日まで死なずに居られたとは、それが分かり難い。死ぬにはそうとしか有り得ないように髪を短く刈り上げた、その頭の形は、分かり易いものなど初めから有ってはならないと言いたげで、何かもっと、当たり前に分かり難いものに目を向けなければ真っ直ぐにも歩けない、と暮れた空を仰ぐ。吐けるものなら血を吐きたいと思わずには居られなくて、首を捩ろうか、どうしようか。（二〇一六年七月三十一日）

歌って逃げ切れた夢

「ここ、何か暗くないですか。」と声を掛けても誰も答えない。見回して、辺りは何が暗いもない。しかし暗くもなく、そう見える程に、暗くないか、と尋ねたくなるのは何故。己が暗いからだ。私は光りに違いなかった、少しも光らない。それがどうしてなのか、それを知りたくて暗さを問うに違いなかった。それとも全く違う事。例えば私は歌で、それなのに私からは、何も歌われない

とか。なら歌は何処へ行った、と問うように、光りを問うとか。目の前は歌に歌えるものに溢れているのに、そのどれとも係われない。そうして、夜になって俯いて、潮が引けば岬で潮が満ちれば島を背に、その今は潮に洗われる浅瀬を渡って居て、思うように島から浜に辿り着けないまま潮は高くなって、何故だろうと振り返ると、すっかり島の形の周りは、打ち寄せる筈の波を全て吸い尽くすように、何か暗いものにすっかり縁取られて居て、そんなものはこれまで見た事もないのに、ああそのせいか、と分かれば、足はすんなり浜へ進んで、直に水から上がれた。独りではなく連れが居て、「分かりましたか。」と尋ねるので、私に分かる事を喋ったが、私の話しに頷く連れの話しが私には分からなかった。それで連れを先に帰して浜辺に戻ると、浜から島までずっと、潮の下を黒いものが動いて居る。それらがどれも、島から浜へ向かうのは見て取れたが、浜が真っ暗で、浜を上がったに違いないもの共の姿はどれも、その暗い中に溶けて何の形も浮かばない。と、それらに違いない。私は、その前から寄せて来る力に仰向けに押し倒され、それらは引っ切りなしに私の上を通って、海から離れ、少し後ろの低い山へも登る勢いだった。その山のなだらかな形だけに、薄い光りを見て取れた。それは微かな煌めきの危うく被さるだけのようでも、その上に拡がる筈の空を、海と同じに真っ暗に見せる程で、私が誰彼無しに尋ねて回ったのは、あの、山の光りだったに違いない。そう思い込んでしま

えば、何かを得られるか、それとも何かから逃れられそうで、体の上を行き過ぎるものを振り払って起き上がり、その光りへと走った。その積もりだった。しかし何故か、黒いものを海から山へ向かわせる力に引き戻されるように、逆に体は浜へ向かって滑ってしまう。ああ、ここが歌いどころだ、明るいも暗いも言ってられないぞ、歌歌、と独りでに口を衝いて出る、歌かどうかも知れない知らない歌を、真っ暗な空へ突き上げて叫ぶようにして居ると、黒いもの共から除け者にされるかに私ばかりが横へ横へずれ、海も山もない島も浜も見えない、連れのぐっすり眠って居る町中の三角屋根の四角い家へ辿り着けて居て、夜が明けて直ぐまた、静かな広い川を幾つか渡って浜へ戻ると、島は跡形もなく、砂を粗方削り取られた浜からの海は、何事もなかったかに明るさを増し、振り仰ぐ山ばかりが輝いて酷く高く、夜、島の周りの暗いものを見て私が何を分かったか、連れが私の話しを聞いて何を分かったかが、やっと呑み込めた。

（二〇一六年八月一日）

肉の夢

「何でも思いのままだよ。」と聞こえたようで、その積もりになっても、何

の形も見分けられないでは、何を思いのままもない。「どうしたいのかね。」「何を。」「思いのままにしたいんだろ。」「何を。何を。」答えろよ、何を何を。真後ろが微かに明るいと思えて、真後ろへ仰け反って行く。風が白く汚れて瞬くように捲れて覗いた、そのこちらが問い掛けた筈の誰かの、首から下だけの姿の後ろには、空恐ろしい程に何もなかった。そうして空から突き落とされたような勢いで、河原を転げていた。流れは跡絶えそうに細く、酷い曇り空で、その暗いのは雲のせいでなく、雲の奥の別の何かに違いない。それで水も涸れるのか、と誰かに尋ねようと見回すと、疲れたような色ばかりの見慣れた眺めなのは、ずっとここに住んで居るから。にしては風が重い。吹いて来るばかりで、吹き抜けようとしない。風の身になって、どっちへ抜けようか探してやっと、家並みが無くなって居るのが知れた。町ごと削られて流されたか、その跡も見付からない。街は何処に建て込み何処に道が通って居たか、思い浮かぶ眺めと、目の前の眺めが、重なるようで重ならない。ここに住んだ事もないのではない。裸の女が俯せに倒れて居る。尻が高く、長い両脚は澄んだ流れに洗われて微かに揺れて居る。冷たく柔らかい両腋に手を差し込み、水から引き上げて、仰向けにし掛けると、ふやけた腹は自ずと破れ、青い丸丸とした赤児が転げ出て、ずっと待たされたかに長い欠伸をしてから、ゆるゆると、しかし直に激しく泣き出した。その声に引き寄せられた、赤児の顔を覗き込もうとする楽しそ

うな大勢に囲まれて息苦しいので、腹這いで後退って人集りから抜け、空を見上げ、その暗い中に破れ目のような形の明るさが見付かると、「お前だけが残されて、ここはお前の思いのままだったのにな。お前がそっと抱き上げてれば、児はお前の思いのままだったのにな。」と聞こえたようで、確かに死んだ女に係わったのは拙かった、と思って腹這いのまま長い昼の温い水に入り、さっきより暈の増した川を黙って流れた。替わりに、指図された仕事を熟すかに雄の鮫が上って来て、人集りは掻き消され、重い静けさの中で、鮫は赤児を噛み砕き、呑み込もうとして中中呑み込めない。腹の破れた屍の女が立ち上がり、長い脚で、鮫の顎を蹴るのを已めないからだ。曇り空の破れ目が拡がって銀色に輝くと、跳ねるように浅い川底に身を立てた鮫は、怒る牙で、女の頭を食い千切った。頭を失った女の体は、水の上でキラキラ輝く若い雌の鮫の姿で、その高い笑いは、曇り空を裂く銀色と真っ直ぐに繋がる。そうして重い静けさを破って満ちる銀色の響きに圧し潰されそうに、雄の鮫の私は、幼い我が児の骨を砕いて呑み、肉の筋は吐き出しながら、思いのままに出来た事共を、数えては消して行く。（二〇一六年八月二日）

追われて居たのを忘れて、それで追える。何を追って居るかは、追い追い知れる。何に追われて居たかは、もう知れて居て今また知れるでもないので、忘れて居られる。思い出しも出来ない、追うのに掛かり切りだから。それともそれはもう思い出してはいけないので、追うのに掛かり切りになるしかないか。そうして、どうにも追うしかない。しかしそうか。追うでも追われるでもなく、ただ彼らの見て居る前を、独り走り抜けたかっただけなのでは。もしそうなら走り抜けた先には何も無い。そしてどうやら何も無い。とは言え、それでは遣って行けないので、その暗い先にのっぺりとして角張った広い真っ直ぐな下り坂を凝っと見通さずには居られない。「戻って来いよ、もうお前の負けだ。」と後ろから聞こえるなら、尚更戻る訳には行かず、坂を下り続け、その暗さを歪ませ坂が曲がる程に速く走って、ぐるりと何処かへ戻るしかない。で、その走る足だけが頼りの奴はどうなったろう。知れるのは、俺が何を追っているかだけで、薄暗いのは仕方ないにしろ、耳を澄ませば、波に乗って流れ着いたように漂うのは、手紙を読み聞かせている声とは分かるが、中味は波の音に紛れ、また水に溶けて海の拡がりに隠されては、足は縺れる。その足元で、凝っと声に聞き入るのは、初め石で出来た犬に見えたが、犬で出来た石に違いなく、見るからに石が、蹴れば硬くても触ると毛並みは柔らかく、軽く抓れば濃い犬の

匂いの息をそっと吐く。声は手紙を読み終わって居て、それでも声として残って、白くゆらゆらと寄せる波に身を寄せるように項垂れて、途切れては、その途切れたものが先へ延び、また繋がって、それは、数を増やす白い蛇が波打ち際をのたくって、ゆっくりと浜を離れ、沖を目指して繋がったまま流れて行くのでないのなら何。「これは道なんだ。道と言うものが有るならこの道しかない。」と、犬で出来た石を睨み付けて、そう言わせていた。それで確か、と目を再び落としても砂の上に石は見当たらず、名を呼ぼうにも知らないし、名って何の名？　名を売る所なら知って居ても遠過ぎる。「買いに行かなくても、海を渡れば有りましょう。あなたにしか呼べない名が。」「何の名だっけ？」「手紙を書いた指の匂いの、その匂う身の。」「え、それってあなたでは。あなたでないなら、あなたが成り済ましているあなたでは、違うの？」「それ、って何でしょう。まだ名に相応しいそれとかについて、何か話せるなんて事が有りましょうか。」と腹を空かせた掠れ声で言われ、その声の主に冷えた食い物を分け与えると、その誰かのあなたは、丸めた背中を影のようにこちらへ向け、食い物を呑み込む度に背中をブルブル震わせる。そんな小技で気を逸らそうとするのは何かを隠しているな、と分かり、その背中を力尽くで押し退けると、のっぺりとした狭い壁で、滑る足でその脇を擦り抜け、危うく回る坂を下れば、暗い水に囲まれた高い崖が切り立つ。掘り割りに小舟を浮かべる、また掠れ声

のその誰かに、「山は海に浮かぶ為に、草木を繁らせて居るんですね。」と言われ、そうだそれを忘れて居たと慌てて小舟に乗ろうとして、足元の闇を見逃し水へ転げ、のたくる白い蛇の連なりの終わりの尻尾を何とか掴んだ。ぬるぬるして居て、放してしまいそうで心許ないが、それを放してしまう所が行く先にも思えて、身を潮に流されるに任せた。そうして、その言われた山の、浮く島に流れ着いた。濡れた岩肌が迫る狭い岸辺から身を仰け反らせて島の森を見上げると、繁みのあちこちから、ゆったりとした楽の音が柔らかく響いて伸び上がり、それらは初めこそ纏まって聞こえても、直にバラバラに島を行き交って、それも煩いが、それで、ぐるりと打ち寄せる波の音が更に酷く煩く聞こえた。
（二〇一六年八月三日）

逃げる女の夢の続きの夢

　弾けるように水から上がった白い蛇達が、行き交う楽の音の隙間隙間に、それぞれに定められた好きな仮名文字を象るかに、拗らせた身を挿し込んで、凝っと温まって居るらしいのが、ちらほら見えて、促されるように島の濃い繁みへ足を踏み入れた。裸足で、蔓の棘や硬い葉の縁で、その増すばかりな痛みで

はきっと、繁みに埋まった足は傷だらけに違いない。波の音の煩いのが少しずつ遠さかるのは、果たして慰めになるかを考え続けた。もう大分登った筈だと一息吐いてる振り返る、直ぐ下に、そこだけ繁みが分かれて細い川が、左から現れ右へ隠れる。ゆったり川の流れる程に大きな島だったか、にしても、どうして海へ下らず水は横へばかり流れるのか。その川を跨いだ覚えがないのなら跨ぎに戻らねば、と片足をそちらへ下ろすと、川へ片足を踏み込む男の姿が川を挟んで現れて、あれは俺だろう、と思えてしまうのを慌てて振り払うのは、夢で己の姿など見付けては直に死ぬのだ、と知って居るからで、しかしその姿はこちらへ向かい、川に腰まで漬かって分厚い黒い影になり、左から流れて来る、川下りのための小舟を捕まえたいらしい。「そんなもの流れて来るもんか、にしても川は細いにしては、やけに深いな。お前が流されるぞ。」と掛けたい声を咄嗟に呑んで、いや奴が流されるなら俺は助かるんじゃないか、と次の足を繁みから抜いて川へ向けると、もう色取り取りの砂が鋸の刃で掃いたように棘棘と波打つ狭い川岸で、草一つ生えないそこに、独り葉も付けず、黄色い太い茎をぬっと伸ばし、喇叭の形の白い大きな花が咲いて居る。おかしな花だ、俺が作ったなら作り替えないといけないな、と手を差し伸べるに合わせて川が怒るように嵩を増しては、仰け反りながら後退るのがやっとで、身を繁みに埋めて横向きに泳ぎ登るように、追い縋る水を振り切るしかない。しかしこれは川

の水ではなくて、浮く島が海に沈み掛けて居るのでは。白い蛇達が、島の少し先のゆったり海へ流れ込む広い川へと渡って行く。浮く島が、海から川へ入って更に遡ろうとして、それで州の手前で傾いているのが分かった。島を残して、蛇達は川に合わせて身を細めながら昇って行く。島も蛇を見習えば良いのだよ。「でもどう遣って？」と島に尋ねられたようなら、どうにかするしかない、島に濃い息を吹き掛けて、森の形を細長くした。益益傾いた島は殆ど引っ繰り返って、暗い空へ向けて裏を見せて沈んで行く。もうすっかり日が暮れたなら、島は暗い水に沈んだまま誰の目にも止まらずに、何の力も借りずに独りで、川を遡れるなら、そうさせよう。島を後にして、蛇達を追った。急な流れの上へ行く程、身を更に細く小さくして泡立つ波に紛れても、それらを見失いはしない。それはひょっとして、この身も蛇なのでは。などと言う疑いを振り払えば、ゴツゴツした石ころだらけの川岸に放られて、帰り着ける筈の家を探して、直ぐに乾いた身を縦に引き延ばそうとすれば、それを見越して足元から這い上って来る蛇達は、見る見る太く長くなって腰に纏わり付き、そこから、棘の有る蔓を編んで出来た門へと絡まって行く。（二〇一六年八月四日）

蔓で編んだにしろ、門がボロボロなのは、初め石を積むより高い墓を立てようとして巧く行かず、放って置いたら穴が開いて半円形に拡がって、そこを潜り抜けなければならない事になってしまったからで、ギシギシと嫌な音を立て、絡んだ蛇達も、彼らの重みで門が潰れるのを恐れるかに身動きが取れない。そこを潜ると、のっぺりとした狭い壁で、擦り切れて読めなくても、びっしり文字が刻まれてあるなら、それは作り直された墓に違いない。とは言え、文字列は右に片寄って、それも作り掛けで放って置かれたままに違いない。しゃがんだ男が、犬で出来た石に餌を与えている。餌は石より一回り大振りな生きた黒い野兎で、乗られた石に背中を噛み砕かれるところで、兎の大きな黒目が少しずつ透けた青に変わって、「この兎は何で出来てるんだよ。石か、潮水か。」と尋ねると、「石を砕いて潮水で捏ねて兎にした。良く分かったな。」と答える男は、しゃがんで居るのでなく、犬で出来た石と同じ背丈で、犬で出来た男だった。やっと話しの通じそうな奴に出会えたと思い、「俺はここで家に帰り着く事になってるんだが見当たらない。なら、仲間を呼んで家を建てて呉れ。」と頼むと、「家は頼んで建てるもんじゃないだろが。」と鋭く叫んで、飛び上がって殴り掛かって来る。それをするりと避けて振り返ると、門に絡まった蛇達は皆、蔓に身を締め付けられ、砂混じりのどろりとした血を吐いてぐったりと門

に垂れ下がって、風に揺れて居る。不味い口の中の硬い舌をゆっくり左回りに三回回すと、生き残った蛇達がぽたぽたと落ち、それは三匹で、弱弱しくも地を這って、闇へ紛れ掛けた。慌てて腹這って後を追うと、闇の奥に離れて並ぶ三つの暗い色の窓へ、それぞれに向かっているのが仄白く浮かんで、それより近寄ってはならないのだと、そこに石のように凝っとしゃがみ込んだ。間に、また別の、犬で出来た男が眠そうに身を起こし、脹れた腹から水を吐いて辺りに水を撒き、それで愈愈、蛇と窓から隔てられ、そのまま身は冷たくなって行くのかも知れないなら、犬で出来た男を眠らせて、その夢の中へ逃れられないか。三つの窓の更に奥から、三つ異なる調べとはっきり聞き分けられる楽の音が微かに届いて、窓は暗い色から少しずつ白んで行く。犬で出来た男が「白だけはいけない、白だけはいけない。」と泣くように吠えた。「何故。」「白は月の囚われた色だろ。」ふん、月とはまた月並みだな、それよりこの男をどうしたら眠らせられる、吠えて疲れたら眠るかな犬だけに。「犬の夢に逃げ込もうなんて先が知れてるぜ。」こんな減らず口、相手にしたのが間違い。三つの窓の白はもう輝くばかりで、それはこっちを照らしてるんじゃないのか、と見ると、俺は裸で真っ白で、月でもないが、その白に囚われているには違いない。犬で出来た男は蹲って震えながら、やっと何か走り書きを残して犬が駆けるように消えた。そっちには奴らしか知らない墓が有るんだろうよ、どうでも良いが、

と手紙を覗くと、仮名文字に似せようと這う、掌に幾つも乗りそうな白い蛇の小さな姿が並んで、それは、楽の音を奏でるための三つの窓を持つ広い部屋を褒めそやし、そこを抜けた奥の行き止まりの狭い部屋の醜さを、汚い言葉で強く罵って居た。一つ一つの蛇の姿は読めなくても、どうしても、そうとしか読めなかった。(二〇一六年八月五日)

逃げる女の夢の続きの夢の続きの夢の続きの夢

鉄の板を打った小さな木の椅子を真ん中に嵌め込んだ一人乗りの小舟が、内も外も銀に塗られ、赤い敷物の上に飾られて居て、それに驚かされ狼狽えてしまうのは、その舟は抑も、金を塗って、黒髪で編んだ袋へそっと仕舞って置けよ、と言い付けた筈だから。しかも赤い敷物の下は猫でも押し込んだかにゴソゴソ動いて、舟は波に揺られるようで、鉄で固い筈の椅子は向かい風を孕んだように丸く脹れて椅子の形もなく、その中から身籠もった蛇でも這い出ようなら、何処で何が失われるか知れない。しかし失われるものなど、どれも、もののの上辺を刷く陰の色で、高が知れて居よう。にしても、失われてならないものも一つ残らず、その陰の色に収まるものでしかないのでは。と辺りを見回すと、

月を嗤った崇りかに、部屋には出入り口しかない。出入り口しかない部屋って部屋？何処が？と喧嘩を売る相手も居ないでは、その出入り口を目に焼き付けなければ始まらないにしろ、で何でお前は座っているのかな、と叱るのは俺の他に居ない。の俺が酷くあやふやで、なら兎に角、訳の分からない、誰の耳に入っても何の事か聞き取れない戯れ言を途切れず言い続けて、それで心を高ぶらせないでは、何処かへ流されてしまいそう。で、そうして居なければならない俺は、遠ざかって小さくなって他の誰かの姿をして、独楽のように、細い風を横に鋭く受けて回っている。なら、そこまでは部屋なのだ、とそこまでの距たりを目で測ろうとすると、鳴って居た音が今跡絶えたのが耳に届いて、それは出入り口が消えたからと分かって、そう分かったのは、銀色の小舟も同じで、脹れた椅子は舟の腹を歪に脹らませ、身籠もったとしか見えない。腹に穴が裂け、丸丸太った白い蛇が次次に赤い敷物の上へ這い降りて、眠りから醒めたばかりのように、ピチピチと跳ねたい力を余すかに輝くなら、眠り薬がどっさり要るに違いないにしろ、何が眠り薬か蛇しか知らないでは蛇任せで、蛇達の這い回って赤い敷物がヌルヌル汚れて行くと、部屋に淀んで居た風も汚れて動き出し、消えた出入り口を探そうにも、月明かりに阻まれる。その月明かりが眠らせたのか、蛇達は敷物を囲む白い泥と変わらない。その月明かりより汚れたものもないよね、全ての汚れは月から来たからよね、と、その丸っこい体付き

が見覚えの有る兎の、聞き慣れ過ぎて古びて聞こえる声が、汚れてもう殆ど黒い艶を出す赤い敷物に肌を晒して仰向けにされたつるりと脹れた腹を、ぷっつり開いて、その兎の声に従えられた節榑立った手で、腹の中は永年し慣れて来たかにてきぱきと探られ、部屋の向こう端でそれを眺める俺だった誰かは、目を逸らし、足元から引っ張り出せば幾らでも出て来る様様な鎖を、自らの体に縛り付けるのに係り切りになる。それで鎖に覆われ、もう鎖自らが鎖を巻き付けているとしか見えないで、その自らを鎖で叩いたり鎖を巻き付けて回したりして、独りで独楽になって楽しんでいる。何処かに穴は開いていないかしらね、と兎の声はすっかり老け込んで、それで却って若かった頃のままの丸っこい体付きが引き立って、月明かりを遮る大きな陰を脹らませた。穴はきっとその陰の中に開いて、そこへ独楽は頭から突き刺さって行く筈だった。穴がないなら独楽も疾っくに何処かへ弾かれ、点のように小さな月の姿だけが、流れても流れても、汚れた風の上っ面を流れ続けて行く。消えないものなんて他に無いのを誇りたい月か。（二〇一六年八月六日）

逃げる女の夢の続きの夢の続きの夢の続きの夢の続きの夢または逃げ切った女の夢

急に人が足らず、見張り小屋には、新入りを遣って居た。その知らせは先ず、広く速く深い川に、根刮ぎにされた大きな木が二本流された、と聞こえた。それが耳の中で、二つの大きな暗い森山に、狭い流れが一本傾斜を昇るように迷い込んだと、聞こえ直された。どちらが正しいかは、それを穿鑿したい者らに遣らせて置こう。耳は、頭後ろ半分切り取られて剥き出されたかに、後ろへは筒抜けで、耳を欹てる奴らは、そちらに常に張り付いているのだから。それより、知らせが届いたと言う事だ。見張り小屋から知らせの届いた例しなどない。抑も何を見張るのか。どの辺りかは知って居ても、行った事もない小屋からの眺めは、ただ枯れ掛けた草原が続くとしか思い浮かばない。誰も彼も遠ざけて、何時ものの、何の声も音も遮る小部屋へ閉じ籠もった。筈が、足元で水の唸る音がして、見ると小さな水溜まりでも、音の遠く波打つような重い響きからして、酷く底は深いのかも知れない。音が煩くて、ここに居てても仕方なくても、三日経たなければ、誰も部屋を開けに来ない。水の音なのに、直に聞き慣れて聞こえて居るのも忘れられる、とはならない。耳の中で鳴れば鳴るだけ、その響きが耳障りに重なり合って、尖って揺れるように耳を占める。水溜まりを覗いて見よう。何故もっと早く思い付かなかったか。身を投げたくなるのでも恐れたか。するとそこに、自ら光り輝いて眩しい己の姿が映って揺れた。見る間に唸

る水音は已んで、替わりにその己の輝く光りの熱で、土がじりじりと灼ける音が、水溜まりの底に見て取れた。その深さは、身を沈めて足の僅かに届かない程で、その僅かが恐らくは命取りで、屍は見えない奥へ闇に呑まれた。いやまだ屍な筈はない。いや、屍な筈はなかったのが、水に奪われて屍になってしまった。とは言え、それはほんの思い付きかも知れず、屍の姿を導き出す水の色を先ずは頭から振るい落としたい。そう出来たか出来なかったか、確かめる術もなく三日が過ぎ、筒抜けだった耳はすっかり閉ざされ、但し硬くではなく、何か柔らかいものに取り囲まれたかにで、そんなように塞がれて、耳はもう耳の用も為さなくなると、それは水の底を覗き探るための別の目になって、森山に挟まれた狭い流れから大きな川までを疲れ知らずに泳ぎ回り、黒く光る小さな薄い箱を見付けた。振ると、水音は混じらず、ただカタカタと乾いた音だけがして、水底を探る目にされた耳を、音を聞き取る耳に戻した。水の色だけが、魚達の陽に輝く背に妨げられながら、今も屍を探している。それを思う度に、西へ東へ移り住んで、より高く噴く清らかな泉を探す。（二〇一六年八月七日）

私の調査では、女は食うに困らない。女共は腹を空かせれば地べたを掘って、そこに必ず腐った人の頭を掘り出して、それをガリ食って何食わぬ顔をして居る。その報告を上げると、私は同意し兼ねるが、それでは女は何時まで経っても下等な生き物のままだと言う事になって、それは厳しく取り締まられる事になった。とは言え、他に女に食えるものが有るか。女共は山へ逃げ込んで、警察の目の届かない所でまた、地べたから人の頭を掘り出しては、泥塗れになって飢えを凌ぐしかない。しかし何時しか、そんな事もせずに済むのか、ずっと街に留まって涼しい顔をして居る女も、ちらほら見受けられるようになった。そんな彼女達は、ただ窓の手摺りに凭り掛かって凝っと遠くを見詰め、嘗ての恋人や夫や行きずりの相手なら先ずそれを、でなくても、名も知らなくても顔さえ思い浮かぶなら、それが何千キロ離れていようと、その男の首に齧り付いて、その血を啜り肉を食い千切っているらしい。しかしそれで腹は満たされるだろうか。その血や肉がどう遣って何千キロを越えて、女の胃袋まで届くのか。実は昼間こそ着飾って居るが、夜中にこっそり汚い恰好で山へ入って、四つん這いになって腐った首を貪り食うのではないか。アホな男共に考えが及ぶのはそこまでで、女はもっと違う遣り方で、さっさと腹を満たして居ように。(二〇一六年八月八日)

会社を呪う夢

　創業者が死ねば早速異端者狩りが始まる。見分け方は、血縁であるかどうかだけ。異端者の過ちが列挙され、後継は同族で占められる。しかし血ばかりが継がれるのではない。彼らは異端者に押し付けた過ちを決して忘れない。その過ちの順序立った記憶が受け継がれて、経営は道を踏み外さず、会社は生き残って行ける。つい有能そうだからと間違って外から血を入れたりすれば、その新しい経営者は、異端者の過ちなど見向きもしない。それでは運を天に任せるようなもの。しかし、と創業者は考える。初めから同族に一切経営に係わらせず、私が得たような天運を引き寄せる方法を見付け、それを社員に植え付ける方が、後後まで会社は伸びるんじゃないか。で、創業者が天運の研究にのめり込めば、後経営はもう同族の手に移って居て、となれば、その同族達が、先を見越し、異端者狩りの謀議を練ってそれを実行に移すかどうかが、その会社の行く末を決める。と言う夢から醒めると、その夢を売って呉れと煩く付き纏って来る奴が居るので、「言っときますけどね。私は創業者どころか、会社を三つ潰した者でね。それも今分かるのは、同族会社との取り引きの仕方を間違ったんですな。それで私が路頭に迷わせた人達は、どうしてるかな。」「私は異端

扱いされ石もて会社を追われた者の縁者です。」「ああそれで、復讐しようって訳ですか。でも奴らは復讐され慣れてて、並大抵じゃありませんよ。それより毎日奴らに呪いを掛けるってのは、どうです。遣ってみました？」「それが、奴らは復讐され慣れてるよりずっと、呪われ慣れてる。」「違いない、呪われるどころか、奴らの、異端者とその末裔まで呪い続ける執念たるや、右に出る者は居ませんからね、アハハ。」「もっと凄い会社を作って、奴らを叩きのめさないと。」「でも私の夢じゃ、その会社は、あなたじゃなくあなたの同族の心掛け次第ですが。」「同族なんかに頼らない。」「うーん、じゃ尚更、私の夢で良いのかな。先ずあなたの方が、奴らに掛けられた呪いを解かなければならないような…」「出来る訳ない、呪われるなら呪い返す。」「そらやっぱり、ここは呪えるだけ呪っときましょうよ。何かそのお役に立つのなら、安くしときますよ夢。」

（二〇一六年八月九日）

七色の夢

「何をされてるんですか？」「刺青を彫ってます。仕上がったら皮を剥いで壁に掛けて飾るんです。」「動物の？」「人のですよ。家の倉庫を小さな美術館

にしました。販売もしてます。ご覧になりますか。」これ何処かで聞いた話しでは。うっかり誘われて行ってみると、ガランとした部屋に手術台が有って、そこへ縛り付けられて刺青を彫られ、皮を剥がれ、血を噴く肉剥き出しの体は裏の川へ捨てられる。しかし足は止まらない。で、入ってみると、如何にも手作りの展示室で、刺青のびっしり彫られた人の皮が壁中に吊り下がっては居ても、唐獅子牡丹も昇り竜も見当たらず、素人目にも酷く下手な出来で、「何です？これ、ギザギザとガサガサが、入り乱れて飛び散って飛び交って、その、絵柄と言うか。」「若い頃、抽象表現主義に嵌まりました。」「どんな人が買うんですか。」「若い頃、抽象表現主義に嵌まった人です。」「なるほど私じゃない。」「実はお見せしたいのは、こっちです。」と、手垢で汚れた背の高い傷だらけの木の椅子に塞がれた奥の壁のドアを、力尽くでやっと少しだけ開けた。その暗い中を覗くと、床へ滑り込んだ僅かな乾いた風に戦ぐかに、褪せた幾つかの色が艶を競って捩れ合って、直ぐに薄い煙のように消えた。それは私がずっと探し求めて居た色の並びに違いない。それがこんな所で見付かって、しかも消えてしまって良い筈がない。一度見付けて消えたからには、もう探すのも儘ならないかも知れない。これで力が抜けて、しゃがみ込んで踏ん張ったりしたら、そのまま子供でも産まなきゃ帰れそうにない。産まれて直ぐ、色取り取りに染まってしまう子だろう。蛙にでも預けるか、捨てて干涸らびるに任せるか。急

いで帰るが何処へ。家は流されてしまって、高い波が寄せるばかりな浜辺を走った。低い曇り空から降りて伸びる長い針に突かれ突かれ、青黒い墨で背中に刺青が彫られて行く。肌へ入れば青は、裂けた雲の奥から差す鋭い陽を受けて、身は隅隅まで七色に輝いて、ああ風に晒すばかりではそれは灼けてしまう、波の底に身を投げて隠すしかない。そうか分かった、あいつは浜へ打ち上げられる屍を見付けては、その皮を剥いで、それをあの奥の暗い部屋へ溜め込んで居たんだ。殆ど真っ暗な中に置いて、時時闇を揺らめかせて、ほんの僅か、やっとその色を残せる。しかし波に攫われるまま沖へ出ると、潮の流れは陸を離れるばかりで、濡れる肌は、陽を受けてさえ黒い潮より尚暗い。あいつは、ぽつんと浜を彷徨くだけで、悪い事でもしたような急ぎ足で、手ぶらで帰って行く。蛙に預けたかの子は、どうなったたんだっけ。（二〇一六年八月十日）

用心深い男の最後に見た清浄無垢な夢

　さて妻である。そう古い事でもないだろうに、どんな経緯で何時からこの女が妻なのか思い出せない。一つ確かなのは、この女が「この世で最も邪悪な存在」と言う事であるにしろ、その何が邪悪かと考えても無口で鈍間な妻は尻尾

を出さず、何も思い浮かばない。ただ、そう言い切ってしまえば、もう付け加える一言もなく全くそれだけの女に思えて、それで何をどうするでもなく、男は安らかな眠りに付ける。腹の辺りで音がして目を覚ますと、妻が、男の腹を千枚通しでガチガチ突き刺して居る。ああやっぱりな、俺の見立て通り男の邪悪な女だ、俺はもう終わりだ、とは思うが、すっかり忘れていたが、男は念のため鉄の腹巻きをして寝て居て、まだ終わっては居なかった。苛立つように叫んだ女は、上に伸し掛かって男の首を絞めて来る。今度こそもう終わりだとは思うが、すっかり忘れていたが、男は念のため布団の下に鉈を隠して寝て居て、それを掴んで女の胸を突き、切り裂いた。血を吹き上げたまま、女は、自ら胸を裂くような凄い叫び声を上げたので、近所の連中が一斉に寝室に傾れ込み、誰も身動き取れなくなって成り行きを見守るしかなくなった。女は少しも怯まず、息をするように嘘を吐くとはこう言う事か、それも激しい息で、男の悪口を捲し立てて止まらない。男がやっと二言三言、起こった事をそのまま呟くと、それに耳を欹てて近所の連中は、誰も男の言い分を信じて、手分けして庭に恐ろしく深い穴を掘り、息絶え絶えでも死のうとしない血塗れの女を放り込んで埋めた。警察が来た時には静まり返って、悪戯の通報らしいと迷惑顔で帰って行った。次の夜、新しい妻が横に寝て居る。少なくとも邪悪ではない。では何かと考えても何も浮かばない。居るのか居ないのか分からないような詰まらない

女なのだろう。兎のような寝息を立てて眠っている。邪悪な前妻は胸の傷口をぱっくり開けたまま地中深く埋められても、きっとまだ生きて居て、それなら生き霊となって、この女を取り殺しに来るだろう。それを、今か今かとワクワクしながら待ったが、何も起こらない。新しい妻の寝顔は月の光りに輝いて、清浄無垢とはこの事か、この世のものとも思えない。しかしここはこの世だ。そんなものは有ってはならない。ならきっと前の妻が、俺の周りの邪悪を、とことん地中深くに吸い取ってしまうのだ。それで新しい妻が目を覚ましたら、その曇りのない小さな瞳で俺を見て、兎に与えられた人参のように、俺の頭をガリガリ齧って腹を満たし、何事もなかったかに、あどけない笑みを零すに違いない。邪悪を奪われた俺の体は、ただ固まって居るしか出来ない。助けを求めようにも、何処にも邪悪がないでは危難を訴えようがない。あいつめ、やっと正体を見せたな。邪悪を悉く地下へ吸い取る、邪悪の極みだ。（二〇一六年八月十一日）

鳥達の見た夢

若い男、と言うには顔も体付きも幼くて見えて、まだ子供か。彼は囚われ、

四つん這いにされて、狭い所に閉じ込められて居る。狭い部屋ではない。その狭さは彼の四つん這いの体と同じ大きさ、つまり、その四つん這いの中に彼は囚われていた。飛行機の格納庫かも知れないようでも飛行機が皆出払うか撃ち墜されたかで、広広とした空っぽな建物の中に、どれも澄んだ瞳の若い娘達がびっしり入れられた。娘達は全く同じ形の一重の服で全身を覆って居たが、その布の色はどれ一つ同じではなく、その色で、その娘が何処の誰か見分けられるらしかった。四つん這いの若い男は、娘達に大声で指図する男の側にずっと居て、黙って女の群れを眺めて居た。中に、決して見過ごしに出来ない布の色を見付けた。それは、何処かの見覚えの有る色だからではなく、見た事も、思い描きさえ出来ない色だったからだ。娘達は三つに分けられ、一組は売り飛ばされて金に換えられ、一組は今も交渉の道具に使われ、一組はあれこれ些細な理由か理由もなしに皆殺された。若い男の目を釘付けにした服の娘は、殺されて居た。それを知っただけで、彼は四つん這いのまま囚われから抜け出し、丸一日駆け続けた所で足を止め土を掻き、その埋められた娘の体を迷わず掘り出し、その娘と自らの体を緊く縛って、禿げ山の頂へ登って身を横たえて構えた。私達は、生きる肉と死んだ肉の区別はしないと決めて、勇んで直ぐ様二人を骨だけにした。（二〇一六年八月十二日）

交換する夢

午、仲間と食堂には行っても、飲まず食わずで働いて居る。私の胃袋の事は、何となく知れ渡っているので、もう誰も何とも思わないにしろ、もうガリガリに痩せて先は知れていよう。仕事の帰り、街路樹に長い腕を回して、クルクル回って、登ったり降りたりして居る奴に、胃袋を貸して呉れないかと声を掛けられる。あんたは良いよね、飲まず食わずで仕事が出来て。仲間にも差を付けたんだろうね。あんたの胃袋を借りられたら、僕も飲まず食わずで練習に励んで、木登りがもっと巧くなれるんだがな。僕の胃袋も大して入らないように出来ては居るけど、全く飲まず食わずって訳には行かなくてね。で胃袋を交換した。奴はお礼にと「入ってはいけない者のための証明書」を呉れた。慣れないせいで食い物屋を見付けるのは一苦労で、明け方やっと一軒見付けて、昨日の残り物っぽいものを胃袋へ掻き込んだが、そうは入らない。そこから仕事へ行った。会社の門で呼び止められて、「入ってはいけない者のための証明書」を持って居る者は入ってはいけないと言われた。ならと、食い物屋へ引き返して、残り物の残り物を掻き込んだ。そこからまた会社へ行くと、例の証明書を無くして居て、門を潜れた。機械は使わず、人の手だけで掘ったらしい大きな穴が

開いて居るだけだった。そこをずるずると落ちて行く。尻を擦り剥いても、まだ底に届かない。「入ってはいけない者のための証明書」を無くしたのが悔やまれる。腕だけで、ガリガリに痩せた体を誰も真似出来ない程に素速く回して、今頃あいつは名うての木登り兄ちゃんかな。（二〇一六年八月十三日）

深い森と語らった夢

「人は、二種類居てね。超えられない深い溝で隔てられてるって事だな。」男と女の間には、って話しですか。「ん？男と女の違いなんて微微たるものだよね。しかもその一つ切りの違いを互いに使い回して置きながら、それに使い回され振り回されてるってんだから、ハハ。」じゃ、異星からの外来種と地球固有種って話しですか。「種類は違うけど、血が混じったのか、何時しか溝は埋まったらしいね。」分かった、神を信じる人と信じない人でしょう。「種類は同じだね。確かに超えられない溝が有って、今も深く掘られてるけど。」ブロッコリを食べられる人と食べられない人ですか。「それは知らない。」何でしょう。「それはね、天寿を全うするまでに死ぬ奴と、天寿なんて無くて死なない奴の二種類だよ。」死なない奴なんて何処に居ますかね。「うっかり見過ごして

るんだよ。尤も見過ごしてるのは君だけじゃない。見過ごして済むからね。奴らは囚われて、踵から首根っこまでの長さの丸太に縛り付けられ、首を真後ろに折られて括られ、口を思いっ切り開けて、列になって順順に動いて行く。少し先の、毒蛇がぶら下がる下まで来ると、その毒がたらりたらり落ちて、奴らの喉へ流れ込んで、それから小一時間程、腹を陽に晒すと、奴らの体は少しずつ縮んで毛が生えて猿になって、縛られて居た縄を擦り抜けて、森へ逃げ込んで行くんだよ。」じゃ森の猿は、人間の二種類の内の一種類の、死なない奴らの成れの果てですか。「そうだね。」でもその森の猿共にも二種類有って、死ぬ猿は放って置いて良いんでしょうが、死なない猿はまた捕まえて、丸太に縛り付けて、蛇の毒を飲ませて、もっと森の奥へ追い遣らなくちゃいけないでしょう。「そうだね。」その死なない猿共は、それから何になるんですか。（二〇一六年八月十四日）

卵と夢の夢を見ている夢

左の掌に卵を乗せて、凝っと見詰めて三時間経った。ぴったり。ならこの卵は時を計れるのだ。それを左の胸に仕舞い込んで、夢の長さを計りに行く。と

言う事は、これは夢なんだな。しかし夢に、計れる時なんて有ったっけ。足も重いが、もう卵が食い込んで取り出せない胸はもっと重く、足だけ前に進んでも、それに付いて行けない胸が、捩れて仰け反って、何時倒れてもおかしくない。夢に計れる時は無いと今更思い巡らしても、歩き疲れた時は戻らない。いやこれは夢なんだ、夢と分かれば疲れなんて吹き飛ばせる筈。だって夢で疲れるなんて有り得ない。それとも疲れるのなら、これは夢ではないのかも。夢でしか行けない所、澄んだ流れが水音を立てる広い河原と、そこから少し下った所に、森と重なるように石造りの狭い街並みが見え隠れし、強い日差しが雲の日に掛かる加減で絶えず揺れ動いている。そこへ行き着けるなら、これは夢なのだと確かめられる。疲れを払い払い、そこへ行き着けただろうか。広い河原に日差しが揺れて行きつ戻りつしては居ても、川の流れが見当たらない。しかし涸れたのでもないのは、微かな水音で分かる。そこから上るか下るか、どちらへ向かえば、水の流れに行き会えるだろう。水着の若い娘が、下流へと自転車を漕いで、手を振って誘う。見なかった事にしたいかに、それに静かに背を向けて、上流に向かう。河原の石ころはゴツゴツと大きくなるばかりで、水の流れは見付からないまま、河原は果ててしまう。山を覆う森ばかりの端に、森を回り込む細く白い道が見付かれば、そこを進むしかない。回り込めば森から剥がれ、暗い中に白さは失わず、道だけが曲がり拗って行く。曲がり拗るばか

りか、風の回るように回って居ないだろうか。螺旋の道を行き過ぎなかったろうか、と後ろを振り返ると、自転車に跨がって居て、力一杯漕がなければ倒れてしまいそうなら、向かい風に目を潰されそうになりながら、そうするしかなく、いきなり曲がる道を自転車は進んで、すぐ前を歩く、子供を一人産んで間もないと分かる背中の丸みの女の左の小指にハンドルを打ち当てて、女を追い越した。女の鋭く短い声から逃れるようにペダルを強く踏んでも、直に道は終わり、その斜め下に水の音は聞き取れても、砂の傾くばかりで流れは見えそうにない。女の薄赤く腫れた小指の骨の折れ具合を、手に取ってじっくり確かめたくなって、自転車をその砂に埋もれた水音へ向けて投げ捨て、来た道を引き返そうとした。道はなかった。目は、道の形より白を探して動く。その見付からないのは、計れた時を詰め込んで逃げた卵の白か。ではそうして、図らずも卵の外へ出てしまったのでは。卵の外って、夢の外じゃなかったっけ。夢と分かって居ながらの、夢の中の夢の外って何処。（二〇一六年八月十六日）

星に宿る夢

ぼんやり暗いだけなのに、見詰めれば見詰めただけ、その奥行きを何処まで

も測れるような空を指差し、「昨日は、あの星に泊まったよ、ほら、これがそのそれだ。」と、見せて来るのは、広い顔に広い胸の大きな中年の男だが、その手には何もない。そのそれは、私の手に握られて居る。男から盗んだと思われたくないので、黙って別れた。追われるように速く歩いて居ると、「星に願い事が有るんだ、君。」と、すばしっこそうで如何にも仕事熱心そうな、また中年の小柄な男に呼び止められ、握っているそれを掴まれては、逃げられない。「昨晩と同じに、またあの星に泊まるんだろ、頼むよ。」で、替わりに私が願い事をしに星まで行く事にされた。翼もないし、星まで飛び跳ねる足もない。暗い方へ暗い方へ足を向け、闇に紛れて、無い話しにしようとした。広い顔の広い胸の男が、その先に、薄笑いを浮かべ、ずっと胸を反らして待ち構えて居たかに立ち塞がって、私の手に握られたものに目を落としながら、「それはどうしたんだい。」と言った切り、石のように動かなくなった。その後ろは、暗い空よりずっと真っ暗な小さな山で、そこが、宿を取る星に違いなかった。星には辿り着けたらしくても、願い事をするような柄じゃない。呪う事なら出来るだろうか。とは言え、願うと呪うの違いは何。「願うのは、ただ待つだけだけど、呪うには、呪う為の言葉が要るね。」その持ち合わせはない。「握って居るのは何。」手の中は空なのに「それだよ。」その、それだよ、から逃れられる筈はないのに、その逃れられないのを確と心に刻みたいかに、目の前の真っ暗

な山へ真っ直ぐ走った。走っても走っても、足は山に届かず、それが逃れられない事なんだと、心に刻めて少し嬉しいのが恥ずかしい。しかしその恥ずかしさが直に酷く幼く、幼さが全く下らなく思えれば、倒れて眠った。そうして見た夢は、真っ暗な山も微かに煌めいて、それは星の煌めきで、それが全てのものを消し去って何処までも何もない、そんな夢。次の日、願い事を頼んだ小柄な男には、その夢だけは伝えなかった。男は、私の空っぽな手の中のそれだけを持ち帰った。時が経って、その男の家の栄える噂を聞いた。男は、人生の岐路から小さな買い物まで、あれかこれかを決める時には必ず、より何もないのはどちらかを嗅ぎ取って、常にその何もない方を選び取れたんだ。それが星の秘訣だ。そう思うのは私だけでも、きっと正しい。（二〇一六年八月十七日）

電車で変な二人の変な会話が聞こえてしまった夢

「俺は全く使い物にならん。何故なら俺は全く俺じゃないからだ。だから俺は、そんな俺じゃない俺の身に縋って生きて行くしかない。」「身を捨てれば宜しいでしょうに。」「全くだ。身を捨てた俺を、ボロボロになるまで扱き使って、用済みになったらさっさと知らん顔で放り出して見向きもしない所が有ったら、

直ぐにでも押し掛けて行く。そんな所でなら俺は、実用品になって消耗材になって、最後は世の中から全くのゴミとして認められて、晴れて処分場で粉粉にして貰えるんだが。どう遣ったらそこへ行けるか分からない。」「そんな所をちゃっかり見付けようなんて、虫が良過ぎませんか。」「他に思い浮かばん。」「それはお気の毒と言うものです。」「お気の毒かどうかなんて事を知りたいんじゃない。」「じゃ何を知りたいんでしょう。」「知りたい事なんて、知ろうとしたってどうせ知れないし、なら、その知りたい望みの断ち方位は知りたいもんだが、それも知れない。それを知ってる奴が居たにしても、奴にはそれを知らせて何の得もないもんな。」「この世に、知り得ないものなんて有り得ましょうか。」「知り得ないものは誰にも知れないでしょ、黙って諦めるしか有りません、って、お前のその知ったか振りな口なら言いそうだがな。」「いえそんな。知り得ないものこそ、命有る内に、必ず知り尽くしてしまわなければなりません。必ずそれは知り得るのですから。宜しいですか、知り得ないからには知り得るんですよ必ず、隅から隅の見えない隅まで。絶望やら断念やら成熟なんて言う誰かの受け売りの下手な冗談にかまけて、何時までも都合の良い夢に微睡んでぼんやりして居て良い訳は有りません。」「分かってるさ、そんなの初めから。その夢に依り掛かって俺じゃないままでは、俺は使える物になれないって…」「だから何処へ行くも、あなたが誰も、見知らぬ獣だろうと異物だろうと、知り得

なくて知り尽くせるからにはどうでもその知り得る悉くを知り尽くしたなら、それが実用品、つまり、間違いなくそこに有って使い切れる一つの物なんですよ。その物からしたら、どんな粘っこい重たい夢も実は影の一欠片にも及ばない…。おっと乗り換えだ、お先に。」「乗り換えって。また下手な冗談を。」「…にもなってませんって。でもそれって冗談より増しかも、まるで違ったかな、アハ。」ドアが開いて人が動いて、そいつの横顔が目に入る。どうやら喋って居たのは、そいつ一人か。そうに違いない。さて、何の為に電車に乗ったのかなって俺。（二〇一六年八月十八日）

謎の見た謎の夢

そこで赤を纏うのは拙い。赤から始まった禍禍しい思い出の束が辺りを暗くするようではないか。なら青か、その纏うべきは。その青を立ち向かわせるのだ、と企むのは直ぐに見破られて、青の中へ独り突き落とされる。初めは真っ青だが直にその青が沈んで見えなくなって、他の色は、その色とははっきり分かりはしても、目には色とは映らない。ただその奥行きだけは見える。その色にしかないどれとも違う奥行き。その繰り返し一つなさそうな、様様な組み合

わせ。その終わらない組み合わせの窮まる所に、否応なしに行き着いてしまうらしい。で、そこに見える、見える限りの極め付けは何。生きては決して見てはならないもの？死ぬまで見なければ見ないで済んだもの？生まれて来たならば必ず見てしまうしかないもの？そのどれかにしろそのどれか分からない。全く分からないなら、それは謎じゃない。それを独りで謎と言い募っても誰も応えず、ただ黙って放って置かれて、知らぬ間に消されてしまうだけかな。そんな謎な私なら、初めから無かったも同じ。確かに初めから何も無かったなら、全ては明らかに違いない。そうか分かったぞ、極め付けの謎は、全ては明らかであって、この世には何の謎も無い、って。他に分かる事なんて、何一つ無い。でもそれでそう言い切って、にしても、痛みを捨てる身の構えは整ったとは言え、どうやらまだ八つ裂きにはされて居ないのは、どうなのか。の、そのどうなのか、ってどうなのか、なんて言ってられるものか。（二〇一六年八月十九日）

夏の花の夢

「何の支度でしたっけ。」「花見だよ。」「このクソ暑いのに、夏の花の名所っ

て何処ですかね。」海の底に居る。「成る程、海の底なら涼しくて花盛りですねって、珊瑚が枯れてるだけですよ、憂い顔の熱帯魚と。」「じゃ足元だ。」そこを掘ってみると、私達が殺して来た奴らの、大きな鍬で切り取った頭がザクザクと出て来る。海の底に埋めて置いたので腐ってなくて、花と言うより硬く輝いて「すっかり宝石のようですね、やぁ面白い。」「しっ！」しかし聞き取られてしまったか、足元の宝石は崩れて泥になって流れ、こちらもその後を流れて行くしかない。海の底でも見掛けは離れ小島に辿り着いて、凝っとして居て「っ、これは退屈。」しかし「ええぇ？退屈なもんですか！」と叫んだ方の体が、凄い勢いで真上へ吹き飛ぶように浮かび上がって、海面を越え、宙へ舞い上がった。見下ろすと、その波飛沫が丸く拡がって、「やあ、波の花を造ったぞ。」と軽口を叩いたのが拙かったか、逆さに落ちて、恐ろしく硬い波の縁に頭を打ち付けた。「海面が石のように硬いのを発見したのは私だ。」「じゃなくて、君の頭が、海の水より何倍も柔らかいんだよ。」「なら、その頭は溶けて漂って薄紫の霞になって青い海をゆらり棚引き、そこへ白い波の花が咲いて潮風に並べば、夏ならではの花見じゃないですか。」「君は詩人か。ま一杯ぐっと遣れよ。花見なら酒だ。」と言った方が、即興の詩を朗朗と詠った。「詩人はあなただ、だって酔っ払いだもの。」そこへ「もう夏も終わりですよ。」「知ってたさ、そう言う嫌な事を言うのは、したり顔で半歩下がって凝っと側に居る女だって事はな。」

「女は花を見る暇も有りませんから。」「そう畳み掛けて来るのも知ってたさ、少し古風にすれば女の値打ちが上がると思ってやがる。さて帰るとするか。」しかしもう暗くてどちらへ帰れば良いか。まだ詠い足らないらしい詩人が、海の底から掘り出して置いた私達に殺された奴らの頭を、懐からカラカラと掴み出す。それらはすっかり小さくなって幾らでも懐に収まって居て、静まり返った海の上に放られるとその天辺から尖った芽を吹き、それらが初初しく光って、透き通った明るい夏の景色になった。「その花の季節は何時だろう。」と、詩人が女の手を取って誘う。女は仕事着を脱いで踊り出し、みるみる顔の輝きは増す。しかしその眺めは、そっちの半分で、もう半分はすっかり暗く、そこには遣り掛けの仕事やら問題やらが山積みなのは、うんざりする程に分かって居る。「でも遣り掛けの事なんて永久に遣り掛けだから、そこにそうしてずっと有るのさ。」「あら良かったじゃない、頭、海の水より柔らかいんでしょ。」（二〇一六年八月二十日）

人生薔薇色の夢

夢の画面一杯が膚の綺麗な大きな蝦蟇で、腹が裂け腸（はらわた）が流れ出

して居ても、それは明るい色の水のようで、ぽっちゃりと固まりそうでも何の形も見えて来ない。蛙の腸って形がないんだっけ。夢から醒めて、庭で穴を掘って溜まった糞尿の始末をして居ると、穴の脇で大きな蝦蟇がこちらを見上げて居る。そっと捕まえても逃げない。腹を裂いてみると、色色な色と形の詰め合わされた腸が、ゾロゾロと出て来た。それを葉陰に隠れて覗く蛇を見付け、捕まえてその腹も裂いて、蛙の腸を蛇の腹へ押し詰めて塞ぎ、蛇の腸を蛙の腹へ押し詰めて塞いだ。二、三日の内に、蛙は丸丸と肥え太って息苦しそうに、のっそり死んだ。蛇は痩せ細って、そのまま消えたいかに眠るように死んだ。庭に死骸は干涸らびて行ったが、どうやらどちらも、腸だけは生きて動いて居る。放って置く訳にも行かないので、私の腹を裂いて、濁った血で汚れたような自らの青黒い灰色の腸を全て投げ捨て、そこへドクドクと生きて居る蛙と蛇の腸を纏めて詰め込んで傷口を塞いだ。それからは、毛むくじゃらの生きた獣から刺刺した小さな虫まで、何でもそのまま食えるようになった。良く働く腸は、腹痛一つ起こさない。人生の善し悪しは、腸の出来不出来で決まると言った人が居たが、腑に落ちた。青黒い灰色だった私の人生は、今や薔薇色に輝いて居るではないか。その薔薇の花を食い散らかして、お花畑でお気楽に生きて居られる新種の生き物まで発見したぞ。捕まえようにも、すばしっこい。薔薇色に輝いて生きるにしても、上には上が有るもんだな。しかしどうやらそいつ

は、私の腹から出して捨てた、青黒い灰色だった腸の、活き活きと生き延びて居る姿に違いない。何で？の声など聞こえそうになく、そいつは薔薇色の糞尿を高高と撒き散らかして宙返り。(二〇一六年八月二十一日)

死んだ夢

　烏が七、八羽、濡れて青黒い灰色の道を塞ぐ。道の濡れるのは嫌われて誰も通らないと知っているからで、羽を伸ばしたり畳んだりして寛いで居る。そこへ砂が撒かれる。砂に宿った悪い菌のせいに違いない。暫くして烏達は目を向き、砂が静かに酷く長く延ばされる細く掠れる咳を競い合って、道の脇の狭い土手を転げ落ちる。下は雪で、粉雪に塗れて身悶えする烏達に導かれるように急に高い夏の陽が差し、塗された雪を溶かして、黒い羽を波打つ金色に輝かせた。その金の波に繰り返し殴り倒され嬲られるようにして、烏の身は見る見る痩せて、折れそうに項垂れた首を一所に寄り添わせ、直に動くのを已めた。それを一羽だけ、咳もせず隆隆と胸を反らして、道の端から眺め下ろして居る烏が、くるりとこちらを振り向いて、「で、死ぬのは怖かったかね？」誰に尋ねて居るのだろう。「君だよ。」「死ぬってなったら、笑いが込み上げて来て、楽しく

て仕方なかった。時が来て死ぬより先に、笑い死ぬんじゃないかって冷や冷やした位さ。いやきっと、そのまま笑い死んだんだ。だって死んだ今もムフフ、笑いが止まらなくてアハハ。で顔を上げると、顔なんて有ったっけ。有った事にして、有った事にしても有りそうにないなら、吹いて来た風の端を顔のような凹凸に硬くして、すると見えて来たのは、その風に靡く草原の草の一本一本が、楽しそうに死んでる死んでる、あれらは皆、死んだ一人一人の笑いさざめく姿だったんだ。でもそう分かったんじゃ、風に付いて、そこを抜けるしかない。夜で、数知れず沸き立つ声は、その死んだ楽しさを果てもなく語り合って、その楽しさを伝える声が揃えば、揃っただけ声は交わって消えて行く。でも中に聞き慣れない声が二つ有ってね、それは酷く違う。違い過ぎて揃う筈がないばかりに、二つは他の声とはぐれ、揃わない声を交わすしかない。揃わないでは何時までも消えられない。それでもう夜ではなくなって、とは言え、夜は明けないので、別れ別れに消えるしかない。ってそれ、死んだよね、死んだ楽しさなんて取っ払われて、どっちもどっちだから、どっちもアハハ。明けない夜の夜でもない所で、消えた二つの声は交わって、その絡み合い縺れ合って火でも吹きそうに明るい高笑いが届けば、死ぬのは、ただ楽しいばかりじゃない、それはもっと、もっと、暑い盛りに雪の降り已まないような、様様な形の雪片が、互いの冷たさを夏の日差しから守るため、命懸けで宙を埋め尽くしたいば

かりに、その小さな舞い砕ける影に凍る息を吹き掛け吹き掛け限りなく数を増やさずには居れないような、終わりのない笑いの窮まって、夜でもない果てまで伸び上がる、プルプル震える、だって独りで死ぬって、独りじゃなく死ぬって事だから。」「それは君ね、死んでないんだよ。」「けっ、ぷんぷん匂う嘘だね。」「嘘で構わないさ、嘘も生きて死ぬからね。死んでないって何が何だっけ？」「間違えた。嘘じゃない。嘘は独りじゃ吐けないもの。独りじゃなく死ぬには、独りで死なないとね。楽しいも楽しくないも上っ面だ。夏の陽に逆ってしか心のままに振る舞えないかに、鳥が七、八羽、もっと暑い南の空へ飛んで行くのかな。渡り鳥を気取ろうなんてあいつらだけは、何が有ろうと暗い目をして生きてやがる。死ぬ楽しさを分かろうとしないばかりに頑なに。って、いやきっとそんな訳ないだろ、あれ？どうかなって、お座なりにそれを見送って、ただ夏のギラギラした空ばかりなら、死んでないものなんて一つもない。何一つ笑えるものがないって笑い転げて、そのそれは、行方を眩まし一羽はぐれた奴は置き去りに、帰って来ない七、八羽の。例えばだけど、鳥…」「で、死ぬのは怖かったかね？」「だからそれ、忘れたって言ったよね。」（二〇一六年八月二十二日）

虹へと天翔る夢

　大きな家だったらしい。悪い虫が付かないかと親も気を揉み始めた頃、その手塩に掛けた娘が、糞をしないと言い出し、誰がどう宥めても頑として糞をしなくなって、それを肘鉄を食らわされた悪い虫らが悪い噂でも立てたか、親が心痛で倒れたか、それに乗じて強欲な親戚か遣り手の使用人が乗っ取りを企てたか、もう何も分からないが、兎も角、その娘の糞をしないせいで、その名の有る家は絶えた。それはまだ、ついこの間の事で、その朽ち掛けた家の内外を彷徨いて、何か手掛かりでもと棒で土を引っ掻いて居ると、固まって黒く干涸らびた糞の塊を見付け、舐めれば娘の若い味が薫らって、それを持って全国を廻ってでも、その糞を放（ひ）った娘の消息を辿ろうと決めた。娘は直ぐに見付かった。山一つ越えた海沿いの新しく開けた町で、裾を絡げて尻を出し、亀の首が甲羅の下から出たり入ったりするかに、つるりとした形の整った糞を、その穴から忙しく出し入れさせて走り回って居る。似たものに覚えが有る。緑の黒髪の凄艶な美女が、肌に染み一つない丸く張った尻をゆらゆらと掲げ、蛇のように長い糞を音曲に合わせて巧みに拗らせ宙を舞うかに踊らせて客を楽しませる。それは少しも切れたりせずに、最後はするりと女の尻の穴に収まって、拍手を求めるかに、糞の滓一つ着いていない形の整った尻の穴は、愛嬌たっぷ

りに窄んだり開いたり。それは何処か技巧に走り過ぎて嫌みな感じがし、案の定、次第に飽きられた。しかしこの娘は化粧っ気もないし、まるで違う。「その糞は出さないんですか。」「出しませんとも。」「ずっと？」しかし娘は倒れ込んで苦しがる。男共が取り囲む。「百日出てないぜ。」それがとうとう出るらしい。男の群れに取り囲まれて揉みくちゃにされ、振り翳される拳の下をやっと潜り抜けると、男共は娘の放った蛇のように長い一本糞を、血塗れで奪い合って居る。糞はするすると男の手を滑って渡った。逃げた女は見向きもされない。もう姿は見えないが、懐の干涸らびた糞の匂いを嗅げば、後を追える。浜辺で娘は、また尻から新しい亀の頭のような糞を出し入れさせて、汚い指の漁師の子供達に捕らえられ囃され罵られ蹴り回されていた。子供達から娘を買うと、娘の背に乗って海の底へ向かった。竜宮城の看板を探して見付からない替わりに、尻を掲げて放り掛けの糞を出し入れさせる年頃の娘が岩陰に幾らでも隠れて居て、一度見付かると彼女達は却って嬉しそうに頬を赤らめ、岩の上に四つん這いで尻を真上に反らし、それぞれの長い糞の踊り回るのを誇るかのよう。どうやら全ての娘を見付け出したらしく、娘達は縦に何列かに並んで、糞の太さと艶としなやかさを競って居る。真上から見下ろすならさぞ絶景だろうと、陽の差して来る高い水面を見上げると、海の水が轟轟と大きく二つに割れ、長い糞らの舞う海の底だった所は、水が捌けて陸になり、陽は並んだ尻に直に差した。

水圧から解き放たれたって事か、そこから糞が一斉に噴き出して昇って行く。腹は平気なのかと気を揉ませる程、果て知れず波打つ一本糞らは愈愈勢いを増して途絶えない。それらは遥か天に舞い昇ったまま、そこに留まり、相集って互いの高さを寿ぎ歓び真っ直ぐ縦に長い虹を描く。それを見て取ると、ずっと飲まず食わずで途轍もなく腹の空いているのに気付いて、食えるのはその虹になった糞の他にないと思い当たれば、気流に乗る翼を生やしたかに私の体は、糞と突風の濡れ交わる匂いを追って、その匂いに激しく痺れながらも、軽やかに宙を駆ける。しかしどうやら私はもう一人居て、そちらは力なく倒れ込み、竜宮城の元警備員に見付かって、力任せに殴られ蹴られ、体はドロドロになった。元警備員はそれで右脚と左腕が捥げ、石になった。私だけが魚達に食われ、様様な色の糞になって放り出され、潮を流れる。そうして輝く空を遥かに見上げると、虹は、午を過ぎた濃い空の青に挑むように、色鮮やかさに深みを加え、今にも天を断ち切るようではないか。その虹へ鋭く身を捻って飛び込んでは溺れ掛け、真っ金金な私は、深く濃い音をグリグリうねらせ弾かせ喉へ流れ込む虹の糞らの、その煌めく美味に舌鼓を打ち、七色の交わる丸く転げ返るかのその香りに、息せき切って仰け反って時など捨てて酔い痴れる。その姿は筋骨隆隆の若者で、私はもう、その眩い独り切りに違いなかった。（二〇一六年八月二十三日）

美女の見たその運命の夢

　誇れるでもないが、薄汚くおぞましい情欲に取り憑かれた男共の分類に従えば、私は、何処を探しても見付からない美女で、若い盛りなのだった。とは言え、美人コンテストやらで実証した訳ではない。とは言え、その男だけはそう信じて、私を手に入れる為なら、私を手に入れる以外の事は全て遣り尽くし、それでどうなったと言うと、さっぱり分からない。何故ならその男は、その遣り尽くした事にすっかり取り囲まれ、誰も近寄れなくなったから。遠目に分かるのは、私のせいで結果そうなってしまった事だけ。そんな事より、舟で速い川を下って居る。河口が近付き、海の水がうねりながら入って来てあちこちで渦を巻く。川では毎日長い髪を洗った。真水で洗えるのは今日までかなと、水に飛び込んで髪を洗う。それでも生温い潮水に髪はたっぷり浸された。舟の腹から小さな舟が出て来て、それに掴まって、川岸に上がった。「よおぉぉねえちゃん、何処へ行くんかぃ？」「こっちからあっち。」「俺もこっちからあっちだ、一緒に行こうぜぃ。でも臭いぞ、ねえちゃんの髪。」男の体の方が百倍臭い、私の鼻では。しかしそれは言わないで置く。その男は、大きな舟を背に担

ぎ、顔を上げて私に話し掛けない限り、転覆した舟が独りでに陸を進むようにしか見えない。並んで道のない所を進んだ。道はゴツゴツして舟を引き摺れない。道のない所は何処も草が生え、草はツルツル滑る。「人生は廻り道。廻り道廻り道と唱えて世を渡れば、どうにか行ける。それでどうにも行けなくなったら黙るだけ。で、黙ってる奴なんて見た事ない。あんた、黙ってるね。身一つで、廻り道してまで運ばなければならない何ものも持ち合わせない。でもそんな奴、幾らでも見掛ける。身一つで、幾ら廻り道したところで何の得るものもないのに、きっと廻り道廻り道と唱えるのを已めるのが嫌で、廻り続けるアホ共。あんたは違うのかな。」私「誰？あれ。」舟を担ぐ男「馬鹿を相手のさも利口者、またはその逆。」次の川岸へ出た。流れはもっと速く、それに心を弾ませて二人はそれぞれの舟で川を下った。激流や渦を避けては、男は水と交わって体を洗う。臭みはみるみる抜ける。私は臭い髪を洗わなかった。男との即かず離れずの関係が変わるのが嫌だったので。潮の香りがして河口が近付いて来た。川の流れの鎮まる替わりに、空は真っ青でも、海は酷く荒れてあちこちで黒黒と渦を巻く。私は髪の臭さを咎められるかに髪を引き摺られて水に落ち、髪はどんどん重くなって、体は海の底へ運ばれた。「なあぁねえちゃん、あれ？ぉ居なくなっちまいやがった。」男は、真っ直ぐ自らの舟で荒海へ乗り出した。その向かう水平線に消えれば、生きて再び彼の姿を目にする事はないだろ

う。海の底からでも、男の頭から、髪の臭いねえちゃんの思い出がすっかり消えて無くなるのが分かった。長い髪は海の底を何処までも伸び続ける。あの「何処へ行くんかい？」の呼び声は、陸に舟を揚げては川から川を廻って下る者らの、軽い慣わしだったんだな。（二〇一六年八月二十四日）

江戸時代で愚痴った夢

代代首斬りの家に生まれてる。男子は一人で嫌でも後を継ぐ。机を並べる友は塾が終わると皆道場で剣術の腕を磨く。こっちは真っ直ぐ家へ帰って父親と二人で、束ねた藁を人の首に見立てて首斬りの稽古。道場で幾ら免許皆伝だろうと居合抜きの名人だろうと、首斬りには余り役立たない。別の技なんだな。戦乱の世なら次から次へ需要が有って、実地で腕を磨けるんだろうけど、泰平の世じゃ、そんな腕の磨き方は叶わない。人の首を刎ねた事の有る人間なんてこの辺りじゃ父しか居ない。若い頃から手取り足取り教わってやっと刑場デビュー出来る。並大抵じゃない。例えば磔なんて、すっかり観念した罪人を木に括り付けるのと槍の突き方をモノにすれば直に出来そうだ。火炙りなんて、火の粉が飛んで火事にならないよう風を読むのがきっと一番の仕事だろうな。あ

ーあ、どうせなら磔か火炙りの家に生まれたかったな、そしたら仲間と剣の腕も競えたかな。ものの本ではその昔、かの源氏の頭領は、長年争った憎っくき敵将を、一思いに斬ったんじゃ積年の恨みが晴らせん、と刃をボロボロにした刀で鋸を引くようにじわりじわりと、その首を落としたんだってよ。総大将以下、居並ぶ諸将、手柄を上げた御家来衆共共打ち揃ってそれを見物さる訳だ。さぞかし場は華やいで、血が噴き滴る度に、朗らかな笑いが湧き起こったろう。それでもし、全身血塗れの殆ど血の塊でも死ねそうで死ねない膝を屈してグラグラ震える敵将の哀れっぽい呻き声でも洩れようなら、ほろ酔い機嫌で堪らず皆跳ねるように腰を上げ、もう上も下も、飲めや歌えで踊り出してるよな。美し過ぎる！　夢の情景そのものじゃないか。今はどうだ、天地がひっくり返ろうと御成なんてない、上役方だって絶対に顔を見せない。窮屈な御時世だ。ただ首が飛ぶのを見届ける係りが、怖い顔で睨んでるだけ。奴の仕事は、首斬り役人が何かヘマをやらかせば、それを上へ上げる位さ、それで禄を食んでやがるんだから全く禄でもねえ。で後、誰が来るかって近郷の、人の死ぬのを見たくてウズウズしてる奴らで、目当ては首の飛びっぷりと骸の崩れ様な程で、手配の役人なんて黒子さ。技術の格段の進歩で、刀の切れ味は無意味に凄くて、いや無意味そのものかも知れん、しかもそれがやたらと喧伝されて海を越えちまったって日本刀の評判は。エイッて振り下ろせば何処の何奴が遣

ろうと首がコロリ転がるとでも思ってやがる。抜き身に触れた事もない奴らだ、芝居小屋の生首じゃないんだよ、細腕のいんちき役者にコロリと騙されやがって。こっちは幼い頃から一筋に腕を磨いて、やっとここに立ってんだ。でも偶に体が怠くて少しでも手元が狂って、首の皮一枚繋がって、落ちない逆さの首が首根っこから右肩寄りに垂れ下がって鎖骨の下をそろりそろり頬擦りしながら振り子みたいにプラプラ振れてってみろよ。「首の皮一枚で助かった」なんて事言うのが居るけどな、首の皮一枚じゃ、どう間違ったって死んでんだろ、けど、それで済むかって済む筈ない。何だ御家中には首一つ真面に刎ねられる侍も居られぬかって、お家の恥にされて、それで人手不足なら厳重注意だけど、人が余ってて巧いのが何人も揃ってようなら、こっちが打ち首だよ、然も同業仲間なんで、きっと余所の首斬りの家のまだ人の首を斬った事のない跡取り息子の練習台にされちまうわ、何時の間にやら闇に葬られましたって仕儀だ。毎回、命懸けなんだよ、一遍こっちへ来て遣ってみろってんだ。（二〇一六年八月二十五日）

丸囓りした林檎が芯だけになった夢

「裸同然がエロいんですよ。」「だよね。」「丸裸ってのも、見ようによってはエロいですよ。」「そうそう。」「でもその裸か裸同然がぴっちり布に覆われ、その脱がされるのもまるで思い描けずに、それで、どんな裸よりエロく見えたりなら、そのエロさって有りませんよ。」「そうそう。」「だよね。」何万遍同じ話しを聞かされるんだろう。それに相槌打ってりゃ済むんだからお気楽な商売だけど、いい加減、愛想笑いも疲れたわ。「いや、その何万遍の中から、世紀の大発見が大発見されるんだよ。」そんな薄っぺらいもんなの、世紀の大発見。そのもっと先に有る大発見の大発見されるの見たいわ。「いやそれは、古今東西の研究者にして冒険者達も同じ考えで、エロの奥へと身を捨てて踏み込んで行ったさ。でもそうして稀に見付かる大発見は、元に戻った足元のエロにしかなかったんだ。」「そうそう。」「で君、何してんの？」何って、林檎を丸囓りしてて芯だけになったから、汁をしゃぶってるのよ。あんた初めっからずっと目の前で見てたじゃない。「君に懸かったら、万有引力の林檎も顔色なしだ。」「そんな林檎じゃ学会に顔が利かない。」「物理学者に合わせる顔がない。」「発見者の林檎の顔を潰すだけだ。」何の顔尽くし？「顔が無くなりゃ、のっぺらぼうで、のっぺらぼうの林檎をどう裸に出来ましょうかね、アハハ。」「おっと難題だぞ、そのエロを掘り進めば大発見を大発見かな、ムフフ。」何がアハハにムフフなの。おかしいのは、あんたらの頭でしょ、ジュルジュル、ベロリ。ベロ

ベロ、ジュルジュルル。「…ぁそんな事より、林檎ってまだ有るの？」ええ、お金払ってよ。「顔の無い、のっぺらぼうのだよ。」ええ、お金払えばね。「芯までしゃぶり尽くす積もりか。」チュパチュパ、ズボズボ。「溶けてるよ。」ジュルリッ。「それ、ほんとに初めっから林檎だったっけ。」（二〇一六年八月二十六日）

走る夢

窓辺に寄り添って待っている。いや違う。窓辺に寄り添う人をずっと待たせたまま、そこへの道筋を知れないなら、闇雲に真っ直ぐ進む。どっちだろう。首と両腕と両脚を胴から切り離してバラバラにすれば分かるにしろ、それは独りでは出来ない。ずっと暗い庭に一本残った木には、金色の実が生る。終日陽の差さないで金の輝きを誇れても、もし陽を受ければ見窄らしく陰気な白い実かも知れない。ただ一際高く突き上がる枝の先に生る実は、実そっくりに体を丸めた金色の鳥で、それだけは陽を受ければ更に輝きを増す筈。何故そう知って居る、それを盗んだから。いや違う。盗まれたそれを取り返したからだ。とは言えそれは、木に登ってやっと、木の実を捥ぐように掴んで懐に収めて直ぐ、

何処かへ飛んで行ってしまった。なら何処までも後を追うしかない。そうして追って来る者を、窓辺に寄り添って居て待っているのだ。何故ならそれは、鳥は金の木の実そっくりに懐に収まって居て、それはただ預かって居るだけのものだから。そのまま西日を浴びて居て、陰の方の半身は溶けて消えたかに冷たく動かず、それを隠そうと、陽の当たる足首を紐で縛って、そっと身を捩る。脚を泥で汚した息を切らす者が、飛び付いて来る。「ずっとそうして何年も縛られて居たんだね、助けに来たよ。」と言われれば独りでに紐は解け、二人は抱き合うまま窓から転げ落ち、懐の鳥は翼を暗い金色に輝かせて、陽の長く延びる方の陰へ低く飛んで見えなくなった。ずっと窓の下の水溜まりに漬かって気を失って居る二人の目を醒まさせて、「浮き上がりたいんだろ、なら、この体をバラバラにしなくちゃね、そうしてよ。」と執濃く言い寄るのは誰。起き上がって二人掛かりで、その首と両腕と両脚を胴から捥ぐと、二人は、自らが誰なのか、恐ろしくはっきり分かる一人になって、金の鳥の失われた姿を振り返り様、矢のような勢いで走り出す。逞しい二本の脚と二本の腕を思い切り振り立てて。何処へ、翼なしにどう鳥を追えよう。しかし手足の指から血が噴いても、追う身一つは止まらない。速さが増せば少しでも鳥に近付けるかに。そう有るしかない自らをはっきりと、その有るままに分かって、それでもう何を加えるも除けるもない。（二〇一六年八月二十七日）

夏草の夢

金の鳥は飛んで行ってしまった。山の向こうへなら、その山を退けるしかない。周りを山に囲まれ、どの山を退ければ良いか分からないで居る内に、足元に穴が掘られ、その縁から覗き下ろすと、お椀型の、山一つ逆様に放り込める大きさで、その深い底は、水が溜まるどころか、乾き果てて火でも噴きそうに細かく震えて見える。その形にぴったり収まる山はどれだろう、ぐるりと見回すと、それらしい山に目は行くが何処か違う。山の形を諦めれば、ずるずると穴を滑り落ち、その熱い底に嵌まって、そこで身を蛸のように柔らかく拗らせると、尖って居た底の形が少しずつ歪に捩れ、その捩れた形に身がすっかり嵌まり込んで動きが取れない。歪んで尖った底の底に頭が逆さに突き刺さって、目はすっかり闇に塞がれた。いや、その闇の奥に明るさを探せば、却って穴中が見渡せる。底へ向かって幾つも裸の体が滑り降りて来る。私の逆さの体に当たると、どれも冷たく屍で、それらが次次に折り重なり、穴の底は白く埋まって行く。最後に降りて来た男だけは、浅黒い肌からシューシュー熱を放ち、丸く見開いた赤い両目をギラつかせ、底へ届いても球のように跳ねた。それに飽

きたか、白い屍の腕を一つ取り、そののっぺりした姿を抜き上げてぴたりと抱き、腰を激しく振って、それが溶けて消えるまでぶるぶると犯した。そうして次次に屍と交わってそれらを消して行くのは、つまりはその一番下で動けずに居る私の生きた体が目当てなのだ、と思うと、逆さに突き刺さった頭が抜け、その屍の匂いの染み付いた男と裸で仁王立ちで向き合う。筈が、向き合うのは女で、青白い肌の今にも頽れそうな身は、一度目を離したら見失いそうに細い。それを力尽くで払い除け、勢い良く一気に穴を這い上って大きく息を吐くと、その山だけが、大きな一塊の風になったその息に靡いて崩れ、その見晴らされる向こうに遠ざかる金の鳥を見付ける、筈が、ただ一筋の細身の夏草が萎れて下を向くばかり。それはしかし目を汚す金の鳥などより、どれ程目に焼き付けて置きたいものだったろう。（二〇一六年八月二十八日）

独り寝の夢

独りで寝なければならない。それが全てだった。しかしどう見回しても独りではないか。添い寝してやろうなんて影もない。独りで寝るのに何の障りがある。いや試すまでもない。何の影も見付からなくても、影でない悉くが、独り

寝を妨げに来るだろうに。どう遣って、それらとこの身を隔てられるか。その助けになるものは一つも見当たらず、何処も彼処も、これ見よがしに添い寝の構えで凝っと息を潜めるよう。なら、見渡せない向こうに、私を独り寝へと導く、或いはそう強いるのかも知れない、そうした何かがなければ、どうにもならない。それは必ず有る。それが無いなら寝るのに独りも何もない。とまで考え及んで先が続かず身を横たえ、草原と砂浜の境辺りで、うつらうつらしてしまう。砂浜は分かるが何故草原？いや違う、草原は分かるが何故砂浜？いや違う、何故草原と砂浜の境か。そこへ辿り着きそこで倒れたのは何故？それが分からないでは始まらない。なら何時まで経っても始まらないのだ、とゴロゴロと砂浜を怠い眠気を引き摺って、波打ち際へと身は転げ、海に向けた背に冷たく長い波を受ける。潮は満ちるようなのに、横向きに寝る高い方の肩を、波は限り限り越えようとしない。更に潮は寄せても、波を引かせる力が海の中に有るなら、それが私を独りにするのでは。と思えてしまえば、波は肩を越え、覆い被さった水に攫われる身は、長い波に流されて、元の草原と砂浜の境へ打ち上げられて居る。で。何も分からないではないか。海の中に、波に攫われる誰かを独り寝かせるものなど有って当たり前、誰でもただ海を暗い目で眺めれば、そんなものは嫌でも見せ付けられる。そうして海から顔を背け、俯せで草の匂いを嗅げば、ほっそりした影が軽い足取りで遣って来て、声にならない声を掛

けて来る。つまりは影は声を掛けるままの姿で、その届かない声に弄ばれるかに寄せる波が乱れ捩れても、私がそれを黙って受け容れれば、それに包まれるように、身は独り寝の冷たさに浸り切れた。そのための草原と砂浜の境なのだと分かった。波で冷えた背を潮風に晒し、思い切り草の匂いを胸に入れて息を塞げば、それは見ず知らずでも真っ直ぐ届く、命を一つ孕んだようで、ただそうして黙り込むままな事が、深く眠る事でもあるらしい。（二〇一六年八月二十九日）

能なしの見た底なしの夢

　ここは底らしい。芥が様様落ちて来て留まり、クルクル回ったり傾いて揺れたりして、昇る機会を窺っている。昇れる筈はない、と決まってても居ないが、上を見るせいで心は荒む。しかし心を荒ませるままに居るのも、沈んだ心の己に潰されるよりは増し、底に留まる限りは。それが、その荒んだ心のまま昇って行けでもしたら、底に留まるより却って危うい。いや、静かな心を保ってさえ、何処へ昇ろうと危うい。心を役に立たせた事もないのに心に望みを託す愚かさ。しかしその愚かなままに居るのも、沈んだ心の己に潰されるよりは増し。

心を荒ませ愚かで居るのは、大いに己を守る役に立ってる筈。しかし己など守って何になろう。底まで折角落ちたなら、またとない己の捨て場所に凝っと留まれるよう、身を低く構えよう。心を無くし、底に留まるしかなく過ごすなら、難しい事はない。遣る事は幾らでも見付かる。「そう彼は言って、こちらの差し伸べる手を見下して、知らん顔って訳です。」「心の使い方を良く分かってるね。ひょっとして進んで底へ降りたかな。」「そんな訳もないでしょうが、端からなら、そうも見えそうです。」「でもね。進んでにしろ、成り行きにしろ、降りられる底なんて実は有りゃしないんだ。」別に、そう思いたきゃそれで構わんが、底へ降りる事を知らない御仁の仰りようだ。とは言え、まあ外れても居ない。底へ降りたようで、まだ底はその下に覗けるって事なら。でもその、底を覗けばまた底が有って、そこへ行きたきゃ行けて、それでそこは、全くの底なんだけどな。しかしそれは黙って、底に留まって独りで分かってりゃ良いだけの事で。「そう言った切り、彼の行方は知れません。」「なぁに、分かったように言ってるが、そこが底か底でないか分からなくなって、それでそこにはもう留まれないで、またそこから覗ける底へ降りたんだろうよ。」「でしょうかね？でもそれってもう、下へじゃなくて、殆ど横へ向かって降りてませんか。それか、下へでも横へでも構わないようにしか降りられないとか。それはもう降りてるかも怪しいような。それって、そこが全くの底の底、と言うより、先程仰

った通りに、実は底なんて何処にも有りゃしないって事じゃ。沈もうが浮かぼうが、芥は芥で。」「そう言う君じゃないのか、心を無くしてそこで底と戯れて遊んでるのは。」「まさか、私はただ芥を芥と横目で眺めて凝っとして居られて、他には何の能も有りません。」（二〇一六年八月三十日）

服を着た女の夢

目障りなのでとっとと消えろと言われたせいで、すんなり死ねてたのに立て続けに死に損なった夢から醒めると、その寝覚めに吸った息からして「全ての女は疵物」と言う匂いがする。窓を開け、人の流れる朝の景色を眺めると、世の中が「全ての女は疵物」で覆い尽くされている。これで手で幾ら下を弄っても幾ら凝っと見詰めても、自らが男か女か分からずに、これでは迂闊に外へ出られないなと、三日掛けて端切れを継ぎ合わせして、頭から被れる石に見える着ぐるみを拵えた。そうしてやっと仕事に行くと、周りは下半身を剥き出した男ばかりで、では女は何処へ行ってしまったろうと、三年掛けてやっと見付けたのは、街から大分離れた山を削ったゴミの埋め立て場で、そこでは、疵物の素っ裸の女達がトラックに山積みにされて来て、生きたまま埋められていた。早速家へ

戻り、全く男でしか生きて行けないのだ、よく石の着ぐるみのままで見逃されて来たものだと、一月掛けて下半身を剥き出すままの男の着ぐるみを拵え、それを着て仕事に出た。下半身を剥き出してキビキビと働く男達の中に、一人普通に服を着た者が紛れて居る。背はほぼ男並みでも肩は狭くなだらかで、腕と脚はほっそりしていて、胸は余りないように見える。「あなたは、あなたは…」でも、女ですか、なんて聞いては拙いだろうと後が続かない。「姿がないね、声はするけど。」と、女の朗らかな高い声を残し、軽い足取りで、その姿は次の仕事へ行ってしまった。帰り、隣のビルの鏡張りの太い柱に自らの姿を映すと、それは、何だか分からないぶかぶかした丸っこい着ぐるみでしかなく、とても下半身剥き出しの男には見えない。これでよく見逃されて来たものだと、早速家へ戻って、三月掛けて気合いを入れて、剥き出しの下半身がしっかり目立つ引き締まった男の着ぐるみを拵え直し、仕事へ出た。そうしてその一人普通に服を着た者を探しては、それとなく近付いて、勿論、女ですか、などとは聞かなくて、色色話し掛けてみても、まるで聞く耳を持って貰えず、極偶に「姿がないなら声もない。」と女の高い声で言われれば、何か伝わったらしいと独りで嬉しがるしかないような始末。こんなでは埒が明かない。しかし私の仕事は何。下半身剥き出しの男に声を掛けて、答えて貰った例しはない。「声はしてても姿がないぞ。」と男の声で言われた事もない。何故か。着ぐるみのせい

だ。それで私は、三年以上誰からもここに居ると知られもせずに、ここに居たとは。話し掛ける姿を見せないでは、聞く耳も持たれる筈はない。で着ぐるみを脱ぐと、直ぐに下半身剥き出しの男達に取り囲まれ、「何だこれ。」「虫だろ。」「お前これが虫に見えるか、これは息だけしてる木乃伊だ。」「お前これが木乃伊に見えるか。やっぱりこれは、大きく成り過ぎて持て余した身を木乃伊に見せ掛ける虫だ。」「何れにせよ、燃料には持って来いさ。」と燃やされて煙になれば、目指そうと思いを馳せられるのは、疵物の女を埋める山でしかなく、そこで湿っぽく煙りながら、疵物の素っ裸の女達がトラックで運ばれて来るのを、来る日も来る日も眺めるしか楽しみはなく、十年経って、その日も荷台に山盛りに裸の女の積まれて来る中に一人普通に服を着た姿を見た。「姿はないのに……」と女の声を弾ませたあの女なのか。他の女はどれも汗ばんで肌艶も良く荒い息遣いなのに、彼女だけはもう屍で、顔も随分傷んで居る。それからは何日か置きに、普通に服を着た女の屍が必ず一体、荷に紛れて来る。どの顔も傷んでは居ても、同じように十年前の彼女の面影を見て取れて、心は乱される。そんの内に煙の私は、埃と混じって更に水を吸って殆ど土気色の灰と固まり、そこから剥がれて落ち葉の欠片そっくりに、水溜まりに浮かんだ。疵物の素っ裸の女共が、陽を浴びる脂ぎった肌を輝かせ、その水溜まりをすっかり囲んで、一斉に立ち小便の筋を揃える。忽ち水溜まりには黄色い泡が溢れ、それに乗って

落ち葉を気取って風に戦ぐのが嬉しかった。「嬉しいだけじゃ嬉しいだけで、どうともならんわ。」「ならどうとかせんと。」「どうともならんわ！」と、何処へも収まりたくなさそうな強く掠れた声。止まらない小便女共の高笑い。その濡れた下腹の、捨てられた疵物の魚の肉の腐り掛けの、それぞれに味の違う匂い。（二〇一六年八月三十一日）

地獄を希望する夢

「この世とは何処でしょう。」地獄へ今直ぐ墜ちろと呪っても呪っても呪っても、ビクともせずに涼しい顔して当たり前に息して何事もなく生きて居やがる奴らの住む所。「あの世とは何処でしょう。」そんな奴らが皆天国へ向かって、俺だけが永遠に地獄に落ちてのたうち回る所。「何でこんな夢を見始めてしまったんでしょう。」それだよ、嫌なのに誘われて飲みに行って上司の悪口が止まらなくなってそれはもう詰まらん上司じゃなく俺がこれまで呪い殺そうとして来た奴らの顔が次次に浮かぶその悪口を大声で蜿蜒まくし立ててたら、偶偶隣の大卒の若いのが、涼しい顔して当たり前に息しながら今読んでる神曲の地獄篇に拠ればとかトロい事抜かしやがるんで行き成り奴の首締めて後一・四秒

有れば必ず喉笛を捻り潰せたんだが、偶偶反対の隣のアームレスリング遣ってる馬鹿力が割って入って留置場に入らずに済んで家に帰ってて水飲んで寝ちまってたって訳だな。「それは分かり易い、でもどっか間違ってますよね、殺人未遂だし喉に痕残ったし、一・四秒なんて精確ぶってるけど実は大雑把で、誤差ならイッちゃってる訳で。」間違いなんて、何処が間違いか分かる筈ないから間違いなんだ、それを間違いがどうとか言い出すのは、いい加減、話しを切りにしたいんだろ。「や、そんな積もりじゃ。じゃお尋ねします。この世で呪い殺そうとした奴らを何で天国へ行かせてしまうんですか。」決まってるさ、奴らを全て俺の前から消して、地獄を俺だけのものにしたいからだ。「奴らが地獄で苦しむのを眺めて、それを嗤って遣ったら良いでしょうに。そうすればあなたの地獄の苦しみも少しは和らぎましょう。」何で地獄へ墜ちてまで、あの薄汚い奴らと係わらなくちゃならないんだ。「だって地獄だから。そうやってあなたは地獄の苦しみを苦しみ抜くんですよ。奴らなしに、どうやってあなたを苦しめられるでしょう。」それじゃこの世と変わらないぞ。地獄に望みはないのか。「アハハハ面白い事、言いますね。」俺だけが地獄へ墜ちて地獄の苦しみを独り占めすれば、奴らを呪わずに済むものを。それが出来ないなら、この世がもう地獄で、態態地獄へ墜ちるまでもない。「奴らが皆地獄へ墜ちて地獄の凡ゆる苦しみに責め苛まれても、尚それを呪わずに済まない苦しみを、あなた

は苦しみ続けるんですよ。」ん、でも、ならこの世と少し違うぞ。呪った甲斐が有ったってもんだろ。「ですよね、あなたはこの世では味わえない、呪った甲斐の有る呪いに呪われる苦しみを果てしなく苦しみ抜けるんですよ。そんな苦しみだけは苦しみたくなかったって、先のない地獄の己を呪って呪って苦しみ続けて。」うん、偶には嬉しくなるような事、言ってくれるじゃないか、大卒じゃないよなひょっとして、ん？どっちだ、大卒か。（二〇一六年九月三日）

愛されなければ誰も働いて居ないかも知れない夢

　そんなで、今の仕事に就けたんですか。「じゃなくて、上から言われて遣るだけですけどね。」その話しはどうしてこっちへ来ないんでしょう。「だって、働こうともしないあなたの上には、晴れなら青空、降れば雨空しかないでしょうから。」ん？あなたの上にはそんな空はないと。「私の上には上が有るだけ、そのまた上には上で、また上。」そうか、それで私とこうして時間を潰して、それを報告するだけで、上から甘いものが降って来るなら、私らのお蔭で遣って行けてるんでしょ。「じゃない。甘くもないし。あなたらが消えても何か他を遣らされる。それが寝ずの仕事なら何日でも泊まり掛け。そうしてそのそれ

を上へ上げる。そんな私らがそうして、それで上は上なんだし。それでなくちゃ、ちゃんと回らない。」回らなくて困らないけど、そんなの。「ま、そうさね、見上げて空しかないんだもの。」あの、上には上しかないなら、何でも上にしか上がって行かないんですけど。上げたら上げっぱなしだよね、それ働いてるの？　上と繋がってるだけですよ。「その分、ちゃんと家族も愛人も養えてる。」それはお見事。あの、…実はあなたのあの彼女、顔なら知ってますよ大学の同窓なんで。「ふん。」で、そうして養える者を養うのが、あなたの働きでいらっしゃると。「随分な言い方だね、いいですか、この世には、上と繋がれる所にしか働ける所は有りません。それがこの世の全てです、隅から隅まで。」ふーん、その上の上には何が有るんでしょう。「上の上は上、そのまた上が上、それより上でも下でもない。」が故に、上は揺るぎない、って訳ですか。それでそこで働くったって何一つ動かせてませんよ。ぁ、彼女だけは働いてるかな、売れるものが有る内なら。売れるものを売って、男を渡り歩いてる。愛されて求められなければ売り物として通用しない、それがお金で回されて初めて働いたと言えるのでは。「それこそ何一つ一ミリも動かせてない。ただ回されてるだけで。」売れるものを売って稼げば立派な仕事で、お金も回して色色あなたに身に覚えの有るものを動かしてるでしょう。何も売らず金も稼がずに働くらしいあなたより増しです。尤も私なんて売れるものも有りませんけどね。「あ

のね、上と繋がれば、自ずとお金は付いて来るんですよ、そうしたもんなんですよ。お金は元元稼ぐものでも回すものでなくて、上には上の上で造られて、そこから降りて来て、使えるお金になるんです。」ああそうか、それであなたは働いた積もりになれるんですね。「それが働くって事。積もりじゃなく。それを分からないから、あなたは働こうとも出来ないんで。」体さえ売れたら働くんだけどな。「ものの売り買いなんて、晴れたり降ったりに身を任せているようなもので、そんな事をしてみても、あなたは何の働きもしてませんね。」上と繋がって、ぶら下がってるだけの癖によく言いますよ、でもまあ女を買ったり貢いだり、せっせと金を回してるだけ大いに世の中の役には立ってましょうけど。（二〇一六年九月七日）

女は黙らせた夢

　誰もあなたを殺そうなんてしてませんよ、良く周りを確かめて見て下さい…と、何処からともなく言われ続けて居て、その度に、ふわりと浮き上がるような体を回して、辺りを確かめても何もない。抑も、何処からともなく、が怪しい。怪しいなら知らん顔をして済む。「ぁねぇ、これ彼氏。」と、女は行き会う

なり高い声。にしてその凭れ掛かる男は少しだけ顔を背ける。どうせまた妻子持ちの公務員か。にしては表情が乏しい。前の奴は、もっと暗い顔をしてた分、目の奥がギラついてたような。妻子持ちの公務員に貢がせるコツでも掴んだらしいが、調子に乗るなよ。次の日か。女は一人で出掛けて行く。後ろに伸びる影の長さが、女の背丈とぴたり同じで、後を付けて時が過ぎても、その影の丈は長くも短くもならない。そのせいでその影を跨げなくて、それより女に近寄れないなら、影に話し掛ける。「俺は死にたいんじゃない。死にたかろうがなかろうが、死ねるからな。ダラダラ生きるだけの惚けた話しだ、眠くなるしかない。俺は殺されたいんだ。誰にって、それを探して、ずっと死なずに来た。お前だろう、俺が殺されたいのは。」話し掛けて直ぐ、影は女の足に吸い取られるように消えてしまい、女の弾む踵へ話し掛けて居た。なら影を追わなくては。しかしまさか女の足の肉の中へか。と辺りを見回すと、目に入る何もかもが、俺を殺そうとして居る、いや違う、そう思わせて、嫌でも俺を生かそうとして居る。見え透いた手口にしろ、俺は殺される事を拒まれている、そう思うと、どうにもここには居られない強張る心が捻曲がって、「殺されても殺されなくても構わない、俺はただ死にたい。」と、見透かされるための見え透いた嘘を叫んだ。振り返って、暗い目で足元の嘘吐きの姿を見下ろす女は、俺だけを誰にも悟られず静かに精確に殺せる形をして立ち尽くすにしろ、それをどう女に伝

えられよう。女の耳は俺の如何様な嘘で満たされて、それはすっかり濁って固まったろう。なら女を殺すしかない。そうすれば、俺が殺されたいただ一人の女を俺は失って、後はただ独りで死ぬだけなら、俺は俺を殺した事になる。いや手を掛けるのは俺でも、俺にそうさせたのが女なら、女が俺を殺したのは間違いない。「お前は俺を殺すんだ。先ず俺がお前を殺すからには。」と女の細い体を這いずり上がるような声を投げると、女は薄っすら笑みを浮かべ、それからその笑みが嘘だったのを示すためのような、鈍色の瞼を尖らせたような無表情を作って、背を向けて一歩踏み出せば、決して追い付けない所へまでもう逃げ切って居て、その姿が俺の目に残れば、俺は、俺が殺されたい女の姿を少しも失わないで、それで済むなら、果たして俺は殺された俺を、易易とも生き続けられようか。しかし女は、何時も不意に、有らぬ所から現れては、笑みも浮かべず、無表情を作りもせず、男に貢がせて居ると誰にも分かりそうな匂いで、自らをじわりじわりと汚して行く姿を晒して、俺の脇を黙って斜めに行き過ぎる。俺にもう女に掛ける言葉の一つも浮かばないのを、ちゃんと分かって居るかに。その度に、誰もあなたを殺そうなんてしてませんよ、と透き通った声が、俺を殺しに直ぐ側まで寄せて来ては、何もせずに笑うように、失われた女の影の方へに違いない、女の汚れを搦め捕るように引いて行く。(二〇一六年九月八日)

言語起源論

　殺される。誰にって、あいつに決まってる。殺しがあいつの全てで、あいつがまだ姿を見せなかった内は、誰が誰を殺すなんてなかった。あいつのせいで、何処をどう彷徨き回ろうと、あいつの所へ殺されに行くしかない。しかし、何時か知らぬ間に、どう殺されてそれからどうなったか、それを何も分からずには、殺されはしない。その殺される様を隈無く見て取って、殺される私とは何だったか、その明白（あからさま）な姿を殺されながら描き取れないでは、耐えられない。で、そのようにしか殺されようもない。そのために何が出来よう、と考えようにも、腐り掛けの落ち葉一葉を握り締めて、あいつの前へ進み出る他に仕様もない。で直ぐにその身は、あいつに殴り潰される。死んで甦って次に、木っ端を握り締めて進み出る。あいつは私を蹴り潰す。死んで甦って、石塊を持って進み出る。透かさずバラバラに引き裂かれる。死んで甦って、しかしもう持って行くものがない。有ったところで、どうせ何も分からぬ間に殺される。ならもう手ぶらで、ただ「殺す殺す…」とずっと呟いて、あいつと向き合った。「殺す？」「お前の遣ってる事だ、お前はただ、殺すんだ、殺す殺す殺

す…」「殺す殺す殺す…」とあいつに私の口が移った。で私は、私の殺される様を隈無く見て取れて、己の殺される明白な姿をじっくり楽しんだ。その私の屍を砕いたり潰したりせず、撫で回して放さないあいつは、そうしてただ「殺す殺す殺す殺す殺す…」と言い続ける。段段と舌が縺れるのは、そのずっと同じ動きを口が繰り返すせいで、それでも舌も唇も痺れて、もう動かそうにも碌に動かせなくなって、お気に入りの「殺す…」は、途切れ途切れの呻き声になるしかない。それを崖っぷちの、根を剥き出して今にも崩れ落ちそうな松の木の枝にぶら下がって居る奴が、一つ一つの呻くばかりの「殺す」を、転げるように楽しげに様様に言い換えて行く。でもどうして？と次に殺される誰かが尋ねる。「枝にぶら下がって死ぬに死ねず、ずっと逆様で見てたからね、落ち葉や木っ端や石塊や、萎んだ花に枯れた蔓、蛙の死骸や蛇の皮、蟹の殻、貝の殻、塵芥、虫の羽、鳥の脚、獣の爪や牙、もっと他にも、この世の有りと凡ゆる色色なものを握り締めて、でも甲斐無くあっという間の知らぬ間に殺されて行った姿は、一つとして忘れないよ。だって、それらはどれも、殺す、ときっちり同じ形なので。」それでそんな綺麗な言葉を唱えられるんですね。あなたは初めて詩を唇に乗せた人です。それでその詩をあいつが憶えれば、早速、「殺す殺す…」の繰り返しで傷んだ舌と唇を治し、その詩を朗朗と響かせ詠って、「殺す殺す…」しか言えないのより、もっとずっと速く一度に沢山の命を、あ

いつらしく易易と手に掛けられるでしょうね、きっと。おぉ、そりゃまた便利だ、なら、あいつの口真似をするだけで、それで、殺しなんて誰でも幾らでも遣り放題だぞ、ああ面白い、なあ皆。(二〇一六年九月九日)

大富豪と小舟の夢

この先は見捨てられた墓場しかない。手を合わせた事も誰かを弔った事もない私に何の用か。墓を暴きたい、でなければ、ただ墓石を蹴倒したい、ゲロを吐き付けたい、小便を引っ掛けたい、大便を塗りたくりたい、でも何の得もない。そうだ、私は絵描きで、廃墟やら陰惨な風景ばかりが売れて、そんな景色を求めて写生に行くのだ。何故なら、重い画材鞄を肩に掛け、体半分隠れるスケッチブックを抱えてる。で来てみると、墓に用が有るのでなく、川が溢れたか何かの時、墓場の脇に小舟を乗り捨てたままだったのを思い出して、それを取りに来たに違いない。しかしその頃の面影もない。墓は、初めから恐ろしく几帳面で曲がった線が大嫌いな奴に設計されたかに、きっちり縦横に同じ大きさに並んで、照明がきっちり四角く均等に当たって何処にも陰を作らず塵一つ落ちていない。暗鬱など悉く消し去った明快過ぎる眺めに見えたが、足を踏み

入れると、それぞれの墓の細かな所も、地面に敷かれた灰色の砂からそこをゆっくりと吹く風に至るまで、全てが縦横にきっちり並んで目が眩むようで、それは出口のない酷い迷路だった。やっと人影を見付ける。三十代半ば位の初めて見る顔ではない細身の女でその姿だけは縦と横の線を免れていて、それと少し距離を取って足を留め、間近の四角い墓に目を遣ると、それは石でなく色取り取りの細かなものをびっしり並べた棚だった。画材鞄もスケッチブックも何時の間にか無くして居て、替わりに棚から幼児用のお絵かきノートとクレヨンを取り出して写生を始めた。その女の娘らしいぴっちりした体操着の妙に長い腕と脚を剥き出す姿があちこち彷徨いて気を逸らされるせいで、手が独りでに動いて、描かれるのは墓場でなく、何処にも見当たらない古い小舟だった。まだ描き掛けなのに、それを画商が手荒く破り取って行く。でまた同じような絵が、すらすらと描かれる。「売れてるよ、凄い高値で。もっと描いてくれ。」と画商。「儲かり過ぎて税金対策で気が狂いそうだ。」パナマで不動産ですか。「さぁね。」何でそれ、こっちへ回らないんですか。「要らんだろ、銭金なんか。」あなたがチョロまかすにしろ、売れたのは私の絵だ、税務署が私を放っとかない筈だが。でも何でこんな小さな半端な絵が売れるかな、傾いて波に攫われそうでも、それが小舟に見えるかどうかも怪しくて。そうだ私は、もう十何年か昔、月も星もない真っ暗に晴れ渡った夜、この小舟で沖へ漕ぎ出し、舟の端を

踏み付けて転覆させ、そのまま潮に流されたんだ。戸籍も消され税務署とも縁は切れた。それを今やっと思い出すなんて、いや違う、夢を見始めてからこれを思い出すまでほんの一瞬だった。いや違う、抑もあの夜の事を思い出したんで、この夢を見始められたんだ。でも何で？　画商「俺は、使い切れない金を持て余してる奴らに絵を売ってるんで分かる。税金対策なんて成金の哀れな性さ。彼らは何を考えてるか。金の事なんか一切無くして、それで愛せるものは何かって、そればかり。それらしいものを見付けても結局金に絡め取られて、自らや誰やらの打算に行き着いてしまう。そんな打算しか愛しようのない人生を心底恐れ、大富豪でしか有り得ないのにほとほと嫌気が差し、それでも何も見付からないなら彼らは死にたいんだよ、自覚の有る無しは別で。あんたの描く陰惨な絵が無闇に高く売れるのは、そんな事で。でもどんな暗い景色も彼らの心を慰め切れずにコレクションはどんどん膨らんで、こっちはずっと儲けさせて貰えるって訳だ。」で？「それも嫌気が差せば、背中を押して欲しいんだよ、死に至る。それがこの小舟の絵で、これを手に入れる為なら全財産だって投げ出し兼ねない。」つまり、この出来損ないの絵を眺めれば、思い悩んでたのを吹っ切れて、晴れて自らの命を絶てる。やっと、ただで愛せる一つ切りのものが何だったか、それを身を以て見付けられるって話しか。命を引き換えにする、そんな人助けも有ったとは。どうせ私の手は止まらないんだから何とも

ならないけど。な事より、もし魂ってのが有るならだよ、暗い潮に流されて私は、それからどうなったやら。「こんな怖い絵を描けるんなら、きっとこの墓場の何処かに見付かりそうだ。」偶には嬉しい事を言ってくれますよ、ねえ。「長い付き合いだしさ。あんた、それを見付けに来たんじゃないのか。」で、もう手慣れた手は手で好きに小舟の絵を描かせて、私は迷うに身を任せ、ふらふらと墓を見て回って居る。迷いながらも三度は隅から隅まで見て回ったと思えて、やっと、女の横顔を凝っと眺めて居られる所へ行き着けた。それは決してこちらを向かず、十何年か昔のままの目と口元と、今は少し脹らんだ頬が、凍ったような沈んだ色艶を保って居る。そうして、墓に見える棚に収まる人魂を、縦横にきっちり揃える手を休めない。色取り取りのそれらは、並べられるのを嫌がるようで、その果てがなさそうな仕事の手に触れるのが、知りようもない誰かのものばかりにしろ、この世に迷う限りの恨みが、そこに含まれて居そうだ。そして女の後ろは、どれも墓に見せ掛けた棚で、女の指を待ち焦がれるかに人魂は、びっしり押し詰められながら、今にも零れ落ちそうにして居る。なのにそこに、私ばかりが見付からない。何故だろう。「死んでもね、まるで死に足らなくてまた死にたいから。って、もう分かってる癖に、あなた。」と、墓の外の闇の奥を捻るような耳障りな低い女に似た声が、私の唇を微かに動かせば、女の横顔を凝っと眺める所から動けないのが酷く居たたまれず、「でも死に足

らない者の墓場って何でしょう。」と、痺れる口を曲げ曲げ、その女に似た低い声で、女の横顔へ向けるかに尋ねても何も起きないなら、同じ口の同じ声で、「墓場っ…必ず忘れてしまわなければならない事を、必ず忘れてしまう為に、その全てを憶えて置く所。いやあれらは、どれもそうだ、人魂なんかじゃない、一繋がりの忘れようもない、そのそれでしかないじゃないか、全く。」と答えてみる。「それは分かり易い。」分かり易い？　当てずっぽだよ。「あ、間違えた？　いやその、欲を掻いてるのは、あんたの方さ。成金なんかより、大富豪が一人残らず身を投げてさえ何もなかったかのような、きっと思いも寄らない程の。おや、手が止まってるよ。」と言う画商はもう、税金対策も自らが画商であるのも忘れたかに、波の音も形も許さない真っ暗な水面に浮かぶ小舟に踏ん張って、激しく左右に体を揺らし、直ぐにも転覆させようかの構え。ふん、先に死んで見せられるのがそんなに嬉しいか。「アハハハハ、あんたにそれを言われるとはな。」と、これ見よがしの満面の作り笑い。で、直ぐにも彼は、その命の縁を踏み抜けば潮に呑まれよう。死に足らない身の残された欲ばかりが、そのもう決して浮かばない影を見送るしかないのなら、ここは何処。（二〇一六年九月十三日）

描こうとして花は何処へ行ったか知れない夢

　花を描くには、花と分かるようにではなく、花のままを描かなければならないにしても、さて、花を知らない。花など見た事も触れた事も、それが何か知ろうと望んだ事もないなら、これは何の夢か分からない。分からない夢なら、そのほんの僅かさえも決して分かるようにでなく、見た通りのどうにも分からない、そのままを書かなければならないな、醒めてから。でも、知りもしない花を探してしまう。花なんて間違いなく要らないと分かりながら。それとも、夢の分からないままが花だったか、とは、まさか何の望みかと訝りながら。（二〇一六年九月十七日）

それと窮まったそれが続いて行く夢

　確かに時の止まるのを、そこに、それと見た。なのに、時の止まらない耐え難さによって、そこにか何処か、止まる時から、引き離されて行く。尻切れ蜻蛉は、朽ちるままにも飛ぶ。（二〇一六年九月二十日）

夢日記の夢

　無い事は、有無を言わせず、必ずこちらへ向かって来る。有る事は向かって来ないし、こちらを向きもしない。無い事しか書けない。夢が書けるのは、夢なんて無いから。そればかりか、それを夢と知ろうと知るまいと、夢だなんて思いも寄るまいと、書けてしまうなら何であれ書けてしまった事は、片言隻句まで全て、ただ夢を書いただけ。夢のようにで有ろうと無かろうと。でもそうして、この世に有るもの全ては所詮虚しい夢だなんてのは、一切を夢と思えば暢気に安心して救われたようで居られる奴らの、何時もの嘘さ。でなきゃ、夢しか書けない無能を誤魔化すしらばっくれた言い訳か。有るのはただ、有る事だけなのに。それを無い事と結び付けずに措けないのは、有る事が有るままなのが耐えられないから。有る事と無い事の間には何の繋がりもない。どう足掻いても藻掻いても決してそれを係わらせる事は出来ない。そこへ有るにそっくりな精確な夢でも持ち込めば、有ると無いとを絡ませられると思えてしまう。それがきっと、考えるって事なんだな。何故考えなくちゃ居られないか、それは有る事から目を背けて、有ると無いとが綯い交ぜになってる景色を眺めてる気にでもならなきゃ遣ってられないからだろ。そうでないって言うなら、一度

も有る事に目を向けた事もなく、それともそんな、無い振りをして居られて、だって有る事は向かって来ないからね、で、ただ無い事を書いて、この世を夢とでも思い定めれば何となくそのまま死んで行けそうで、あれこれ考えるのを楽しんで生きて行けるお気楽さがすっかり身に付いちまってるって事かな。それが幸せの作法で、それが人生の知恵って言うなら言っとけよ。言わせて遣るさ好きなだけ。でもお前はもう、有る事から目を背けられなくなったんだろ。それが何で、夢日記なんて下らない（二〇一六年九月二十三日）

夢日記　終わり

***** ***** *****

石を食う人
石に食われて
もう居ないしね
（二〇一六年十月三日）

（殺す積もり…）

殺す積もりかね。さぁ。こっちは、何とか生かしたいね。さぞ、んでしょう。それとも、殺しながら生かしたままに生かしようもないなら、死ぬままに死なせて手元に置きたいのかな、出来ればずっと、違いますかな、それは。はぁ、巧い仰りようで。さあ、もうこうしても居られなくてね、じゃ。はい、でしょうとも、と、疲れて目を輝かす、もう戻らないだろう男を見送って、殺す積もりなんて有るものか、有ったらもう目を背けて、誰かに殺らせてる。ただ俺が居なければまた生きて行けたにしろ、俺が居なければ生きて来られなかったのも確か。と、こっちの好いような見方でもして。で、あいつはそうとして、さて、また殺しに行かなければ。殺すには生きてる奴を見付けなければ、とは言え、もう見付けてあるようなもので、そいつの事は知らなくても、そいつの所までゆっくりと上る道は続く。決まってそんなものしか殺しに行かないし行けない、そんな道しかない。右も左も何もなくて朧に赤い月の夜とはどうにも怪しいにしろ、ここしかない。それとも、ここしかなくて、少しもここではない。あんな月なばかりに、そう思い詰める儘にさせて置く頭を、道の匂いでも嗅ぐ

ように項垂れて。時さえ道の為にしかないのも、そんな事で。さてどれ程来たか、下を覗けば目も眩みそうな高みでは。だって初めから幅もない、行く先を忘れたら疾っくに足を滑らせて消え失せてたろう道では。尤もそんな例しはない。それとも幅もないなら高さも目には届かないとか。「時が何かを生み出すなんて大間違いだよね。」おっと、その声、着いたには着いたけど、高いな、ちっと。見上げられようか。「時は何でも削るだけさ。」まだ何も言ってないのに、そう先走られてもな。でもきっとそれは、時が何かを生み出す所から俺が来たって見抜いて、それで先手を打ったんだな。なら話しは早い。時は何も削りもしなきゃ呑み込みもしない、そんな所へ行けるんだよ。「で、何を背負ってるんだい、重そうに足を引き摺って。」ああそんな事、何でもない。俺があんたを背負っちまえば、俺の姿なんて。「ふん、まさか、お前の足の臭いのは何だ、哀れな屍をどれ程運んだやら。」足のじゃないよ。あんたの知らない匂いで、だからおかしく思えるだけさ。あんたはちっと高過ぎる所ばかりに居て、下にしかものを見られないんだね。降りておいでよ。「降りるなんて何でもない、何処へでも行ける。闇の底だって知ってる、ほらそこに。お前こそ、こっちの匂いを何も嗅げないじゃないか。ここいらで足を引き摺ってるなんて、お前だけだ恥ずかしげもなく。それとも背負ってる屍を放り投げでもしたら、足に翼も生えるかな。でその屍は、何て言い残したんだ、何処へ己を埋めて欲し

いか、それをお前に伝えて、でもそれがただ高い所だとしか分からなくて、それでただあの道を上るしかなかったんだな、違うか。でも埋めるったって、その時限り、直ぐに流れて何処が何処もないと来ては。いやそんな事さ、埋めるってのは。」あの道？あんたにあの道が見えるのか。「見えなくたって、お前の足の臭いので分かる。でもお前が背負ってるのは屍じゃないぞ、息が有る。それをお前が聞き取れないのは、殺すしか考えないからだ。でなきゃ、息をしなくて生きられる所から来たのかな、きっと。」うーん、何でそんな色色あれこれ喋れるんだ、あんたはただ、俺に負ぶわれればそれで良いのに、てのは愚痴か。どうしたら、あいつの口を塞げよう。でもそんな事考えても体が重くなって、益益あいつと喋るしかなくなってしまうぞ。ここは一つ、あいつの言う俺の背中の屍とやらを放り出す振りでもしてみるか。「だから屍じゃなくて息があるって言ってるだろ。」あぁそうか、あいつの目には俺は、死に損ないの俺とその俺を背負って足を引き摺ってる俺と、二つ見えてるんだな。でもそれじゃ背負ってるのを放る振りも難しい。でも凝っとしてるのも疲れるし、でんぐり返ってみよう。「アハハ、面白い。その放り出したのは何。知らない筈ない、言ってみろよ。でも、もう一つのお前とか、お前の影とか、そんな間抜けな言い草は聞かないぞ。」そうかじゃきっとこれは（どれ？）、あんたなんだ、あんただろ違うか。「そうとも、初めっからそう言えよ、じゃお前の背中に乗って

ないでは影もなく、なよなよと死に掛けの女の姿をした水の色で、ただその色の冷たいままで有りたい為に、陽に暖められて赤い血が流されなければならないんだ。「どの体に赤い血が流れてるって？よく見ろよ。お前の負ぶってるのは、萎れた草の葉だ。直ぐにも冷たい水の色に浸されなければ枯れてしまう。さっさとそこへ放ってくれよ。」成る程ね、んで匂いで魚が寄って来る筈だ、お前は、待ち焦がれられた水草か。いや、そんなものも何も背負ってない。あいつはもう、引き返して道を上って行くじゃないか、陽を浴びただけ真っ青に。さあ数えるしかない。ん？誰だお前。数えるんだよ兎も角。ああ、数えたぞ、一つ足らない。その足らない一つがあいつだ。でもどう遣って後を追えるんだ、あんなに青くて足の速い。こっちは疲れて重い足で。「足の速さなんて事じゃない。何なら引っ張り上げて遣ろう。そうして陽に暖まれば足の疲れも取れて、どんな高い所も歩き回れる。」そう言われてしまえば、やっぱり俺がお前を、星でも掴みたくなるウキウキと高い所まで追い詰めて、ぐさりと手に掛けるし

かない。一つ足らない数を揃える為に。それで自ずと水の色も冷たく保てそうで。「分かってないようで分かってるじゃないか。もう道なんて終わってる。さっさと牙を剥くんだな。」でもどう遣って、その姿が見付からないでは。だから数えるしかない。誰だお前。数えるんだよ兎も角。ああ、数えたぞ、一つ足らない。その足らない所だよ、姿はなくても。青ってのに騙されるなよ。色なら、どうにも全くただ赤なんだよ、水の色は除いて。手に掛ければ、その手はもうヌルヌルと真っ赤、何の姿が要るもんか。赤い血は直ぐに、その足らない一つに満ちて溢れて、それを待つ水の色へと真っ逆様に繋がって。「気安めの能書きはそれ位で、さっさと遣れよ。」…何を？「アハハハ、何を？だって。そうして、その間抜けな口のお前の牙で、お前はお前の胸を突き通したのさ。ドクドクと噴くお前の血の青い事、青い事。」青い血が何の役に、「立つもんか、だからもう何を思い残そうかも上の空で。」ふん、だから青には騙されないさ。ってそう言ったろ、さっき。さて帰るとするか、一つ、時は何でも削るだけってお前の言い草だけは、肯っておいて遣る。待てよ、まだ一つ足らない数は揃ってないぞ。誰だお前、そうだ、お前がその一つになれよ、いや、一つ揃えた数を全てお前が賄えば、それで。「で、誰と喋ってるのかな、お前が殺したお前。」蒸し返すのか、いや待てよ。俺が喋ってるのは、お前！だろう俺が殺した。いや違う、殺すのは何時も水の色。足らない一つを欲しがって、

それがなくてはどうにも済まないのも水の色。…なんて言ってみたって、当たり前過ぎてどうにもならないさ。「分かってるようで、何も分かってないな。水の色なんて、どうだろうと作り事。水の色の何も、誰にもどうにも確かめようもない。水の色に触れられるのは水の色だけさ、きっと。」それだって嘘だ。「何を今更。嘘だ、なんて何にでも言える。つまりは何も言えはしないって、頼まれもしないのに進んで本音を吐いて粋がってやがる。」で、誰が誰を殺したかもう一遍言ってみろよ、どう言おうと嘘じゃないか。って有るが儘を吐いてるのは、お前だ。そうやってお前の姿にお前の目を刺せば、ぐさりと数は揃う。「嘘にもなってない。何が数だ。誰が言い出したんだ、それ。何が何を殺すか、確かめてみろよ。お前独りの譫言だって分かりそうだが、数を数えるなんてな。」で構わないさ。お前こそ、殺しが何か分かってなくて、なら何を数えるも知りようがないからな。だけど、どうにも一つ、数えられなくちゃならないんだよ、一つ、殺し殺されて。その一つの他に何がある？有ったところで、そこを何時までも逃げ回るだけ。それで喉が嗄れて肉が灼けて陽を浴びるだけの中をのたうち回って、水、水、なんて水が何の事かも分からずに、分かったたようでしかなく呻いて、焦がれ死にってとこかな。いや、そんな話しはどうでも良い。あの辺りを流れて行くどの屍もみんなそんな事だしさ、分かり切ってる。「で、その一つがお前って事か。そんな己が、ウロウロとそこら辺りに見

えてるんじゃないか。」な訳ない。お前は水を知らないんだ。水の色なんて作り事って言ったよな、さっき。なら殺すって何か分かってないのは、お前じゃないか。いや違う。分かってない振りをしてるだけかな、その振りを分かってるか分かってないかは、知らないが。「で？」もう、で？も何もなかろうよ、有ったとしても、削られるだけの時が削られるだけで。お前に相応しいじゃないか。お前はもうお前の屍を背負っていて、それに飽きてそれを投げ出すまでの、その為の時だ。「で？も何もないんじゃ、そんな捨て科白が、やっとだろうよ、アハハ。」あぁ、そうしてお前は笑えるんだな。陽に暖められて赤い血の中を、お前はぐるぐる回って、その姿を、その姿のお前が笑うんだよ。それは、笑わされているだけなんだ。笑わされる中を、お前は何時までも、何も生まない時に閉ざされて、ぐるぐる回り続けるんだ。成る程、それは確かに可笑しいね、笑わすには居られない。でもそうしてお前は、殺されるだけの身を晒して、何処へも行けず、だって水を知らないから、そうして命を取りに来られるのを待つしかない。「じゃなくて、アハハ、俺が笑ってるのは、そんな話しで間を繋ぐしかないお前の姿なんだけどな。先に殺されのは、きっとお前じゃないか。いや違う。お前はただ殺しに行く為に生かされていて、殺されもしない。殺されるのは、そうだな、きっと、お前の逃れられない水の色が水の色を殺すのかもな。いや違うな。いやいや、そうだとしたら、水の色は水の色を殺

せもしないって事だな。で何だっけ？そうだ、お前は削られもしない時を、何時までも、殺しの事ばかり考えながら、できっと、あれやこれやの殺し方を次次に編み出しながら、赤い血を流し込んだ水の色に様様な彩りを映して、だってお前の目には水は何処までも行けるだろうから、そうしてこの世の果ての窮まるまでも、お前は、その度にあの道を上って行くんだろうよ、アハハ、って笑うんだってうんざりだよ、これじゃ。尤も、そんな所まで付き合う物好きな俺じゃないが。アーハッハァー。」てな事言いながら、お前はもう分かってる筈だ、狙いを定められて逃れられないってな。笑いも間延びする訳だ。殺されるのが待ち切れなくなったってか。どっちを見てるんだ、いや、どっちだろうと、どうでもないが。も何も、あいつは何時も、そっちしか見ていない、のそっちには何が見えるのかな、って見上げる身じゃ、買い被られたって、この世の果てなんて窮めようもないし、（二〇一六年十月十二日）

（三つ話しは…）

　三つ話しは有って、そのどれかを選ばなければならないかどうか、何時ものようにはっきりしないなら、それを加えて、四つかも知れないかもはっきりし

ないにしろ、それは空を飛べてしまうから。地べたを這うばかりなら、それぞれはそれでそのせいになりそうにしろ。で、初めの三つが並んで揃って、それぞれに際立ちながら巧く立ち回り、そうして、その奥に開く狭い窓からそのもっと狭い外を覗けるなら、話しを選ぶかどうかの話しは、要らないか後回しで済みそうで、ならもう、何の眺めか知れない内に、窓の外を高らかな声が響き渡って、耳を塞いで窓を壊したくなる。で耳を塞げたかはどうかな、でも窓は壊せたらしく声は已んだ。振り返ると、三つはまだ何食わぬかに、ひらひらと楽しげに立ち回って、その一つなど音だけかも知れないぞ、それもすっかり空っぽの、ならもう音でもなく、しかし、耳を塞げば良いかどうか、と迷えばもう、已んだ筈の声を追って、外をウロウロと飛び回っていて、それは、その声だけは追うなよ、と言い含められていたからと心付く。全く、その声は追うなよ、から始まったんで、でそれならと、その声を追ってしまう。三つ有る話しって何だっけ、そんなの要らない事。ただ声を追ってしまう。でもそれは、ただ耳で。そっちへ飛んで行くのでなく。なのでウロウロとそこら辺りを飛び惑うしかなく、すると、その声へ向かっての他にない、頻りと怒鳴っていて、それも、その声に向かって怒鳴るなよ、と言い含められていたからで、予めそう言われていなければ、知らぬ間に、声など何処かへ紛れていたに違いない。その怒鳴る誰かの、水の落ちる低い向こうへ逃げるような姿を見放すと、飛ぶままにも、

惑ってなどいなくて、そちらへとしか飛べない向きが真っ直ぐに見定められ、とは言え、そちらに何が有るでもないのも分かってしまえば、声は一つじゃなかった、ならきっと三つだったぞって決め付けたり、でも声を数えるなんてどうかしてるなって呆れたり独りで恥ずかしくなったり、それをまた打ち消したりしながら、何も食わぬまま戻って来る。何の為にかって、次の何かをするなよと、言い含められる為、そしてそれをまた、しに行かずには居られない。そんな事。物足らなくもありながら、その物足らなさが却って、それを繰り返させてしまうんだな、うん。ならそれなりに物足りても居そうで、するとまた、決められた通りかに三つの話し。それらを、丸く小さく輪を描いて飛びながら、その身の置き所の狭さに痛みさえ覚えて、錐揉みのように見下ろしている。さあそれで、一つは、声の話しと粗方分かった、事にして置こう。さて次の一つは何かな。もう日は暮れそうなのに裏の山へ。なら、日が暮れそうで山へは行くなよ、と言い含められたんだな。違いない。物足らなさに物足りそうにも。暮れそうな山なんて、どう見たって何が有るでもなさそう、と高を括るのが迷いの始まりで、昼でも夜でもない所で、山はこっそり何やらしでかそうって構え。いや、まるで違うかな、と思えば、そう思うのと思わないのと、体は二つに分かれて飛んで、でも山はやっぱり何やらしでかすんだよ、でも体は元の一つに戻らずに、ならそのやらかすに手を貸すか貸さないかの二つに分かれ直し

て、貸さないのは貸さないんだからとっとと消えて、さて何の手を貸すか、山は山を産みたいらしい、そっと。新しい山の産まれそうな辺りは、それは何か、見た事もないなら言いようもないような事になっていて、それで手など貸せる筈ないんだよ、こっちは飛んでるんだし、ならきっと身動き取れなくなって、山が産まれる穴へ吸い込まれて行くんだ、なんて、沈みそうで沈まない陽に斜めに向いて思い込んでいると、山なんて疾っくに幾つも産まれて連なって端から暗い向こうへ落ち零れそうで、その産み終えた小さな穴が見付かれば、それに背を向けて逃げたくて、どうにもならなくなって、ならきっと逃げてるんだとその儘なのが嬉しくて、ずっとこうなら、もう何を言い含められるもなく、口を開ければ甘い雨に喉も潤せて、行き成り雪なら翼は硬く尖って益益高く飛べる。それで薫って来るのは何。空の向こうを丸い胸で撫でるように探せば、まだ山を産んでいない山が山を産みたそうに濡れて恥じらうようで。その山の姿を追う姿に、舞う雪も流れて行くようなら、そのまま薫り果てたかに消えてしまえるんじゃ。って、そんな訳ないよ。こっちの産み終わった穴からまるで逃げられてなくて、その穴が塞がれなければ、どうにもならない。でもどう遣って。も何も、他にないなら、この身を投げて塞ぐしかないよね、って声が空を覆い尽くし、身は吸い寄せられるように。なようで、でも何処へ。空を飛ぶ身など、穴を埋めるに何の役にも立たないさ。なら何が穴を埋めるのかなって、

それがあの姿、薫るままの。は、どんな姿かって、薫れば薫る儘のそれがその姿。知らなかった？知ってたんだよ、忘れてただけで。それが真っ直ぐ穴の上に浮かんで真っ直ぐ穴へ吸い寄せられて、いや違う、すんでの所で。覚えてる？手を貸さなくて消えた、分かれたもう一つの体、それが小さく、翼も取れて、ただ柔らかい白い足で硬く冷たい巌の坂を静かに登って、穴の縁から歪んだ奥を覗けばもう、凍らせた身を解かして流したかに、穴へ。いや違う、でも何が。その薫るままの姿なら、そうしてそれで何も違わないけど、何かの何かが違う。それは、その、そうして塞がれたかどうか知れない穴だけから、真上に彼方に見上げられる、空高くの裂け目へ雪空が凍って、空はそこから東と西に二つに開いて拡げられ、そうして、その開かれた中に何が見付かるかだよ。見付かっちゃいけない、見付かる筈のないものばかりが、これでもかってわんさか見付かろうね。だって空が包み込んで隠していたものだもの、果てでもなく。その高くからなら、で下は怒鳴り声が地べたを沸き返ってようね、でもそれってどれも、穏やかな笑い声なんだよ全く、怒鳴ってばかりだった誰かの姿も流れて渦にクルクル回ってね、でもそんなの態とらしい屍の振りなんだよ、まあ祭りみたいな。笑えるよね。さてそんな事で、片付く事は片付いたんじゃないか。果てもない空の中は、何も片付かないままに。いやそれが、片付いたって事、って訳で、その一つはそんな事。でまた、何も食わぬまま戻って、次の何かをす

るなよと言い含められる。そしてそれをまたしに行かずには居られない。でも
何処へ。空は東と西に開かれてしまっては、何処へも何も、どの空の下から行
くのかな。ならきっと、そんな事を言い含められたんだな。違いない。物足ら
なさに物足りそうにも。なら、その何処へ、を知らん顔で飛び越えて、塞がれ
たかどうか知れない穴に真上に見上げられれば、薫るままの姿を真下に見下ろ
すままにも、東でも西でもない空を、見付かっちゃいけない見付かる筈のない
ものの向こうに見付けて、そこへ飛んで行けないかな。ん、その、かなって、
何に尋ねてるの。もうそこへ飛んで行って居て、そこで薫るままの姿に尋ねて
るしかないよ。それは、初めて知る薫り、山が何処まで連なろうと、きっとそ
の果てた、空からはぐれた雲さえ届かない外に佇むかに、薫り立つ。そんな姿
に迷ってしまって、何処へも何もは、その外でしかなくなって、そこから見下
ろし見上げる何処も彼処にも、まだ山を産んでいない山の、今にも山を産みた
そうにしているのが果てなく見晴らせて、待てよ、と、その果てのなさからや
っと心付くのは、そんな所からでは、もう戻れるのは、これっきり。で急ぐ事
もないと思えながらに急いで戻って言い含められるのは、何処へも何もない
空を見付けに行けよ、そこでなら薫る姿は揺らがないって、凄くはっきり、そ
れまでにもなくきっぱりと。なら探しには行かないで、ただ始めから空の儘の
空の下に連なる山に、薫る姿を見付けよう。なぁんだ、それなら見付けるまで

もない。ずっとそれを傍らに、馴れ馴れしく語らってても居たじゃないか、違うの。いや違うよね。これっきりの、もう何処へも戻れないなら、何処へも何もない空を見付けに行かなくてどうしよう、言い含められるままに。って見晴らせば、そんな空は易易と拡がって行って。ああこれでもう、何処へも戻れず戻らずにも済むんだな。でも、薫る姿は揺るがない、の、その姿は何処。ただ何処へも何もない空で、何処が何処とも何処から何処へも知れなくて。いや、そんな風に、薫る姿の見付からないなら、思い煩う事なんて少しもない。その姿の有るような儘に、それにこの身を添わせて行こう揺らがずに、でもどう遣って。水の落ちる低い向こうへ逃げるような姿なら見付かろう、あれは何の姿かな、どうにも見放せはせずに。と、惑うのか、惑っていないのかも、はっきりせずに。で、愈愈それを追うしかなくて、水の落ちる向こうへなら追えようか。でもそちらへ逃げるような姿と来ては、どうそれを追えようか。抑も、何の姿も追えはしない、姿ならきっと薫って来ように、などと今更に思い返されようとは。でやっと、これは惑うばかり、とはっきりしても、でもはっきり惑うって何、は兎も角、見放せないのはその惑う姿か惑わされる姿か、そのどちらでも有りそうなら有りそうで、それをそこに薫らせる空を見上げるか見下ろそうにも、空は。易易と見晴らせる空なんて、まだ山を産んでいない山の幼い呻きか、その産みたいばかりの空回りか、そんなもの。なら、姿を薫らせるのは何、

と落ちて行く水とその低い向こうを、まさかと見詰めようにも迷うのは、（二〇一六年十一月五日）

（それで身を滅ぼすで…）

それで身を滅ぼすでないにしろ、なら間違ってもいないらしくても、でもきっと、しないに越した事はなさそうで、何とも危なっかしくて、何時酷い事になりそうか知れたものではない、そんな事ばかりしていて、それがもう慣れっこで、そのせいでか何とか切り抜けて来られたなら、これからもそんなで遣って行けそうかな。そうして遣って行けそうな中に、どんな事も放り込んで回せそうで活き活きと。でもまるでそうじゃなかったって時は、行き違ったかにふわりと軽く来てしまって。そんなの分かってたかに分かっていたのに、そうなってしか見えて来ないのは、それらがどれも、どうにも取り返しようもなく間違っていたって事で。だってもう、ものの弾みにも身を滅ぼしたらそれでおく仕舞い、それ切り後はない。これだけは間違えようはなく、そうなってしかそう見えて来ないとも分かっていたかに。で、もうこれからは間違えはしないぞ、決して間違えてはならない、と心に誓えば、それで身を滅ぼすでないにしろ、

いや身を滅ぼせさえ出来ない、身を滅ぼすよりもっと酷い事になって逃がれようもなくなってしまう、そんな取り返しの付かない間違いを、あたふたとおろおろと何が何でも、これでもかとしっかりと、でもぐらぐらと遣らかしてしまう。そうして遣り抜けばもう、それっきり。そんな事なら、身を滅ぼすとか滅ぼさないとか考えずにいた儘で、間違ったら間違いに塗れて唸り声でも上げて紛らせてしまえば良かったのに、うだうだと。うっかり我が身を振り返って、沸き返るかに頑なに、その危うさと儚さに心を留めたのが、何とも拙かった。しかし、何時かはそれへ考え巡らすしかない定めだったとか。流れない山はなく、涸れない川なんて、もっとないと直ぐに分かるように。嫌な言葉だな、定め、何処で教わったんだろう。それともそれだけは教わりもせず、ずっと目の前に居座って、この見える限りを責め苛んでいるかな。まるでそこから産まれて来て、そこで育てられ、それを食い潰してでしか、出来る事も出来ないかに。いや喩えなんかじゃないし、出来る事なんて、出来ない事の残り滓だろうね。それ思い知らされて来たろう、どうでも良い事のように。にしても、間違っていないらしくて間違っていたのって、何だったんだろう。何だも何も、例えばそんな危なっかしいばかりな事なら数知れないにしても、ではと試みに数えてみて直ぐに飽きて、すると、その数えたまで程の数にも足らない。つまり何だろう。数えてみても何も数にならなくても、数えられはするので数えているの

は数えているのかいないのか、どっちだろうと、数えようとすれば幾らでも数えられ、何時でも数えるのを已められるにしろ、少しも数えられていないのかも知れなくても、何かの数は、数えようもなく数えられていなくては、数ならば。でないのなら数ではない。きっとそんなもの。そんなものの数に入らないものを、どうやってその間違いを見付けて直せただろう。間違っているもいないもなく間違えようしかなかったんじゃないか。だって、数でも有りそうでなさそうだもの。それを間違っていたって決めて掛かったのが間違っていたのは間違いない、何を間違うもなく。ものの弾みに身を滅ぼすなんて、これ程、間違いのない事もないし。うっかりしててそれを考えてみなかっただけの事で、そのうっかりに躓いて転げたかに、その危なっかしさばかりに目を据えて、それの間違いを数えようなんてしたのが、大間違いとか。いやそれだって怪しい。数えようのないなら、間違いを突き止めようもなかろうし。でもこんなの、きっと分かり切ってたし、分かり切ってたって、どうにもならない。で、数えるも数えないも、ただ一つ、身を滅ぼせさえ出来ない、もっと酷い事に、体を壊すか壊さないかの境目で何時も腹を空かして、懸かり切りで居るしかなくなってるって事。その、もっと酷いってのも、ちょっとした思い込みでしかないと分かりながら。間違うも間違わないもなく、始めから間違いしかないかのように。いやその、かのように、が、間違いの基らしくては、どうにも。なので熟

熟、間違いを数えようなんて事に逃げ込みたくなるんだな。なるものはなるんだから、どうにもならない、それで身を滅ぼしようもなくて。痛いのは、そっちだね。何にしろ、身を滅ぼせさえ出来れば、それっきりで済む、何一つ済ませられなかった儘に。つまり何を遣らかしたか、その間違いがどうだったかなんて、済ませられない儘に済むしかないんじゃ、どうだって構わない。その構わない身が、どんな姿をしているかって事。どんな姿？　それこそ数えようも探しようもない。成る程、それは酷い。思い込むも込まないもなく。そうか！やっと一つ、見付けたぞ。無くしたに違いないしろ、それが何かって事。この身を映せていたかも知れない、一つ切りのものを取り返しようもなく無くしたんだ、それは。きっとまるでそうじゃないにしろ、そうで有る事にしなければ、遣ってられないような、そんなものを。で、どうしたら良いんだろう、の、その行き惑ってそうな姿も映せないんだから、どうにもならない。それっ切りに、そんな事なんだ。で、もう映せないこの身に何が降り懸かろうと、それがどれ程痛かろうと、それこそ、ものの数に入らない。それっきりのこの身一つが、ただ一つ、一つと数えられるもので。それは、って、これだけど、そのこれの、一つ切りって、抑も何だろう。と映せない身は、またうっかりと忘れたとして、ぐるり見回すと、その見回せた中に有るものが全ての全てで、その全てが、一つ切りのそれ。そいつは、どんな姿をしてる。そいつにそいつの姿を映させて

みようか。そいつがそいつの姿を映せるものをどれ程持って回れるかは知らない。なら、こっちの思う儘の姿だって、何処かに映して構わないかな、なんて思う端から、そいつは、とてもでかくて、何も歯が立たなそうに隅隅まで凍り付いて、その冷たさを振り翳せば、何を殺すも奪うも出来ない事もなさそうで、で、そうなら、それに取り囲まれるこの身はきっと、凄く熱くて、その熱さに骨も肉も皮も溶けて、まるで小さく小さく血の塊で、その痛みったら、あちこちにぶつかる痛みなんかものの数じゃなく、一つ切りに窮まる、昼も夜もずっと逃れようのない痛みで、それならあれこれ声は迷わない、その痛みにぴったり嵌まる呻くようで叫ぶようで高らかに歌うようでもある声を、一つ切りに月も日も曇らし眩ますかに、繰り返して居られる。そんなものであるしかない。黙っては居ようのないのがせめてもの救いでかに。そんなの、少しも楽しくないけど、楽しくないって思い続けるなら、じゃ楽しいって何って、頭の端を掠めもしてる訳で、楽しくないを突き詰められるなら突き詰めたいな、なんて嘯く事も出来てそうな。さて、でもそんな事じゃないんだ。だって姿が映せない身には、その声だって映せないから。それよりこの身の内に滾る熱さ、それとそれを囲んで、山がどれ程流れようとさえ動かない、凍て付くばかりな有るものの全て。それをどうする。どうにもならない、なんて言い訳はない。だってその儘に身を滅ぼしようもないんだから、必ずそこに何かは係わって来ようし、

なら、こちらからも係わって行くしかなく、それはもうどうにもこうにも、そうしかない。でも、血の塊になるまで溶けたにしろ、何が熱かったのかな。痛みとそれを突き通して行きたい尖った真っ直ぐな声は確かに有って、そんな己の姿らしきものから目を背けたくて、凄く熱いかの身を捏ね上げたりしただけかも。その形が、血の塊の転げる姿とぴたり重なりそうなら、まあそれで構わないけどって。でも、それで冷たさにすっかり囲まれる儘では身は凍て付くばかりでは。でもどうやら何ともなさそう。凍り付くとか付かないとか、知った事じゃない事にすれば済む。それより、全ての全てな、とてもでかいそいつは、ただそいつであるだけで、何でも殺さずには居られないのかな。とは言え、何もが、その殺される儘じゃ、そいつの他にはもう何も無くなって、全てがただ凍て付く冷たさか、疾っくにそうでもなくなった何かに覆われてるだろうし、そうでないなら、そうさせない何かを探しに行くしかないじゃないか。「で、あなた何してるの、こんな所で。」こんな所？って、こんな所なんて所にずっと居る癖に。そうか、殺されたくても殺して貰えないとか、違うかな、いや知った事じゃないんだよね。「知らないなんて、何も有りませんよ、知ってる限り。」そうか、言われてみれば、うん。血の塊だよ血の塊、日も月も眩まし曇らす。火に掛けられれば、火を吹き散らす程の煙だって吐こうさ。何にだって突っ掛かって行くんだ、疲れ知らずに。で何をおろおろしてるの？死んで埋め

たあの身の蘇って戻って来るのが怖いかに。蟹の這うのが怖いのなら、そんなお祈りばかり唱えてる奴らを知ってるよ、何時も煩いだけが取り柄の。でも蟹は姿は良くても足らないものが一つ有ってね、そう、血だよ。赤い血だけが、黒黒と曇らせ眩ますんだ、星に架かる夜の虹さえも。で却ってその闇の虹が何を孕んでるか、しっかり見えて来ようね。そのまだ産まれてなくても、今にも産まれそうな虹を追って行くんだ、独りで。こんな所をこんな所と知ってるばかりな、あなた達の為にだよ他にない、まるでそうじゃなくても。それが血なんだ、おや？何だ！ちゃんと血の滴る獣の頭をすっぽり被って踊ってるじゃないか歌ってるじゃないか皆、いやはや酷いね、ハッ。全ては、いや全てかどうかなんて知らないけど、戻って行くんだ、血へ、血の向こうへさえ。それで、鋭く冷たく血を求めて已まない刃を懐に抱いているのを見付ければ、凍り付こうが怖くない、星に架かる虹なんてもう闇の下に従えて、何でも殺さずには居られないそいつの喉元に刃を突き付けて、さあそれで、そいつはどう出るか、踊るようにそれを追えば、刃は訳なくそいつの喉を掻き切って、もう何が凍て付くもない。とは言え、敵が全ての全てでは何の勝ちを収めたでもなく、また知らない冷たさの匂って来る向こうへと、刃のように反り返る身は誘われて、何故か殺されもせず声を掛けて来る者らを探しに行くしかなかろうね。で懐に抱いている真っ赤に焼けた刃を見付けて、それを凍て付く全ての全てへぶつけ

れば、そこもそれで、何が凍て付くもない。でもう、刃のように反り返る身は真っ赤に焼けていて、その熱さに誘われて、さて次はどの向こうだろう。なんて見晴らそうとしたのが、どうだったやら。あの懐かしい身は、何処からも蘇ってさえ来ないんだ、それ、怖いなんてもう通り越してるよ。だってどっちを向けば良いか、ずっと何の手掛かりも兆しさえなく静まり返ってるんだから。そんなの目の当たりにして、ただ何処に埋めたかが頭を離れないで、声が嗄れるか嗄れないかの境目で、空きっ腹が頼りでかに益益腹を空かせて、どっちがどっちもなく飛び回るしかない、なけなしの一つ切りの声で鳴いては。川は直ぐにも涸れろ、山はとっと流れちまえって、飛ぶ勢いの儘、巌に頭をぶつけるかに、繰り返し思い窮めて。でも何も起きないんだな、山か川の、それともせめてその境目の色の微かにも変わるのを見晴らそうとすればするだけ、その声の限りに、その見晴るかされるのは、(二〇一六年十一月二十二日)

(皆、泣いてるんじゃなかったのか…)

「皆、泣いてるんじゃなかったのか、鳴くようにか。泣きながら歌って鳴いてたろ、泣いてるって。何も聞こえない、耳のせいか。何か、石ころでも転が

るならそれで構わない、こっちへ来て泣いてくれ。呼んでるんだよ。黙って鳴くなよ、泣くも黙るも同じなら。それとも泣いて鳴くならそれが、黙るしかないのかな、その儘に。」悲しいねぇとか、死んでしまいたいよぉ、なんて喚いているのを聞くのがお好みですかね。そんな泣き言が浮かぶならもう、悲しみなんて乗り越えちまってますよ、知ってか知らずか軽軽と、いや知ってる癖して知らんぷりで、ふわふわと。そんな奴らの溜まり場ならきっと何処かのあっちです、鳴き真似で泣くのも聞こえましょう。ここじゃもう、誰彼なし悲しみともならないものに襲われた切り、打ちのめされて死んだ夢の中へでも死に果てて流されちまってますよ。ま、ちと声が滑ってますかね軽いんで。黙るしかないですって？暗い目でも競い合って？　そりゃ何てまた麗らかと楽しそうな。さぞや明日と言う日は明るく悦ばしそうに静まり返ってましょう思い描く儘にだんまりと。「ふん、じゃそう言うお前の声は何処なんだ。」そうなんですよ、そう尋ねられたくて待ってたんですよずっと。って言うか、あなたにこうして応えてでしか、声にならないんですよ。で、私の声は何処なんだって尋ねられてやっと、その何処かへ私の声は向けられもするんで。そうは言っても、その何処かなんて、まるで何処やら知れませんけどね、ただそうして知れない何処かへ私を連れて行ってくれるかも知れない何処かではありそうで。なのできっとそれは、一つ切りの常に傍らに開けられた門口のようでしょうか、見付かり

そうで見付からない。見付からなくったって、弾みで、するりと抜けられそうな。の、弾みなんて弾みでしかなきゃもう弾んでて、なら知らずそこを通り抜けられて、裸を晒すように恨みを呑んで私に殺されて戻らず何処へも蘇らず、なので違う何かに姿を変えているに違いない、あの懐かしい身の、その限りを震わせて鳴く空を張り裂くような声に撲たれて、この身はそれで、ちっぽけな血の塊にでも成った積もりの、さて何でしょう、知らない見えない、何かで居たくもない。でもそうして何かなら、その声を確と形に描けるように聞けたように、それより遠くの鈴の音のような微かな響きに誘われる振りで彷徨って、谷へ昇るか池へ降りるかの境目で、境目だけにそこから言葉が湧き出るんですよ、言葉ですよ、言が葉っぱになって並ぶんですかね事事しくか、まさかそんな筈ない。それならそれは地べたを這う、細い根ばかり深く降ろす、ただ頑なに小さな白い花花で、僅かに向きを違えて嗤み合うように並んで、露に酷く打たれて、濡れて脹れる土に縁取られてその儘どろりと冷やりと今にも呑まれそうで、でも私が腐った息を吹き掛ければ、それは初めぽつりぽつりと燃え立つ火で、それらが繋がって向きを揃えて指し示す先へ滑り降りるしかないなら池へ向かってて、なら谷なら死んでたな、って呟けるなら、まだ命は私のものらしいとやっと心付けたような。で、その心の焼けるように苦しいに違いないのにつるりとした胸を掻き毟れたなら、零れ出るのは何でしょうかね遣り切れな

くも。言葉ですよ、なんてね、はっ。そんな筈ない。それは初めからやっぱり、でも、さて何時の初めからか、ぽつんと燃える小さな火で、それはこちらを睨んで、私の命を酷く妬むかに尖ったと見えれば消えて、消えるそれを見てもいられないなら振り仰ぐしかない空を、そのまた向こうへ飛び去る振りで飛び去らない姿を、真っ直ぐ私の目の奥へ突き刺して来る、そんなそれのまた声を確と聞けたかに、火をこっそり裏返す遣り方を見付けたんだと分かって、その火は探すまでもなく私の胸に抱かれて点っていて、それを裏返せばさて見えるか見えないかの、それは小さな闇になって、それを何処へ届けるのが身の為かは分かった積もりになれて翼を生やしたかに勇めば、握り締められている刃で裂かれた肉の奥に、誰かは知っていても知りたくないので知れないで居られる、その誰かの書いた小さな筋書きでも埋め込まれているのを見付けてしまう。筋書きったって言葉じゃありませんよ、なら誰が書いたんでもないんでしょうかね。それはやっぱり、飛び去る振りで飛び去らない姿としか、それがただ小さくなっては、縮んだ血の塊の中を突き刺さって通り抜け、大きくなっては、翼の奥に畳まれてあった饐えた匂いを振り撒いて一際低い汚れ煌めく星を曇らせて、何の疲れか知らない色に、濡れて乾かない地べたを染めるような事。でも、そうじゃないんだとしたら、きっとそうじゃない。そのそうじゃないに書き換えてくれるのは誰、なんて探さなくても、地べたの色に疲れて塗れれば、それ

でもう裏返った筋書きに、なのでもう筋書きでもないような、その何処へでも飛び去れそうな姿を見付けられそうに心も弾んで、その弾みに、ずっと後を追って来た鳥の姿が、どうやら凡そ鳥ではなさそうと分かって、その煩く執濃く撥ねるような翼を引っ掴んで引き裂くと、捥ぎ取れたのは何だろう、「あぁそれ、刃を握り締めている己の腕じゃないか冷たい、きっとそうだ青白いから、それ。」それ何の脅しでしょう、麗らかと楽しそうに。鳥なんて奴らが、どれ程奥深く薄汚いものと繋がってるか、その緑に濁る何処も見てないような瞳の奥を覗けば分かる、それがぷんぷん匂うなんてもんじゃない、それは血となって流れもしない、ドロドロと行き成り、緑に濁るこれ見よがしに暗い空を全て覆い隠す程に脹れてでかい、何処へも飛び去らない姿の、その影のように押し被さって来るんだけど、何処に。振り返っても振り返っても、影も姿も逃げて行くんだけど、何処へ。でまた次の鳥が来ましょう。そいつも引っ掴んで、翼を引き裂くだけじゃ足らない、胸を握り潰して遣ろうなんて勇んだのが徒で、そいつは手から滑って、裏返った筈の元の筋書きに潜り込むかに、だって筋書きなんて元から嘘ですもんね、そんなようにして忌忌しく、こっちがもう何処へも逃げ場がなくて、殺しに手を染めた奴なんてのはもう誰にも何にも殺されようもないんだ、見放されて、己で己を手に掛けも出来ないんだ恨めしいか、その握り締める刃の血が、お前を動けなくさせるんだって、そんな声を、何処

からか、せっせと運んで来る振りを、これ見よがしに優しく柔らかく。でもそんなの何でもない、嗤って遣ろう。そしたらもう鳥は、己の嘴で己の胸を突いて首を折って己の頭を己の腸に突っ込んで丸まり果てて息絶える。血は流れないんだな、いやそんな筈なくてそれはきっと隠されてるんだなつて思い込んでも、見えない血は見えない。血が見えないなんて、どうにもそれだけは、有ってはならない、見てはならない、そうとだけは。で、その見えない向こうへ真っ直ぐ吹き過ぎる風を搾つて来ても血の色を映そうと目を凝らしに凝らして、それでやっと目に滑り降りて来るのは、あの低い星の曇り果てて汚い煌めきさえ失って滴り落ちるかに濡れた地べたへ今にも引き摺り下ろされそうな様で、でも地べたに触れる筈もなければ星ならば、それは苦し紛れに自ら拵えたかに地べたの僅か上に浮かぶ小さな薄い闇に溶けて消えそうで、その闇と星の擦れ合う狭間にやっと暗い色の血の滲むのを。でもそれって、何処か火の揺らめくに似てないかな、なら火で構わない、けど小さ過ぎる。と思えばそれは、真っ直ぐ向こうへ吹き去る風に攫われるかに血の匂いだけは残したげに見失われ。なら、そっちなんだ、先ずは振り返って次の鳥の追って来ないのを確かめてと、さてそれから風の向こうへ火を追えば、帰った事のない家へうっかり帰り着くかに、その門口から懐かしい乳の匂いも嗅ぎ取れようかな、ただ目には映らなくても火は確かに動かずに、そこに濡れてべったり俯いて、地べたへまで染み

通るようでしょうね。そうしてそこへ身を投げて、泥水のように見えない火を啜れば、味は。きっとそれは小さな闇と曇る星のあざとく混じり合って、でもまるで雲を掴むような事だなって呆れはしても、身はもう胸こそつるりと柔らかでも手足の肌はざらざら荒れた、星より汚れた目付きの幼子で、乳房を弄りながら、その味を心一つに吸っていて、でも誰が。脹らむ乳房から独りでに乳が出て、虚しく流れているだけでは、ただ暗い向こうへ。殺される筈のなかったのが、殺される為だけにここまで来たのなら、引かれて来られたように、もうさっさと殺されていないかな、なんて、間抜けな望みに微睡んでいるに違いないのに、その己の姿は何処。池へ降りた積もりが谷へ昇ってしまったかな、って呟けたなら、愈愈命は硬く固まって、転げる石ころと競い合いたいかに、石より硬い己の一声を探していないかな、何処を探してもその一声でしか有り得ない、そんな。吐けない血でも吐くように、乳の薫りに噎せるなら。そうして火に掛けられてたんですよ、血の塊なんでね、こっちはずっと、あっちっち。なんて、熱くなくてもそんな懐かしいここは我が家だぞって顔でもしてか、でも誰が。誰が誰がってまた、切りもなさそうなら、そんなこんなはさっさと踏み付けて、血の塊なんて、見付からない血の匂いの影でしかないって。そんな事にして、で、この刃で裂かれて殺された身を見下ろせている積もりにでもなって。いやまさか、先走り過ぎにも程がありますよね、まるで違う、裂かれて

殺されると決められた奴をまた殺しに行くしかないんだ、匂い立つ血の息で刃の根元を曇らせて、浮き浮きと勇んで見せてでも。それでこそ幼子に姿を変えた旨みってもんでしょ、幼子の姿なんて疾っくに消えてて良い訳だ、その旨みさえ吸い尽くせそうなら。で冷たい風がそろり追って来たかの辺りを振り返れば、その風にただ促されて嫌そうに、翼の羽なんて汚れ果てて、それでもこっちへ向かうしかない骨張った鳥が、二、三羽、地べたを転げて、翼の折れないのが恨めしげに。そうか、奴らはどう転んでも、血の塊には成り果せないんだ、抜けない羽の硬い根の棘棘と翼の肉を突かれるせいで。でもそれを嗤えるかって、嗤われるだけ奴らは楽しそう、嗤うこっちが嗤えも嗤われも出来ないって、それから逸らしたい目が硬い根のように固まって、ああそれはそっくりそれが血の塊だからだって、慰めにもならないけど、ならない程に慰められるかで、それでやっと戻るしかない所へ戻れたかに、熱い幼子の姿で激しく嘘泣きして、その熱さに脹らむ乳房の乳は幾らでも吸えて、時の歩みなど引き千切り、重い鎧でも纏えそうにすっかり体だけは、もりもりと若若しく出来上がって、そうなりゃ、さあもう時は限られてるじゃないか、もう再び幼子に戻れるなんてない、なら殺しに行くしかないけど、誰を。それ、疾っくに行方知れずだったたって、今更に心付いても、その面影の何も浮かばないでは、何とも。いや構うもんか、刃を振り回せる所なら何処へでも切っ先を向け、何でも突き刺して行く。

百万遍、風を切れば、風だって痛みに身を捩る。殺しても殺しても死なないんなら、望むだけ生かして置いて遣るさ、そいつを追って谷を幾らでも昇れば昇るだけ、谷は愈愈深く刻み込まれて、その冷えた底にそいつは、血を流せもしない肉の肌も露わに、でもそこでこの己を顧みたら、そいつがくるりと己の身になってしまっていないかな、なんて、また要りもしない、つるりと扱い難い悩みを、（二〇一六年十二月十一日）

（隠れようもなく…）

　隠れようもなく、時は去るばかりに流れも移りもせず、待っても満ちようもなさそうなら、何処もただのっぺりと明るくて、その明るいのが居たたまれないなら目を緊く見開いて時を戻すかに暗くも出来て、もう、何をどうなくしたかじゃない。受け取ってしまえば、掬い損ねた水がどの水か知れなくなるように、なくすに決まってる。そんなものを行ったり来たり繰り返し求めては、息を吸うように、与えられる儘に受け取って居たのは何故、も何もない。何故かなんて考えられるなら、繰り返さない遣り方でも何か見付けるか、受け渡しから抜かりなく、なくさずに済むようにか、なくしても済むようにかしてるので

は。とは言え、そのなくしたものの事なんかじゃないに決まってる。なくしたものを幾らなくしたってなくならないものは何かって事。って言ってみよう。それはなくすものをなくしてみなければ分からない、って訳でもない。何もなくさなくても、なくならないものはそこにずっとなくならない。の、そこってのがもう全くなくなりようもないんだし。なら、なくしたものなんてどうだって構わないかって言うと、全くなくならないそこに必ず、なくしたものの有るのは、忘れられようも変えようもなくて、なくしたのでは何ともならず、なくならないものと二つ揃いのようでは、どうにもそれは、なくされた儘で有り続けるしかない。でもそう開き直れて、どうなのか。開き直るも何も、ずっと開き直るしかなくされちまってないか。なくしたものをどうにか出来ないか、も何も、どうにか出来るなら、抑もなくしてないしなって、そんな風な口さえ利いてしまいそうに。で、この、穴のような小さな影をくるりと裏返したとしか見えない、月に翳せば透けようかの明るい色に染み抜かれた石ころに何か書かれてる、この刻まれた跡は。違うのか、なんて、そうして刻まれたものを幾ら調べ回したところで、刻まれなかった事が何かなんて、何も分からないんじゃ、どうにもな。で「そんな筈ありませんよ、私とあなたで刻んだんでしょ、間に誰かを立てるまでもなく。繰り返すのに飽きたのを知らん振りして繰り返し。受け渡しに抜かりは有りませんでしたよ。月の明るみのように。」なんて言わ

れちまって、ええ、忘れませんとも。忘れないから、なくしたものはなくされた儘。と言って、忘れられる望みを抱いたりはしてませんよ。ただ刻まれなかった事が何か、分からない儘では、なくしたものが、全くなくなりようのないものそっくりに、手に取れているような、指の間から零れ落ちるしかないような、どっちにしても消し去りようはなく。でも見付かる石ころどれにも、転がる影のような刻まれた跡が有る、明るい色が却ってそれを際立たせて。なら、刻まれなかった事は、必ず石ころの見付からない向こうに有りそうで、いや違う、その内のどれか一つ、石ころを手に取って、何が刻まれたか刻まれなかったかなど、知れたところで知れただけの事で、それよりその石ころが何か黙ったままに叫ぶのをじっと待つべきなのは、その石ころを拾ったからにはもう、その動かしようもなく一つでしかない一つで、それは。それがそれで、石ころではない石ころの向こうが、差し招いていましょうか。いや、で、そっちへ飛んで行けば、なくしたものを取り戻せようか、なんて事は言いようもなく、幾ら差し招かれようと、そんな向こうへ行ける筈もなく。つまり、なくしたものをなくした儘で、なくなりようもない所から身を剥がしたり、なんてのはですね。で「何故です？　身を剥がしてでも差し招かれるなら、そっちにしか、なくしたものも探しようも有りませんでしょうに。そうじゃないって言うんなら、さっさとその石ころは捨てて、何処へでも探しに行かないと、石ころそっくり

に黙って見せて。石ころより先に何かが叫ぶのを、でもまあ叫ぶ振りでしょうけど、それでも、あなたより先に石ころに黙って聞き取られたりされるのも後後ややこしいでしょう。」なんて言われちまって、何処へでもじゃ、何処を探してもいないと同じ。月の動く後を、その影を追い続けるばかりかに。そうして疲れ果てて、探さないでも、独りでに向こうから、見付け出されようとされて、見付け出されてしまうなら知らないけど。そんなの山の端から月が戻って来るような事だよね、なんて減らず口叩いてみたって、一つでしかないそれは、やっぱり何処にも転がってる石ころで、でも石ころって何だっけ。泥水を吸ってしまえばもう影もあやふやな泥団子とも見紛って、刻むも刻まないもどうって事ないとしたら、叫ぶのを待たれる石ころって、また誰に吹き込まれたやら、その大っぴらな嘘話し。いや、そんな事じゃない、誰と誰の嘘を見分けてみたって、与える誰かと受け取る誰かの他には誰も居ない、どっちも居ないかも知れないように。いや違う、居ないなら居ないだけの事、居るなら、うっかり居るだけのように。で石ころの嘘話しなんて捨てるまでもなく消え去れば、受け渡しの日付入りの刻まれた跡ばかり、受け取ってしまってなくした儘のものの、それは何処にでも見付かってしまう、何の色にもその境にも見渡す限り。でも何処にでも？って何処。そんな何処なんて何処にあるのかな。少なくとも何処と指し示せる何処かなんてない。どの色もその色なら、色に境なんてないよう

に。そうなんだ、そう言う事なんだ、でやっと身一つに収まれたような、そうして飛び回っていたんだよ。何処かへ、から身を躱し躱し。それってもう却って、どうにも逃れようのない何処かへ、飛べない何処かなら土の中へでも、突っ込んでないか。で「飛べない何処かも石ころ並の嘘の匂いがぷんぷん。土へ突っ込んだなら、そこを掘って、突き当たった岩根を廻り道して、土の底のもう、ふわふわと暗い腹の中とか。でもふわふわならきっと、見通しは投げ込んだ、光りが走るように立って、やっぱりそこでまた、土を掻く爪なんて鈍間過ぎて、光る程硬い翼の生えたのを知らずにも飛ぶしかなくて、後ろの暗さから滲んで追い縋って来る石の叫びに耳は囚われ、もう眺めはすっかり、後ろ前でしょうね、何が後ろ前かも後ろ前に。」なんて言われちまって、でも今更石の叫びって、何も言われていないと同じで、それってつまり、ただずっと前を見てその先に見付かるものを見付けるしかないって事で、考えなくても直ぐに分かるけど、そんなものを見付けてしまっては、もう何の先もない、そいつにもし光りの匂いを嗅ぎ分ける目でも有るとして、そんなのに睨まれたら、身は見る間に切り刻まれて、土の闇に擦り込まれて、それっきりとか。違います？

　でもその闇もふわふわなら、そうして睨まれたらそれで何もお仕舞い、頼みの月も影も再び拝めずに、って分かって、その儘そのふわふわした闇の後ろに身を隠すように揺らめく身を、こそばゆくも持て余し。で「何も隠れようも有

りませんよ、全くそんな風には。良く分かったでしょ。そんなに隠れたいんなら、隠れるのを已める事です。顕わなばかりな身の奥になら、隠したいものを幾らでも隠せましょう。時は満ちたりしませんものね、その限りなら。とは言え、そうして隠されたものは、隠された儘なのを嫌って、睨まれたらその身はそれっきりのあの目に、己の姿を晒したくて、あなたを恨んで憎んで、挑み掛かって来るでしょうかね。尤も身を躱す術なら色色戦い慣れたあなたはずっと上手で、そうして身を躱し躱し、ただそれっきりに隠れようもなくなって、」なんて言われちまって、そうか、なら隠れるなんて事じゃなかったんだって、あの睨まれたらそれっきりの恐ろしい目に、この身を骨と肉まで開いて晒す振りをして、それなら叫ぶまでも黙る儘でもないその反らした胸に微かに低くざわざわと、ねっとりと懐かしい海鳴りを聞き取らずには居られない。そっちに月の光りを浴びた海でも見えそうなら、やっと瞳を据えられる眺めに行き着けて、「何処へ？の何処がどっちの向こうか知れましょうかね。でも海鳴りなんて、石ころと同じか、石ころよりもっと酷い、だって初めから音で誘うんだから風に乗せて。石よりずっと、嘘のように硬いでしょ、風に磨かれるに任せ益益重いでしょ、音って。眺められるにしても、そこはきっと、なくしたものばかりが、誰にも忘れられた古い昔から流れ込んで出来た海でしかない暗過ぎる。いやそんなの海じゃない。そこへ行って見なくても、そこは、そこに根を下ろし

たように据えられた真っ直ぐな、ぐりぐりと血のような目で、何処も彼処も睨み尽くして、何もかもを、血塗れに、その血まで残らず吸われ尽くしたかに、それっきりお仕舞い、そんなばかりにしてるんじゃありませんか。そんなものらに囲まれて、なくしたものをどうするも何も有りませんって。で「で、そのそんなものらって何処の何でしょう、何処も彼処も、それっきりなんかじゃ済まないものばかりですよ、そんなの分かり切ってますよね、お仕舞いだとか血塗れだとか何が暗過ぎるだなんて、思い付きに見せ掛けた言葉の遊びの、風をべろり舐めるだけの叫ぶ振りだって。なら、それっきりの湧く泉でも探して見せましょうか、楽しめるのならアハハ。そんなもの楽しめるなんて、どうやら私だけでしょうかね。だって、そんなそれっきりを集めて来て、お仕舞いの振りなんて、しゅしゅって埃みたいに振り払って、それをそれっきりでなくすのって楽しいですよ、遣り方を覚えればね。どう遣ってもそれを覚えられないあなたには辛いだけかな、そんな私の姿からして。」なんて言われちまって、もう背を向けて黙るのさえ忘れて仕舞おうにも、どっちが背やら。すると、それが分からない裏側が背なんだって分かって、ならずっと背を向けた儘だったんじゃないか、の背ばかりが、酷く冷たく、背だけを剥がせるなら剥がしたいと望んでいるのかいないのかがどうも良く分からなくて、その姿って、もう何も与えられず受け取れず、何もなくしも出来ず返しも出来ず、そうして独りぼっ

ちなのを隠せも出来ず、とは言え、何に隠せないかの何も見当たらないなら、独りぼっちも窮まっているかで、そうして却って、誰にでも何にでも、醜い儘の言葉の腐った裏をなぞるような声も、心地良く語り掛けられそうで、「初めにあなたのものを受け取った時から、だって初めなんてそれが初めだったんだから、私はずっと独りぼっちかな。それともあれは、誰のものだったんでしょう。あなたのはあなたのなんでしょうけど他に。なくしたのは私だけの事で、誰かの手にでも渡っているなら。渡ってるんでしょ？」と、己の耳に届くまでの声に出してみる、見分けられる限りの闇の刺刺した粒よりも、思い掛けずもざらざらと。で「独りぼっちだってアハハ。的外れったら分かり易過ぎて笑うしかない。そんな事言えるのは、必ずあなたがそこに見付からなければならない、行き着ける窮みに、あなたの影すら見当たらないのを、見せ付けられてだけですよね。どう遣って、そんな所へ行き着けましょう、己の姿を失わずに。ただ弱腰な儘に後ろを向いて見付かる儘に己の見窄らしい姿を消して見たって、あなたはずっとあなたの儘ですよ。あなたを消したあなたの姿ばかりで、独りぼっちだなんて話しにしたら、まるで切りが有りませんって。」「切りがないなんて言い出すのは、疾っくに切りが着いてるんだな、なので行き成り、見付からない姿の見付からなければならない話し、なんてのを吹っ掛けて来る。で切りでしょ。でも切りが着くばかりでも切りがなくて、そんなの、何も言っ

てないのと同じ、でもその同じって、やっぱり何か違うのかな。いや待てよ、違うの違うがどうだか違うんだ、つまり、その違うどうだかのそこに、何か聞き忘れてる、あなたに話し掛けるには必ず聞いて置かなければならない、違うかな？」「ならその、何でも思い出される儘を伺いましょう。」「思い出せる事なんかじゃない決して。ならそうだ、あの事のあの、初めが初めになるより前の、他の何とも、いや何がない何とも違い過ぎてどうにもならなかったその時には、その、他に何を尋ねようもない、」「何でしょ。」「っ、あなたは誰ですか。」「あなたは誰ですか？　あなたなんて何処にも居ませんよ。」「って、誰の事？その誰ですか？のあなたって。ですよね？」「あなたが、あなたと声を掛けるあなたしかないでしょ。その居もしないあなたなら、語る相手としては持って来ないで、独りぼっちについて語り得るのは、あなたの何処にも居ないのを目の当たりにしてるので。尤も、語り得るにしても、そのあなたと語り掛けるあなたが居ないんだから、語り得るだけの儘に、全く語りようはない。居もしないあなたとだけ向き合って。そんなもの相手なら幾らでもさも語るように騙れましょう。」「へぇ、そんなあなたは、誰に何を語ってるんでしょうかね。私はあなたにとって、あなたの言う私の居もしないあなたじゃないし。あなたこそ、居もしない自らに騙るしかないのでは。で、そんなあなたなんですよ、私が、誰？と尋ねたいあなたは。の、あなたをあなたは、」「そうしてまた、あなたは

私に居もしない出鱈目なあなたの話しを騙っているだけで。」「いや何の。独りぼっちについては騙りようは有りません、それは私が独りぼっちなら、あなたがどう私を惑わそうとしようにも、言い換えようはなくて。」「それが騙りでしょう。あなたのただ一枚の、擦り切れた切り札の。」「そう。」分かって頂けたらしい、切り札。但し私のじゃなく、あなたの前で切り札を切ってみせる私の姿が、あなたのたった一枚の切り札って事。あなたはそれをあなたに向けて切ってるだけ。それっ切りなら、きっと独りで。そうして独りぼっちのあなたを、どうにかした積もりになってるだけで。」「また独りぼっちですか、ふん、そんなの何の逃げ道にもなりませんよ、あなた。あなたは誰ですか、って、尋ねたじゃありませんか狙い澄まして。で、その何処にも居ないあなたであれば、それは全く的を射ていて、その何処にも居ないあなたへの問い掛けに、あなたはずっと突き刺さって行くしかなくて、その周りかへと、あなたとあなたの問い掛ける居もしないあなたとでなくしたものが、なくなりようもなく取り戻しようもなく纏わり付いて来るのをどうにもならないと諦めたなら、あなたは誰ですか、なんてもう、どっちへ向いても尋ねようはないと知れて。それで、あなたなんて何処にも居ませんよ、ってあなたに答えられるのがあなたしか居ない、って言うあなたの姿を見詰めるしかないあなたなら、自らに自らの裸を晒すばかりなようにその自らの目に睨まれるしかないあなたの身は、切り刻まれなん

てはしないでしょうが、そのあなたを睨むばかりのあなたの何処にも居ないのを、それから目を背けようとするあなたの姿に重ねよう重ねようと、だってそうしてあなたの向こうへでも、(二〇一六年十二月三十一日)

断片　二〇一六

著者　u_

© 2016 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published